建築と社会

特　集

●アーバン・インテリア
—都市空間としてのインテリア—

9
1999

日本建築協会

日本建築協会企画・販売

出版図書一覧

1917年３月に創設された日本建築協会（当時・関西建築協会）は、すでに昭和初期には大阪近辺で住宅博覧会や建築講演会を開く一方、当時は入手しにくかった建築の情報を図書の出版という形で会員に提供していた。

＊

以後、創立周年記念事業として、その時代の動きをとらえて単行本を出版している。

50周年、60周年、70周年、そして80周年に、図書の出版が企画され、現在も継続して発行・販売されている出版物は、以下のとおり。

＊

購入希望者は、㈱日本建築協会事務局（TEL06－6348－0635、FAX06－6348－0634）まで。

日本建築協会創立60周年記念事業

建築技術選書

Ａ５判・130頁～160頁　発行:学芸出版社　本体価格¥1,200～¥1,400

- 1 茶室の話　岡田孝男
- 3 マイコンによる構造設計のすすめ（改訂版）　魚木晴夫
- 5 すまいの語録　茶谷正洋
- 7 構造計画とやさしい力学１　須賀好富
- 8 建具の知識と意匠　山片三郎
- 9 エレベータ・エスカレータ 立体駐車場　木村利雄
- 10 構造計画とやさしい力学２　須賀好富
- 13 医院・診療所の計画と設計　池田有隣・船越暉由
- 14 設計のコンピューター手法　飯塚英雄
- 16 石垣と石積壁　窪田祐
- 17 基礎と地盤の手ほどき　中堀和英
- 18 ショッピングセンターの計画　西脇顕正
- 19 住宅設計とインテリア　福岡喜久雄
- 21 住宅の家具　光藤俊夫
- 23 設備技術者のための建築再入門　光安義光
- 24 鉄骨構造の話　金多潔・甲津功夫・西沢英和
- 26 建物と地震災害　竹内吉弘・島田耕一
- 28 建築金物の知識　立野一郎
- 30 住宅三備心得帳　平田純一
- 31 住宅のエレクトロニクス　監修　小林郁
- 32 建築塗装の手引き　児島修二
- 33 建築式典の実際　若林嘉津雄
- 34 建築設計と高齢者・身障者　吉田あこ
- 36 日本壁　山田幸一
- 37 身近な耐震設計法　前川陽一
- 38 住宅の照明　監修　大島博
- 39 建築を志す人びとへ　日本建築協会出版委員会

特装本
火災安全学入門　岡田光正

選書シリーズは、在庫図書を掲載

日本建築協会創立60周年記念事業「建築技術選書」姉妹篇

〈プロのノウハウ〉シリーズ

四六判２色刷り　発行:学芸出版社　本体価格¥1,600～¥2,500

- TQCから見た建設業　荒木陸彦
- 躯体工事監理のチェックポイント100　須賀好富
- 空調設備のトラブル50　建築設備トラブル研究会
- 衛生設備のトラブル50　建築設備トラブル研究会
- 現場マンのアイデア発想　合原一夫
- 建築基準法の実際　矢吹茂郎
- ニュー組積建築のすすめ　福島孝之　他
- 建築物の消防法を読みこなすコツ　高木任之
- 鉄筋工事・本音の現場学　荒川治徳
- 建築基準法の難解条文を読みこなすコツ　高木任之
- 工業化住宅・考 これからのプレハブ住宅　松村秀一
- 鉄骨工事の現場学　石田満裔
- 建築紛争の実際　岡本辰義
- 仕上工事監理のチェックポイント　日建設計監理業務研究会
- ゼロ災への道 建設現場の安全管理活動　表　一郎
- 木造住宅のしくみ 在来工法の基本と応用　浅野平八・東　敏博
- コンクリート工事のチェックポイント100　加賀秀治
- インテリアコーディネートの100ポイント　町田ひろ子監修／松本　茂・村元俊子著
- 新版 建築基準法を読みこなすコツ　高木任之
- 木づくりの常識非常識　上村　武
- 建築関連法規を読みこなすコツ　高木任之
- 都市計画法読みこなすコツ　高木任之

日本建築協会創立70周年記念事業

選書特装版

Ｂ５判　発行:学芸出版社　本体価格¥2,800～¥3,800

- 構造コストと経済設計　須賀好富
- 新・建築と設備の接点　宮脇　毅・南部　武
- 建築設備の健康診断　牧野　茂
- 外壁構法チェックリスト　飯塚五郎蔵
- 水にまつわるトラブルの事例・解決策〈建築篇〉　「建築漏水」編集委員会
- 建築・都市・住宅・土木ー情報アクセスブック　菊岡倶也
- 建築デザインのための構造計画　須賀好富
- 場所打ち杭の設計と施工　阪口　理
- 建築と緑　瀧　光夫
- 入門・建築積算　生島道春
- 水にまつわるトラブルの事例・解決策〈設備篇〉　「設備漏水」編集委員会

昭和生まれ　関西の建築家50　1987年

Ａ４判　企画・発行：日本建築協会　本体価格1,500円

日本建築協会建築クラブ朝食会300回記念
講演記録集

話のはなし　1997年

Ｂ６判５分冊　企画:日本建築協会建築クラブ　１セット10,000円（消費税含む）

民間（旧四会）連合協定

工事請負契約約款　Ａ４判のみ取り扱い

工事請負契約書・仲裁合意書・契約書使用上の留意事項
１部¥230（消費税含）送料 実費

日本建築協会創立70周年記念出版

住宅近代化への歩みと日本建築協会　1988年

Ａ４判　企画・発行：日本建築協会　本体価格1,500円

日本建築協会創立75周年記念出版

工高生デザインコンクール入選作品集　1992年

Ａ４判　企画・発行：日本建築協会　定価2,000円

日本建築協会創立80周年記念出版

建築を志す人びとへ

Ａ５判　日本建築協会出版委員会編著　本体価格1,800円

30's EYE- 21世紀へのエスキス
第33回
長田直之
I.C.U.
状況と貧困
（再掲）

「30's EYE-21世紀へのエスキス」をテーマに、30代を中心に様々な分野でご活躍の方々をゲスト講師に迎え、従来の講演会形式とは違う「語り合い、情報交換を行う場」をつくりたいと考えています。気軽にご参加下さい。

日　時　1999年 9 月24日(金)
18:30—20:30
会　場　日本建築協会サロン
＊大阪駅前第３ビル21階
講　師　長田直之
定　員　30人
＊申込者多数の場合は抽選
参加費　会員 1,000円、一般 1,500円
学生500円引（飲物付、税込）
＊団体会員扱いは１社１名に限る
申　込　９月17日(金)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名：30's EYE
②氏名
③個人会員、団体会員、一般の別
④職場、学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を９月20日(月)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
TEL.06-6348-0633
FAX.06-6348-0634
〒530-0001
主　催　㈳日本建築協会事業委員会
若い会員の集い小委員会
担当主査：山隈直人／kt

状況の貧困—このことを、僕が新しい状況を切望しているかのように理解してはいけない。僕はいま、新しい状況を求めているのではなく、そもそも、もろもろの状況から放免されることを切望している。僕は、自分が貧困を—外面的な貧困も、最後には内面的な貧困も—そのありのまま明確に認めることができ、しかもその結果何か好ましい事態が明らかになる、そのような環境を切望しているのである。

—steal/W.B.（長田直之）

長田直之（ながた・なおゆき）
1968年　愛知県生まれ
1990　福井大学工学部建築学科卒業
1990-94　安藤忠雄建築研究所
1994　I.C.U.共同設立
現在　大阪芸術大学非常勤講師
＜受賞＞
1995,96　SDレビュー入選
1998　JCDデザイン賞優秀賞
＜主な作品＞
1997　KANTAN HOUSE
1998　Nishino Office
1999　Na
Ig





Ig

講演会
設計者のための写真術
吉村行雄
北欧の近代建築を例に写真を語る
（再掲）

今年度の取り組みとして写真による交流の場を設けるはこびとなりました。建築から写真に転進された建築写真家の吉村行雄氏をお招きいたしました。建築設計にとって良いお話を聞く又とない機会かと思われます。多数のご参加をお待ちしております。

（事業委員・酒井重治）

写真は建築家にとって欠くことの出来ない存在と言えるのではないでしょうか。移動が到底不可能な建築作品を知らせるメディアとして、古今東西の名建築を設計の参考にするためのツールとして、あるいはプレゼンテーションのための表現手段として重要な位置付けにあると思われます。
今回は、建築に携わる皆様が写真をどのように撮り、見て、活用すればいいのか。設計に役立てるための写真の撮り方といったノウハウから、設計行為の中での写真の活用の仕方、建築写真を写真家に依頼するときの心構えまで、建築と写真の双方の世界を経験した目を通して、皆様のお役に立つヒントになるようなお話をさせていただければと思います。
同時に最近の私のテーマである「北欧の近代建築」をスライドでご覧いただく予定です。

（吉村行雄）





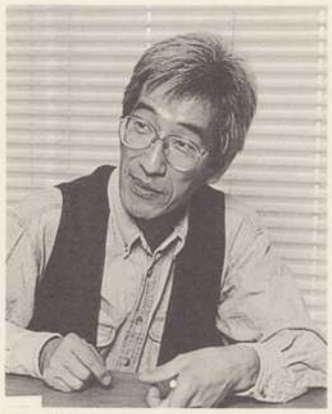
吉村行雄（よしむら　ゆきお）
1946年大阪市生まれ
1971　武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業
竹中工務店入社（本店設計部）
現在　総本店広報課長
一級建築士、建築写真家
受賞
1968　新建築住宅設計競技二席
1994　全国カタログポスター展で写真集が通産省生活産業局長賞
写真活動
1971年より設計業務に携わる傍ら、建築写真撮影を行う。1984年より総本店広報のPR誌・社報等にて建築写真活動。国内各地で個展・グループ展、1998年にニューヨークで写真展を開催。

日　時　1999年 9 月29日(水)
18:30—20:30
会　場　日本建築協会サロン
＊大阪駅前第３ビル21階
講　師　吉村行雄
一級建築士、建築写真家
定　員　30人
＊申込者多数の場合は抽選
参加費　会員 1,000円、一般1,500円 ＊税込
申　込　９月21日(火)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名：講演会「設計者のための写真術」
②氏名
③個人会員、団体会員、一般の別
④職場・学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を９月22日(水)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
TEL.06-6348-0633
FAX.06-6348-0634
〒530-0001
主　催　㈳日本建築協会
事業委員会情報小委員会
担当主査：酒井重治

講演会
澤　良雄
オールディーズ・デザイン・メモリーズ
(Oldies Design Memories)
—古建築の謎解き—

古建築は遠い過去のものであり、再び持ちえないという懐古的な情緒から理解されがちである。古建築を過去のものとせず、造形上なり構成上なりの点で、現代の私たちを啓発してくれるものとして、建築家の視点で再検討を加えてみた。
資料をもとにスライドを上映しながら、人口に膾炙している以下の建物を例に、古建築の謎解きを試みる。

・夕日に映える漆喰塗りの防火壁
　<閑谷学校>（岡山）
・宴の空間の流れは、捩れ乱れる
　<流店>（後楽園・岡山）
・自然の中に浮遊する客殿
　<對潮楼>（福山）
・数奇な運命、庭に浮かぶ川御座船
　<舟屋形>（相楽園・神戸）
・暗さに映える素材感
　<灯心亭>（水無瀬神宮・大山崎）
・多目的に使う拝殿
　<桜井神社>（大阪）
・晴と褻が一体となった書院
　<月光殿>（護国寺・東京）
・「外」の<三仏寺>（鳥取）
　「内」の<龍岩寺>（大分）
・ミニ異国、長崎唐寺の濃密空間
　<崇福寺伽藍>（長崎）など



澤　良雄（さわ・よしお）
1945年　徳島県生まれ
　東京大学建築学科卒業
1969—71　磯崎新アトリエ勤務
1972　アトリエサワ設立
1992　ドムスアカデミー（ミラノ）特別講義
1993.10—94.1　リエージュ大学（ベルギー）客員教授
　日本建築の伝統的空間論を講義
主な作品
1982　伊丹市立緑ヶ丘体育館
1984　伊丹市公館「鴻臚館」
1991　伊丹市営斎場
1992　ハッセルト市セレモニーハウス（ベルギー）
1996　太山寺塔頭安養院書院
1998　小倉城庭園小笠原会館

この会をきっかけとして、実際に皆さんが現地に足を運び、空間を実体験することをお勧めしたい。（澤　良雄）

日　時　1999年10月22日(金)
　18:30—20:30
会　場　日本建築協会サロン
　＊大阪駅前第３ビル21階
講　師　澤　良雄／アトリエサワ
定　員　30人
　＊申込者多数の場合は抽選
参加費　会員1,000円、一般1,500円
　学生500円引（飲物付、税込）
　＊団体会員扱いは１社１名
申　込　10月15日(金)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
　①催し名：講演会・澤良雄
　②氏名
　③個人会員、団体会員、一般の別
　④職場・学校名
　⑤参加証郵送先
　⑥連絡先電話番号
　をお知らせ願います。
　＊参加証を10月18日(月)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
　大阪市北区梅田1-1-3-2100
　TEL.06-6348-0633
　FAX.06-6348-0634
　〒530-0001
主　催　㈳日本建築協会事業委員会
　若い会員の集い小委員会
　担当主査：田畑重明／坂倉建築研究所

出版委員会企画
第21回<プロのノウハウ>講座
木造住宅監理の話

著者は、小規模な木造住宅の現場監理のむつかしさを、切々と訴えています。職人集団によって構成される現場では、監理者は、ヘルメットをかぶらない職人、命綱を持たぬ職人、タバコを吸いながら仕事をする職人etcたちとつき合っていかねばならないのです。そのなかで、建築主・設計者・施工者が三位一体となって良い仕事を完成させるための努力をしいられているのです。しかし、筆者はそのむつかしい工事監理をまるで楽しむかのように、職人と上手につき合って、手抜きのない良心的な工事をすすめていきます。読みすすんでいくうちに、そのたくみな監理技術にひきこまれていきます。また、施主や施工業者に“かくあってほしい”という要望も書かれていて、建築にたずさわるすべての人たちに良識と前進へのメッセージがこめられています。一般家庭にも、一家に一冊そなえてほしい本だと思います。
今回は、とくに中小工務店の現場監理者や、これから家を建てられる個人施主の方には有益な講座です。この機会にふるってご参加下さい。

出版委員会委員　前田邦江

日　時　1999年10月29日(金)
　18:00—20:00
会　場　日本建築協会サロン
　＊大阪駅前第３ビル21階
講　師　山田　修／修建築事務所長
定　員　30人
受講料　会員1,800円、一般2,000円
　（消費税を含む）
テキスト　『木造住宅監理の話』
　テキスト代　特価1,700円
　（消費税を含む）
　＊当日、持参される方は不要。
申　込　本会事業課へハガキorFAXor電話でお願いします。
　①催し名（「プロのノウハウ講座21」）
　②氏名
　③個人or団体会員、一般の別
　④職場名or学校名
　⑤受講票の送付先・電話番号
　をお知らせ下さい。
　先着順で受講票をお送りします。
申込先　〒530-0001
　大阪市北区梅田1-1-3-2100
　㈳日本建築協会事業課
　TEL.06-6348-0633
　FAX.06-6348-0634



山田　修氏（やまだ　おさむ）
神戸工業専門学校（現神戸大学）卒
修（しゅう）建築事務所長、大阪市立大学・梅花短期大学講師、韓国古文化研究会主宰、日本建築協会・日本建築学会・大阪府建築士会の役員・委員
日本建築士会連合会長賞・韓国観光公社賞・釜山建築士会功労牌を受賞
●主な著書
『図解建築構造設計の学び方』オーム社
『わかりやすい　住まいの法律』相模書房
『韓国古寺探訪の魅力』学芸出版社
他、多数
●主な作品
大鹿の家、羽曳野の家、石切の家
島定商店ビルなど

建築と社会 9 1999
ARCHITECTURE AND SOCIETY
JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN

1917年創刊　第80集／通巻930号

今年の表紙
表紙デザイン　安里俊久

CONTENTS

特集●　アーバン・インテリア—都市空間としてのインテリア

[総論1]　アーバン・インテリアとは何か●榊原和彦 — 14
[総論2]　都市における人間の行動とアーバン・デザイン—アーバン・インテリアにおける近代都市空間のゆらぎの形成—●材野博司 — 20
[設計者からみた Urban・Interior]　アメリカ村・ビッグステップ●井口勝文 — 24
博多リバレイン—アトリウムガーデン●村田琢真 — 26
[事例紹介]　(1) Stop Over〜都市のオアシス〜MBS毎日放送横通路／マルビル／アメリカ村三角公園／JR神戸駅東側・水の壁(WATER WALL)／ホテルリッツカールトン前舗道 — 28
(2) Walk Through〜楽しみながら歩く〜ディアモール大阪／クリスタ長堀／梅田阪急百貨店前通路／西梅田ガーデンシティ／博多天神地下街／京都産寧坂 — 29
(3) Stay Here〜滞留を楽しむ〜神戸キャナルガーデン／福岡大丸エルガーラ／神戸大丸横回廊／アプローズタワー — 30
(4) Come Together〜人が集まる〜コムズガーデン／東京国際フォーラム／神戸ハーバーサーカス／京都高島屋エントランスホール／ヒルトンプラザ — 31
(5) Walk Around〜空間の変化を楽しむ〜阿倍野ルシアス／福岡キャナルシティ／京都駅ビル／恵比寿ガーデンプレイス — 32
(6) Symbol〜アーバン・インテリアの仕掛け〜神戸大丸前時計のモニュメント／近鉄難波駅構内ベンチ・照明／ディアモール大阪の楽器のオブジェ／ハービス大阪のパイプオルガン／ATC前階段 — 33
海外のアーバン・インテリア●ベリー史子 — 34
[総括]　都市空間のインテリア、インテリアとしての都市●加藤　力 — 36

会告　30' sEYE㉝長田直之「状況と貧困」.講演会・吉村行雄「北欧の近代建築を例に写真を語る」.講演会・澤良雄「オールディーズ・デザイン・メモリーズ」.<プロのノウハウ>講座㉑木造住宅監理の話. — I

作品作風　つくば国際会議場（エポカルつくば） — 2
東大阪長田東配送センター — 6

gallery　阿倍野の家（菅正太郎）●川上比奈子 — 8
Sketch Book　各地にみる建築作品8点 — 10
建築の眼　伝統行事がつなぐ町衆と新住民●鈴木克彦　創る喜び●西川靖一
雑誌の功罪●前川治彦　自然の渡り路●七字祐介 — 12
Book Station　短評4題●河崎敦子・塚口明洋・辻川ひとみ — 37
W　座談会「福祉関係者に聞く」—老後も住み慣れたまちで暮らせる社会をめざして — 38
素材と技術が生み出すデザイン　「風」—心地よさを求めて●中川千裕 — 40
法令コーナー　阪神・淡路大震災と神戸の地盤—「神戸JIBANKUN」の構築—●岩崎哲哉 — 42
構造の頁　鉄骨のモルタルによる重防錆●塚崎　征 — 44
設備の頁　ドライ厨房の効能と採用事例●武政英次 — 45
基礎講座　泡消火設備—1—●由上雅章 — 46
REPORT　アサヒビール吹田工場を訪ねる●宮内　宏 — 47
information　ル・コルビュジエUNITÉ.畠山直哉「UNDERGROUND」.道具の心理学—INAXギャラリー大阪—.JAPAN HOME SHOW99.国際デザイン・アオードの受賞者.10月は「住宅月間」.「環境・エネルギー優良建築物マーク」.マンション特別セミナー開催.JIA市民大学講座.環境共生住宅技術者講習会.「建築史探偵団」参加者募集—大阪市立博物館・土曜講座— — 48
投稿　JR奈良駅舎、保存万歳！●柴田正己 — 49
月間の動き　平成11年6月分 — 50

■特集予告
10月号／木とともに生きる
11月号／私の空間作法
12月号／第46回青年技術者

編集委員会（平成11年度）
■副会長　金多　潔　葉袋　公明
■編集理事　荒巻　恭士　井上　豊　小島　雄　佐野　吉彦　竹中　統一　立野　一郎　真塚　達夫　松村　慶三　◎宮田　照久　山田　修
■特集小委員会
□計画分科会
★計画系　伊縫　憲幸　梅村　宏尚　小浦　久子　※鈴木　克彦　田中　直人　紅谷　昇平　松川　敏正　松田奈緒子　横関　真紀　吉村　英祐
★建築計画系　上杉　秀隆　江副　敏史　大村　昌聡　※荻窪　伸彦　菅野　忠司　笹村　欽也　佐藤不二男　桜井　則雄　塚本　史郎　服部　光宏　山本　匡　★インテリア・住宅系　※石川　佳子　加藤　力　北浦かほる　小梶　古隆　小島　保人　中田　誠　中村　孝之　中村　雅人　西田　和子　畑　康之　ベリー史子　水谷　美香
□構造分科会　岩永　速典　※大氏　正嗣　金田　興熙　河野　隆史　木下　隆嗣　岸本　一誠　楠本　隆　佐治　明志　田中　剛　田辺　太一　陶器　浩一　松村　和夫
□設備分科会　梶井　宏修　河津　隆之　近藤　正一　田ノ畑好幸　西岡　道雄　野口　太郎　堀内　一夫　桝井　貴廣　村上幸三郎　※谷津　和久　山根　敏和
□施工材料分科会　植田　実　※小椎八重猛
□法令分科会　太刀川丈爾　十倉　毅　能美　敏男　野口　幸忠　福井　茂和　池口　和雄　亀谷　周二　黒木　省二　椎名　辰之　田村　俊郎　※浜野　幸雄
■作品作風小委員会　赤木　隆　秋山　茂　朝倉　一晃　川上比奈子　倉渕奈千子　杉本　浩　寺岡　宏治　中村　文紀　藤城　義丈　△前川　治彦　牧野　雅一　増田　敬彦　増田　俊哉　山田　俊紀
■会員企画小委員会　稲木　裕子　大谷由紀子　河崎　敦子　高岡　伸一　髙田　光雄　高橋　麗子　△塚口　明洋　辻川ひとみ　土田　伸二　福田　瑞穂
■広告企画小委員会　△岩井　武夫　小幡　義明　加納伸太郎　家森　康彰　勝　一弘　小山　昭　斉藤　治久　武田　修示　平松　勉　前田　衛　渡邊　浩文
◎委員長　△副委員長　※幹事

印　刷　平成11年8月25日
発　行　平成11年9月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市北区梅田1-1-3-2100
電　話　06-6348-0635
振替口座　00910-9-39975
印刷所　青葉印刷株式会社
日本電植株式会社
定　価　1200円〔本体価格1143円〕



東側．公園・歩専道側から見た全景．左の一角が本館棟，右の一角が大ホール棟．



西側．前面道路から玄関を望む．

作品風作

設計監理■
茨城県土木部営繕課、坂倉建築研究所

施工■
鴻池・西松・フジタ・山本JV

つくば国際会議場
(エポカルつくば)

筑波研究学園都市が科学技術研究所団地として益々活性化しつつある中で、研究者の交流と知的触発を促す場と機会の必要性が高まり、科学技術振興事業団と茨城県の共同事業による会議・交流施設が計画され、プロポーザルによって設計業務が始まりました。

大小約20の会議室を持つこの国際会議場は筑波研究学園都市の中心地区の一角にあり、一方は緑豊かな公園及び歩行者専用道路に、他方は全面道路を挟んで活気ある家電製品専門店街にと、静と動の対照的な環境に面した位置にあります。また、敷地中央部には既に会議場計画の数年前に完成した外国人研究者用宿舎があり、計画建物とこれらとの関係をどの様に整え都市景観として調和したものにするかが一つのテーマでありました。

建物は4層吹き抜けのアトリウムを中心に会議室群を配した本体棟と大ホール棟がコンコースで連結され既存建物を取り囲むように配置しました。道路側はタイル張りの大きな壁によって会議場の環境を守り、公園・歩行者道路側は歩行者に対する圧迫感に配慮して軒高を3層に抑え、ガラスによる透けた構成によって中での人の動き、交流の様子がうかがわれ、軽やかで開かれた施設のイメージによって圧迫感の軽減を図っています。

アトリウムとこれを中心に配された各会議室、ホール等の関係は初めての来館者にも分かり易く理解しやすい構成とし、形、色彩、材料などで特色を持たせ、またそれぞれへのアプローチは立体的に一目で分かるものとし、動きのある構成としています。

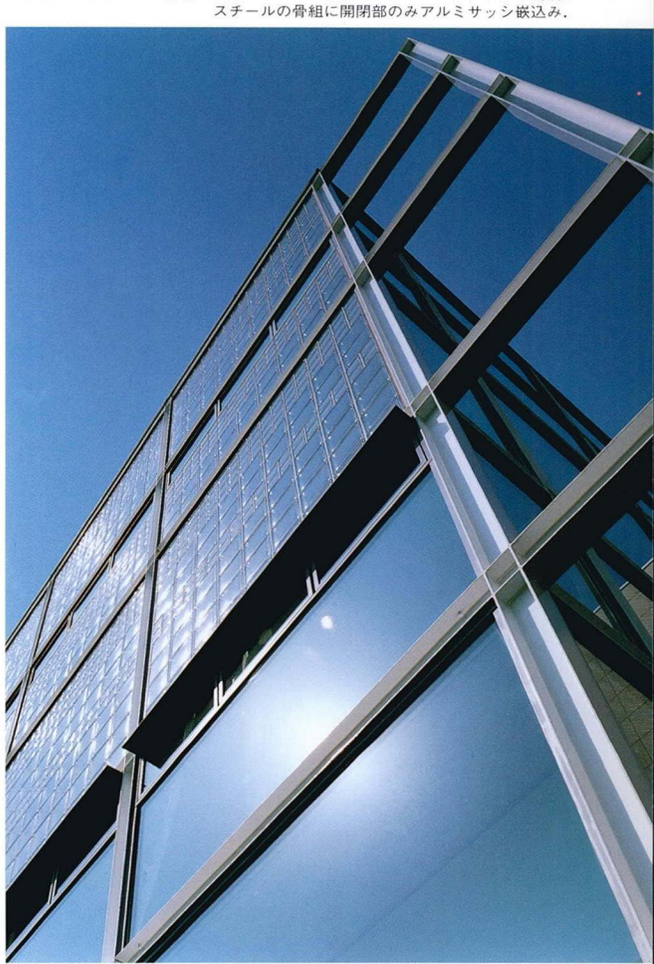
閉鎖的な会議空間に対し、広々としたアトリウムとガラス越しに緑の景観に面して開放的で快適なホワイエは、会議の休憩時間などでの人々の活発な交流を促し、施設全体に適切に装備された情報システムと相俟って、豊かな知的触発が期待できます。

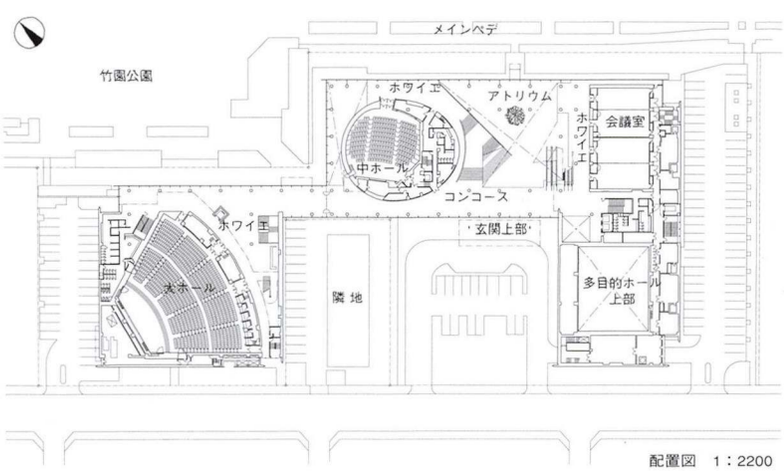
(瀧川公策／坂倉建築研究所)



玄関先を望む.

▼ガラススクリーンの詳細. 透明ガラスと2種類のガラスブロックにより構成. スチールの骨組に開閉部のみアルミサッシ嵌込み.





配置図 1：2200

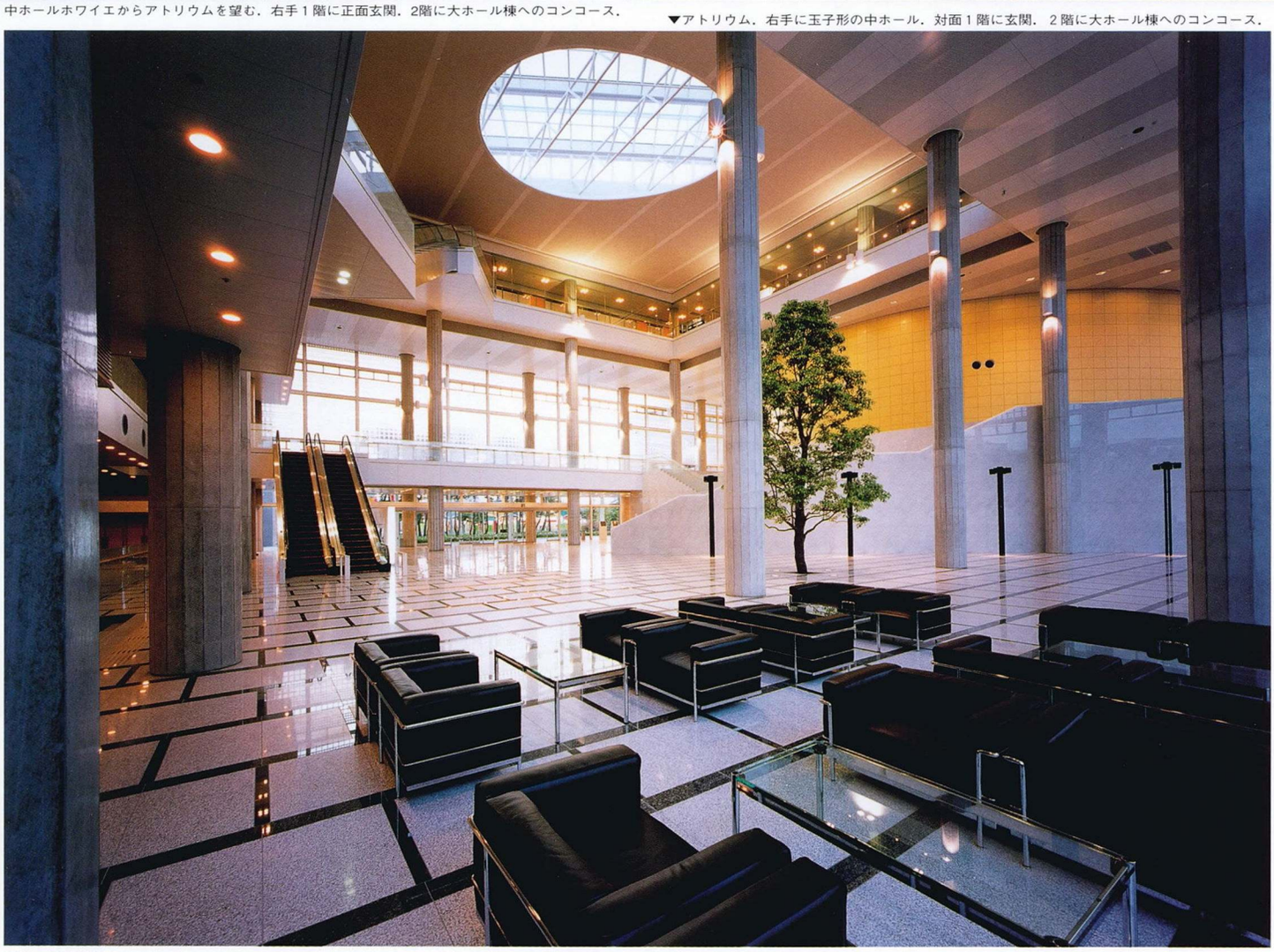
所在地 —— 茨城県つくば市竹園2-20
敷地面積 —— 16,666㎡
建築面積 —— 9,019㎡

延床面積 —— 22,994㎡
構造規模 —— SRC・RC・S、B1F・4F
工　期 —— 1997年3月～1999年3月

最寄駅 —— JR常磐線土浦駅又は荒川駅
高速バスつくばセンター
撮　影 —— 北澤治夫（エスエス東京）

中ホールホワイエからアトリウムを望む．右手１階に正面玄関．2階に大ホール棟へのコンコース．

▼アトリウム．右手に玉子形の中ホール．対面１階に玄関．２階に大ホール棟へのコンコース．



建築：坂倉建築研究所〔担当　瀧川公策・宮川幸雄・原隆・大木健逸・高津雅彦・服部昌也・寶村信二・田代輝久・大賀行雄・鈴木啓太・田中洋〕

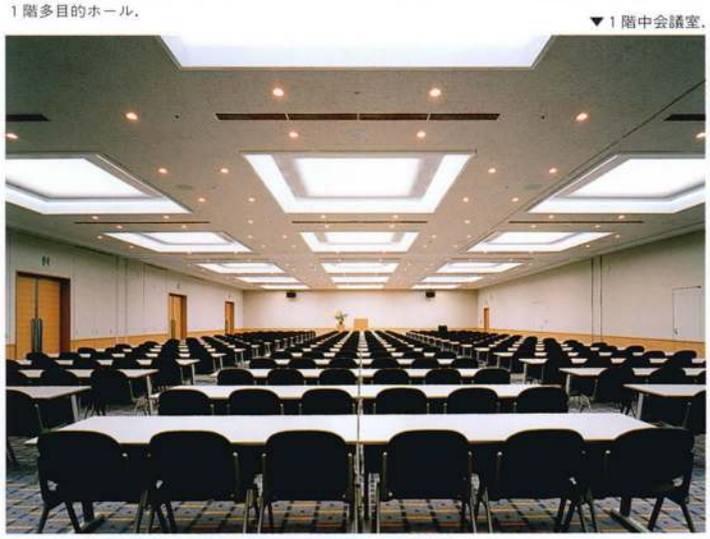
公園の緑が透けて見える大ホール2階ホワイエのガラススクリーン。



1階多目的ホール。



中ホール（300人），階段席と平土間席により構成。



▼1階中会議室。



▼大ホール。2階席より舞台を望む。

構造：ORS事務所　設備：総合設備計画　音響：永田音響設計

電気工事：きんでん・旭日・大堀JV　空調工事：三機・泉屋・昭和JV　衛生工事：関彰・高野JV



作品
作風

設計監理■
安井建築設計事務所

施工■
鹿島・富國共同企業体

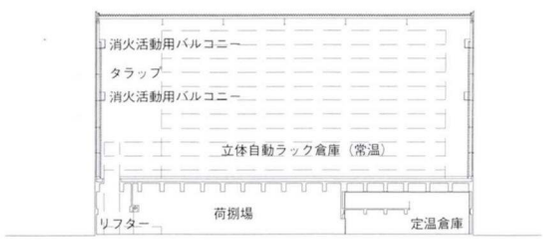
東大阪長田東配送センター

この建物は東大阪流通業務地区に建つ常温式ラック倉庫であり、近接の96年竣工「東大阪冷凍食品配送センター」（本誌96年12月号）と同じ事業主とテナントの組合せによる２棟目のプロジェクトとなる。したがって外観デザインの方針は前回と同様テナント企業の発展する事業展開のイメージを表現することを狙ったものとした。さらに今回の敷地は将来大阪府のモノレールの駅予定地に隣接していることから駅前にふさわしいチャーミングな表情を持つデザインとした。

建物の構成は、１、２階をSRC造で荷捌場、定温倉庫、事務室とし、３階をS造（ブレース構造）による30m×50m×H20mの自動ラック倉庫空間（約4,100パレット）とした。主要保管品である健康食品の要求条件から内部の温度管理を、常温ながらルーフファン、二重折板屋根、ALC壁等の断熱要素により外気温+3.4℃以下となるように設計している。また、内部はコンピュータ管理による無人倉庫であるが、不測の災害に備えスプリンクラーを設置すると共に、消防隊消火活動バルコニーを東西面に二段ずつ設置し安全性の向上をはかっている。

流通業務地区制定から約30年が過ぎ、物流をめぐる環境も、景気の低迷やニーズの変化、運送事業法の改定等による競争激化などから、ここへきて大いなる変節のときを迎えている。したがって今、倉庫建築に求められる性能はフレキシブルでよりスピーディーな機能である。この建物においても保管の効率性、入出庫の円滑性等についてラックメーカーとの極めて綿密な調整を経て設計を行なったことを追記しておきたい。

（設楽貞樹／安井建築設計事務所）

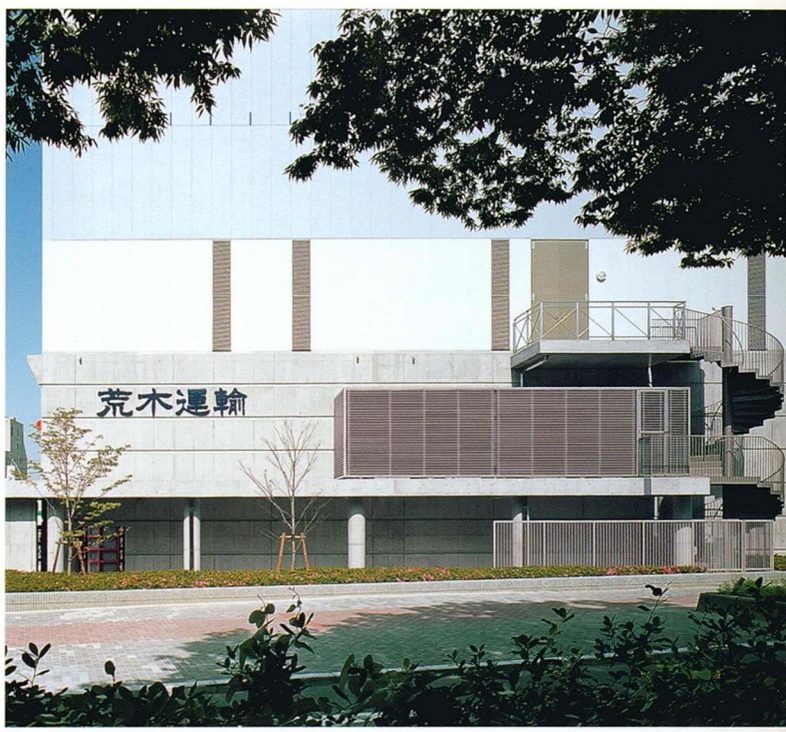


断面図　1：1000

所 在 地 ―― 東大阪市長田東５丁目３番
敷地面積 ――1,999.83㎡
建築面積 ――1,536.95㎡
延床面積 ――3,361.72㎡
構造規模 ――SRC（一部S）、3F
工　　期 ――1998年６月～1999年５月
最 寄 駅 ―― 大阪市営地下鉄中央線・長田駅
撮　　影 ――泉　幸男（伸和）



南東面外観



東面外観

▼北面外観



gallery

阿倍野の家

設計
菅　正太郎

都市近郊の北向きの敷地に、両親と子供２人が住まう計画である。
採光の良い３階を食べる所、２階を寝る所、１階を駐車等スペースとして空間利用の自在性と視線、光のつながり等を考え、南に光庭、道路側に階段を設け、また２・３階には方形の部屋を積層し、北にも外階段を設けてサークルにつないでいる。
その自在性の形式として、大型デッキ材でフレームを作り、反復して外壁とする構造を考えた。仕上を亜鉛メッキとすることで屋根・壁の谷部を雨が走る単純な納まりが可能となった。
また夏を旨とし、日射対策に屋上にファン付の換気棟とプランターを設けて対処し、一方冬には着脱可能な断熱シートを鉄板に設けている。それは日が当たれば即暖かく、冷気でシルバーに曇る鉄は、自然そのままを美しく伝えており、共存の術を考えたのである。
反復と還元を通して始原的な空間性が生じてくることを考えた。そこに内在する無垢性こそ、育ち行く家族にふさわしいと考えたのである。





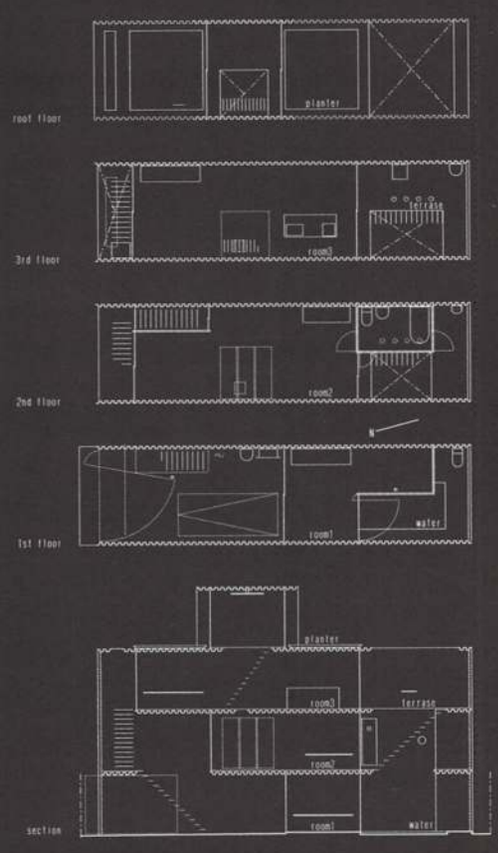
菅（すが）　正太郎（しょうたろう）
1956　大阪生まれ
1980　京都工芸繊維大学卒業
1980　竹中工務店　現在に至る

撮　　影―平井美行
企画編集―川上比奈子（作品作風小委員会）








roof floor
planter
3rd floor
terrasa
room3
2nd floor
room2
1st floor
N
room1
water
planter
room3
terrasa
room2
room1
water
section

1 : 300



2674

2674 社会福祉法人「のぞみ会」浜風の家

設　計：久森洋昭
施　工：新井組
a．芦屋市浜風町31番２号
b．1,517.98㎡
c．　305.98㎡
d．　410.32㎡
e．W、2F
f．平成10年６月～平成10年12月

この建物は、阪神・淡路大震災により遺児・孤児となった子供達の心のケアハウスとして計画されたもので、震災直後から作家・藤本義一氏らによって始められた募金活動や、多くの人々の無償の協力のもとに、平成11年１月17日に開館した。奈良県十津川村の人々から寄贈された木材を用いた建物は、集会棟、アトリエ棟、展示棟から構成され、音楽・絵画・演劇等のイベントや絵本創作活動等を通じて、子供達が未来に羽ばたいていく拠点となることを願って計画されたものである。
施設は、単純明快な平面計画として、木造の和やかさと力強さが感じとれるディテールを採用。また、外壁下見板は、海に面した敷地の中で、子供達が逞しく風に向って起ちあがる生命の象徴としての茜色を配し、忘れ得ぬ震災のモニュメント的意味あいを持たせた。



2675

2675 マルイト平野町ビル

設　計：大林組本店一級建築士事務所
施　工：大林組
a．大阪市中央区平野町1丁目8番15号
b．　159.06㎡
c．　142.84㎡
d．1,303.10㎡
e．SRC、一部S
f．平成10年３月～平成10年11月

この建物は、顧客所有の貸事務所ビルが震災で被災したための新築移転である。敷地は大阪の堺筋に面し、①耐震性能の向上、②ローコスト、③新しい堺筋の顔の創出を設計テーマとした。
①１階は強固なSRC造として上階を支え、２～10階はS造として各階の要所要所に制震部材を配置している。堺筋側の制震部材はバルコニーと一体化し機能とデザインの融合を目指した。
②容積を最大限に確保するため、基準階平面を隣地境界線一杯まで広げ、階高を抑えて31ｍに10階分を挿入した。
③堺筋の顔作りを目指して、正面外壁の制震部材を外観デザインに表現し、建物の機能と安全性をアピールすることに加えて、１階歩道沿いに幅員2ｍの歩行者通路を設け、歩道の空間的広がりに寄与すると共に、隣地の公開空地と連担した歩行者空間を実現した。



2676



2677

2676 明治池老人憩の家・明治池集会所

設　計：富田林市役所建設部建築課、
　　環境技研富田林事務所
施　工：勝正建設
a．富田林市小金台4丁目12番1号
b．499.75㎡
c．299.73㎡
d．294.53㎡
e．S、1F
f．平成10年8月～平成11年2月

2677 つばさ保育園・子育て支援センター

設　計：中川建築設計事務所
施　工：市村工務店
a．山形市幸町11-3
b．3,498.99㎡
c．1,725.93㎡
d．2,604.36㎡
e．RC、2F
f．平成10年6月～平成11年2月

凡例

a．所在地

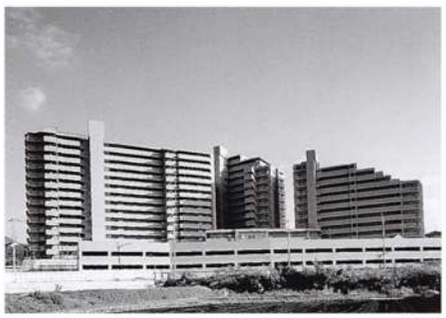
b．敷地面積

c．建築面積

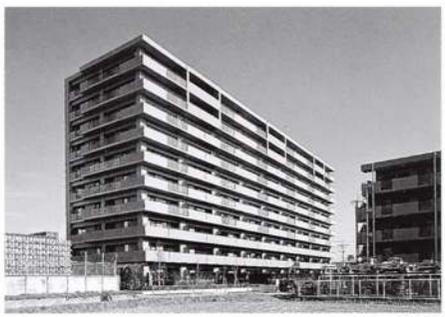
d．延床面積

e．構造規模

f．工期



2678



2679

2678 スコーレ四条畷

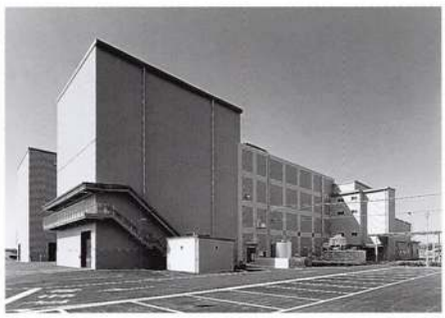
設　計：長谷エコーポレーション大阪エンジニアリング事業部
施　工：長谷エコーポレーション
a．四条畷市岡山東3丁目720-7他
b．9,231.76㎡
c．3,343.57㎡
d．21,565.94㎡
e．3棟、(RC11F、SRC13F/B1F、
　　SRC14F/B1F)総戸数222戸
f．平成8年12月～平成10年11月

2679 ステイツ茨木（彩園の街）

設　計：長谷エコーポレーション大阪エンジニアリング事業部
施　工：長谷エコーポレーション
a．茨木市岩倉町31番地他6筆
b．5,909.94㎡
c．1,723.34㎡
d．10,646.20㎡
e．RC、10F、P1F、共同住宅114戸
f．平成9年9月～平成11年1月



2680



2681

2680 神戸港国際流通センター

設　計：日建設計
施　工：五洋建設・本多建設工業共同企業体
a．神戸市中央区港島8丁目
b．98,735.80㎡
c．41,334.42㎡
d．136,643.46㎡
e．SRC＋RC、S
f．平成9年7月～平成11年2月

2681 布施畑環境センター破砕選別施設

設　計：神戸市住宅局営繕部、東畑建築事務所
施　工：大林・日産・近畿菱重興産特定JV
a．神戸市西区伊川谷町字丸畑
b．1,570.00㎡
c．5,387.66㎡
d．6,003.40㎡
e．S（一部SRC、RC）、2F
f．平成9年1月～平成11年2月

ARCHITECT's EYE

伝統行事がつなぐ町衆と新住民

鈴木　克彦

私は京都・祇園祭の山鉾町に立地するマンションに住んでいる。周辺住民たちとの事前交渉で、町内に135戸のマンションの建設を認める条件のひとつとして、新住民も祇園祭の祭事に参加することが義務付けられていた。山鉾町でも都心の人口減少の影響を受けて、祭りの担い手である「町衆」の不足に悩んでいる。その打開策としてマンションの建設が認められたのである。そして、入居後２年目の今年、神事など一切を取り仕切る「行事役」を新住民に任せられた。

1,100年の伝統がある祭事のご奉仕には、巡行順を決める「くじ取り式」や八坂神社への参拝、宵山には町席売店手伝いやローソク売り、そして巡行当日はくじ改め役や山飾り、巡行お供など、新住民にとっては馴染めない役ばかりである。「行事役」を任されたマンション住民たちは、しきたりを学ぶために長老宅に何度も足を運び、「くじ改め役」を演じた小学生はマンションのロビーで稽古を続けた。そして、新住民で運営された今年の祇園祭は無事に成功し、古くからの住民も新しい住民を支えることで刺激になり、町内に活気が生まれた。これをきっかけとして、マンション内に町会も誕生し、地域の老人福祉活動などにも積極的に参加していくことになった。建築が果たす社会的役割の一面が現れた出来事である。

京都工芸繊維大学大学院助教授・工博

創る喜び

西川　靖一

私の趣味の一つに、中学時代から続けている日曜大工がある。幼いころから、大工さんになるのが夢で夏休みの工作の宿題は早くできあがっていた。今も残っている左手親指の３㎝の傷痕は、鋸で作った当時の印である。町中で、大工さんが仕事をしていると、一日中見ていた。従って道具の使い方、例えば、鉋の歯の出し入れの方法は、教わることなく知っていたのである。

祖父が好きであったようで、家には左官の鏝を初め、一通りの道具がそろっていた。中学２年のときには、中の間の四畳半の畳を入れ換えて、中央に掘炬燵を作った。これは今でも母が使っている。

最近は、妻からの発注を受け、レンジをのせるテーブルや機械編物用の椅子を作った。角をおとしたり、金槌の凹みを水で濡らして戻す技術には、妻も感心してみている。大切なのは、仕上げの段階である。仕上げのニス塗りを、妻に手伝わせる。手伝うことにより、妻は、制作に参加したことになり、妻と完成の喜びを共有する事ができるのである。

先日、ある住宅プロジェクトの共用施設に、日曜大工室を設けることを提案した、近く完成するのを楽しみにしている。

神戸市住宅局参与

雑誌の功罪

前川　治彦

みなさんはご存知だろうか、一般の人向けの住宅インテリア雑誌の数の多さを。書店には信じられないくらい並んでいる。

中身をぱらぱらとめくれば、綺麗な家具や花で飾られた写真が所狭しと並んでおり、衣服などのファッション雑誌と同じくらいの気軽さで読める。

マイホームを求める人のためにも有益な情報が掲載されている。プレハブメーカーの紹介や、建築家に頼む場合など、雑誌によって趣が違うが、それぞれが情報量満載である。

一般向けの雑誌なのでできるだけ平易に、幅広く書こうとするのはわかるのだが、多くの情報（特に工事費）が整理されないまま提供されており、これでは素人の人の正しい理解は無理であろうと思われた。

少々強引だが、内容の未整理な雑然さが、そのまま街並みにつながっていくようにも思われた。

一般の人に対して、取っ付きやすく、読みやすく、その人が建築しようとする時に必要な教養や情報をきちんと提供できる雑誌の登場が期待される。

建築協会さん、どうですか？

前川治彦建築研究所

自然の渡り路

七字　祐介

梅雨が明けて、一点の曇りない東京の三宅坂から新宿、そして阿佐ヶ谷の拙宅に到る間、あらためて東京の街並みの整然とあること、建築が個性を競う大阪の景観とは違って抑制の効いた風景があることに気がつく。そして何より切れ目の無い緑の修景がある。銀座で蝉しぐれを聞いた。西新宿の超高層群を縫って番(つが)いの“尾長”が飛び交う。銀座の周辺には皇居、浜離宮、日比谷公園、新宿の後背には新宿御苑、神宮、代々木公園が控える。こうした緑の塊を繋ぐ街路樹の充実がある。修景としてもさることながら生態の渡り路として息づいている。

何年か前、新川が注ぐ四国、屋島の干潟の生態調査に加わったことがある。バードウォッチャーの小河原氏は川面と浜沖に遊ぶ数種の水鳥を双方睨んで、干潟が再生されれば少ない種の背後に棲む数十種の鳥が戻るだろうと報告された。渇いた干潟の地表を掘って河水を浸出させ、潮の満ち干に交じり合うことで干潟が少しづつ息を吹き返えす。大掛かりな手間ではなく、ちょっとした自然の渡り路を造ってやることによって生態の風通しが良くなる。風光に恵まれた環境を周囲にひかえながら、大阪には緑が少ないといわれる。小さいロットの緑と少しアーケードを控めにし、街路樹を充実させることによって、渇いた大阪の街並みに自然の風通しを取り戻したいものである。

大成建設関西支店設計部長

建築の眼

アーバン・インテリア

―都市空間としてのインテリア―



インテリア・住宅分科会

LayOut Mika Mizutani

アーバン・インテリアとは何か

大阪産業大学環境デザイン学科教授
榊原　和彦

■1．はじめに

アーバン・インテリアということを筆者が考え始めたのは、ディアモール大阪（1995年、写真1、「事例紹介(2)」参照）やクリスタ長堀（1997年、「事例紹介(2)」参照）の景観計画に関わるようになってからのことであった。これまでの、いわゆる“地下街”とは異なる空間づくりを通じて、室内空間の、新しい魅力ある都市空間としての可能性を感じたのである。その後、そのプロムナードとしての可能性を論じたり[1]、調査・研究を行ったり[2]したが、ここで改めてアーバン・インテリアとは何かを考える。

インテリアは、普通には建築内部を指すが、ここでは、まず、天井・屋根といった覆いが架かっている空間をインテリアと言うことにしよう。シェルターとしての建築の役割を考えると、第一義的な要素は、雨露や日差しを防ぐ覆いであると考えられるからである。そうすると、一方で、屋根がなければインテリアとは言えないのかという疑問が生じる。建物に穿たれた中庭などは、エクステリアと言うよりはインテリアと言う方がふさわしいかも知れない。したがって、少なくとも、インテリア的（インテリア・ライク）な空間があることを想定しておいた方がよい。

アーバンの語は、都市を構成するという意味合いで使っているので、アーバン・インテリアは、都市（空間）を構成するインテリアである。言い換えれば、“都市空間としてのインテリア”であり、“インテリアとしての都市空間”であって、前者は“覆いのある都市空間”、後者は“インテリア・ライクな都市空間”と言えよう。

それでは、アーバン・インテリアをこのように捉え、新しい概念として提示することにどのような意義があるのだろうか。本論では、主に“都市空間としてのインテリア”に的を絞り、その具体的内容を見る中から考えてみたい。

■2．歴史の中のアーバン・インテリア

歴史を振り返ると、都市は多くのアーバン・インテリアを創り出して来たことがわかる。

ストア：まず、想起されるのは、古代ギリシャ都市のアゴラにあったストアである。列柱と屋根でつくられ、日照から庇護されたこの空間は、『行政、文化、流通などあらゆる市民生活における交流の要』[3]であり、『町の社交的、政治的な広間であった。いつでも開いていて、市場や公共の美術館として使われ、そしてしばしば裁判の法廷としても使われた』[4]のである。そのような場所は、建物で囲まれただけのエクステリア空間である広場ではなくインテリア空間でなければならなかっただろう。このストアは、市民や諸組合等の寄付によってつくられた、市民のための、多目的な広場的空間であった。

ポルティコ：ルドフスキーは[4]『ヨーロッパの土地におけるポルティカスの原型はギリシャの〈ストア〉』と書いている。ボローニャのそれに代表されるポルティコは、片側列柱という空間形態においても、市民がつくったという点でも、ストアの伝統を引き継ぐ。しかし、大きな違いは、それが都市の歩行空間ネットワークを形成していることである。歩行は、人が何らかの機能を担う場所へアクセスするときの最終的な交通手段であるが、同時に、人と人、人と都市とが交わるときのメディアである。歩行者としての人が快適に歩き回り、立ち止まり、休み、他と交流するという“遊歩”[5]の可能性あるいは街路空間をはじめとするさまざまな都市空間の“プロムナード性”[1]と都市の魅力は、正比例する。そこに、アーバン・インテリアは極めて重要な役割を果たす。

パサージュ：パリのそれに代表されるパサージュは[5]、建物の中や間を縫う通路にガラス屋根をかけてつくられたものである。したがって、その両側面とも建物（壁面）で閉ざされていて、そこは、通常、店舗が占めている。パサージュの歩行者空間としての特質を考えるには、創設当時の状況を見ておく必要がある。嚆矢は、パサージュ・ド・ケール（1799年）あるいはパサージュ・ド・パノラマ（1800年）である（1788年につくられたギャルリ・ド・ボワが元祖という説[5]をとらない）が、当時のパリは、オースマンの改造に先立つこと約半世紀で、街路に歩道はなく、馬車と人で込み合っていた。そういう道と道の間を結んで街区の中に通り抜けとして設けられたのである。建設の動機は収益であったが、公共的な、歩行者専用の、風雨から保護された、交通緩和の役割をもつショートカット通路であった。

ホール、ギャラリー、ウィンター・ガーデンなど：パサージュを生み出したのは、一つには、鉄の生産増加と鉄構造技術の発展である。ナポレオン政権（1799年第一執政就任、1814年皇帝退位）はフランス製鉄工業の発展を促進し、ナポレオンもその建設に関係あるパリ最初の鋳鉄橋であるポン・デ・ザールができたのは、1804年のことであった。そして、ナポレオン戦争終結後、ガラス生産は躍進し、パサージュの建設も進むのであるが、この頃のもので注目すべきは、鉄とガラスによる大架構で覆われたギャラリーやウィンター・ガーデンなどである。ギャルリー・ド・ボワの跡に上流社会の集会場としてつくられたギャルリー・ドルレアン（1830年）、そして舞踏室、喫茶室、読書室、展示室などを備えた社交集会所で、1851年ロンドン大博覧会のクリスタル・パレスの着想にも影響を与えたと言われ

るジャルダン・ディヴェール（冬の庭園、1853年）がその代表例である。イタリアではガレリア・ビットリオ・エマヌエルII世が1886年に完成した。ハワードの田園都市(1898年発表)[6]でもセントラル・パークを取り囲んでクリスタル・パレスが設けられる。公園に向かって開かれたガラス・アーケードで、冬季にはウィンター・ガーデンとなる。ショッピング・センターでもあって、店舗からは、適当な地代収入が期待されている。

パサージュとホール：ペーターズは[7]、「カバーのある場所」の「全部が閉ざされている場合」を『二つの大きなグループ、すなわちパッサージとホールに分けるべきである』と言っている。端的に言えば、パサージュは「覆われた道路」であり、交通、すなわち通過とアクセスの機能を有する。ホールとしては、①駅の出入り口ホール、②大市場でなくなり、機能が変化した後のパリの「中央市場」(レ・アル)、③オランダの「アゴラー」(市場兼政治集会場的ホール)のような屋根付きの活動プログラムをもった場所、を挙げている。これらは、いずれにせよ、都市的活動・生活の中心となるような場所であって、商業空間に特化することなく、しかし、それも包含しつつ都市の魅力を満喫できるような場所である。

アトリウム：アトリウム[8][9]は、ローマ建築における、明かり採りの天窓をもった天井で覆われた広間（中庭）である。周囲は、出入り口や部屋で囲まれており、建築内での交通の要となる。したがって、アトリウム空間とは、周囲を壁面、コロネードなどによって囲まれた吹き抜けの空間に屋根が架かったものと考える。

アトリウム建築におけるアトリウム一般は、必ずしも公共空間ではないが、サクソン[8]は『アトリウムは人々をものの中心に据える……遊びを奨励する。人は人を眺め、散策し、空間の中を動き、自然を楽しみ社会生活を楽しむ。アトリウムは……視覚的なやすらぎを提供する。アトリウム建築は都市からの逃避ではない。むしろその性格を取り戻すのに寄与し、近代の都市開発で分断された街並みを取り戻すことができる』と述べ、その都市公共空間としての可能性を示唆する。彼は、さらに、都市開発の戦略的手法として、街区の間に屋根をかけ、あらかじめ公共通路としてつくったアトリウムの周りを順次開発していくことを提案している。アトリウムのみならずアーバン・インテリア一般を、街路や広場がその周囲に建築を誘致するように、建築群を誘引する軸、核として位置づけすることが可能である。

バザール：イスラム教国のバザールは、覆われた市場(マーケット・プレイス）として商業空間の一つの原型を成す。一種の公設市場であるが、市民の社会的交流の場であり、歩廊は、それにふさわしいインテリア空間として頂部や側壁上部に明かり採りを設けたボールトを用いてしつらえられている。普通には都市の中心部に位置し、イスファハンのカイサリーエ・バザール[10]（17世紀初めまでに造営、「海外のアーバン・インテリア」参照）などは、王宮、モスクと共に、四周をアーケードで囲まれた長方形の広場（メイダーネ・シャー）に沿ってつくられている。２層構成のアーケードの１階が店舗であることと併せると、これらの国の都市における商業（空間）の占める位置の重要性がうかがえるが、改めて都市と商業の関係を考えさせる。

地下空間：ペーターズ[7]は、自動車交通から避難するための地下道（トンネル)、地下街や地表状の歩道橋、デッキ、プラットフォームなどを“第二の平面”と称し、その問題点を指摘している。それは、要約すれば、「都市と切り離され、接触が無くなること」である。とりわけ地下の場合は、都市の最後の自然である太陽光や大気などとさえ切り離されてしまう。

とくにわが国の場合、地下鉄開通に伴って1930年上野駅地下道に設けられた地下商店街を嚆矢として、1950年代になってから本格的地下街が東京、大阪、名古屋などで次々に誕生する。これらは地下鉄や地下駐車場、駅前広場等の公共事業にあわせて「地下公共通路」として整備されたもので、大量の歩行者交通の円滑な処理を目的の一つとしており、空間の「質」としては不十分なもので、防災上の問題もあった。前述のディアモール大阪やクリスタ長堀はこれらの点についての反省を踏まえてつくられている。

その他のアーバン・インテリア：以上の他にもアーバン・インテリアに含むべき建築物があろう。たとえば“覆いのある橋（covered bridges)”である。ベッキオ橋(フィレンツェ、1345年、「渡り廊下」は1565年)、リアトル橋（ベニス、1591年)、ハジュ橋（イスファハン、1650年、写真２）などが名高い。アメリカにも俗に“kissing bridges”、“tunnels of love”などと呼ばれる木造の橋があるが、田園地帯に多く、ヨーロッパ等のものとは少し意味が異なる。わが国にも古くからあるが、最近では、センチュリー大橋（三田市、1993年)、東橋（新湊市、1992年）などがつくられている。

■３．アーバン・インテリアの類型

ここで、アーバン・インテリアをより一般的に類型化し、空間的様態、機能や利用様態の特質、都市公共空間としての役割・働きを明らかにしよう。

空間分節：一連のアーバン・インテリアは、外部空間も含めてネットワークを成すが、一つのアトリウムやコンコース、一街区分の地

下街など、あるまとまりをもった空間に分節化できる。そういう分節空間が、他の分節空間や外部空間などと結節される部分を結節部、また、結節するところに生まれる空間を結節空間と言うことにし、分節空間とは別に考察する。まず、分節空間である。

平面形態：大きくは、2種類に大別できる。なお、いずれも概ね長方形のものを想定するが、湾曲したもの等は、これらに準ずる。

① 通路（長軸）型：長い帯状平面のもので長軸方向の端部は、結節空間につながるか、壁面で閉ざされることになる。アーバン・インテリアでは、多かれ少なかれ歩行者交通流が生じるが、この型では軸方向の通過交通流が明確となる。歩行者ネットワーク全体の中での位置づけ次第ではあるが、交通処理におけるリンクとしての機能が重視される。長軸方向と平行な壁面へのアクセスが容易であるので、そこに店舗等が置かれて商店街型アーバン・インテリアを形成しやすい。この場合、ウィンドー・ショッピングなどの滞留はあろうが、短軸方向の幅員が広かったり、そのための装置を設けない限り、歩行者の滞留は生じにくい。壁面に店舗等が貼りつかない場合、とかく魅力に欠けた空間になりがちであるので工夫が必要である。一方だけが店舗である場合、ディアモール大阪（写真1）のように、“片側町”風でかえっておもしろい空間となり得る。一方の側面が開けているコロネード型のものは、以上とは全く様相が異なる。

② ホール・広場型：四辺ともが壁面で囲まれた空間が基本である。長軸と短軸の比が極端に大きくはなく、幅は、通過交通流に必要とされる幅員よりかなり広いことが想定される。滞留がある広場的な空間となることが主眼であるが、いかなる都市空間文脈の中で、どういう役割をもって成立するかはさまざまで、商業空間の中の核的空間、複合的大規模建築集積の中での広場的空間（「海外のアーバンインテリア」にあるワールド・ファイナンシャル・センター・ウィンター・ガーデンなど）、歩行者交通網の中の核（駅のコンコースなど）などがある。関西圏だけでも、ヒルトン・プラザ（「事例紹介(4)」参照）、京都駅コンコース（「事例紹介(5)」参照）など大規模なものがあるが、それらが都市空間に彩りと豊かさを与えることを考えると、この種のものの充実が望まれる。

空間の開放と閉鎖：空間の四周が全て壁で閉ざされているか、一部でも開放されているかで、空間の様相は相当に異なる。開放される場合、外部（都市）空間とのつながりが明確であるというよさが発揮されると、インテリア側も都市空間側も相互作用的に魅力が高まる。大阪のビッグステップ（「設計者からみたUrban Interior(1)」参照）はこの点で成功していよう。ガラス壁によって物理的には閉鎖し、視覚的に開放するやり方は、室内化の点で問題がないと同時に、ガラス壁に沿う部分のインテリア側は滞留空間になり得る点で、よい結果が期待できる。

空間の上部開放性も大きな影響力がある。物理的に覆いが無い場合、すでに述べたようにインテリア・ライクな空間として捉えられる。天空は、限定的にしかあり得ない都市の自然の中で大きな位置を占め、そこから時間変化・季節・天候などを知覚できるので、それとの接触を確保することは、評価できる。ガラス天井も自然との接触については、上記に準じるが、天候・気候からの保護という点を考えれば、むしろ勝るとも言える。なお、地下空間において特に、自然や都市空間との接触性の無さ、隔絶感が問題となることに対して、この上方開放性は大きな意味をもつ。

空間スケール：空間スケールは、アーバン・インテリアの質的特性を規定し、その魅力に大きく関わる。

概括すると、アゴラ、ポルティコなどは、公共空間的スケールとはいえ、上方に数層にもわたるものではなく、側方の解放性と併せて考えると中程度のスケールと言える。バザールも例外的なもの（イスタンブールのグランド・バザールのオールド・バザールなど）を除けば、中程度のスケールと位置づけることができる。同じく、パサージュも、1840年くらいまでのものは数層にわたる高さをもつが、幅員はそれほど大きくはなく、中スケールの空間と言える。それらに対して、前述した19世紀後半以降のギャラリーや鉄道駅のコンコース、市場（パリのレ・アール・サントラルなど）、20世紀初頭に登場するデパートのアトリウム（光庭、ただし必ずしもアーバン・インテリアとは言い難いところがある）などは、平面的にも高さからも、大スケールの空間が目指されている。第二次大戦後で注目されるのは、他の建物や歩行者空間に関連づけられた都心ショッピング・センターであるが、イートン・センター（トロント、1979年II期工事完成）、ザ・ギャラリー（フィラデルフィア、1977年第I期完成）など、大スケールの空間を有する。現代の商業空間としては、いわゆるフェスティバル・マーケット・プレイスが、ボルティモアのように新設され、あるいは、ギラデリ・スクエア（サンフランシスコ）、ファニエリ・ホール（ボストン）、コベント・ガーデン（ロンドン）などのように修復的再開発によって生み出されているが、空間規模としては中程度のスケールのものが多いと言えようか。なお、歩行者（遊歩）空間に関連づけられた多くの大空間アトリウムの存在（身近な例では、大阪のヒルトン・プラザ）も忘れてはならないだろう。以上に対して、多くの地下道・地下街は、小スケールの空

表1　アーバン・インテリア（結節空間を除く）の類型と事例

平面型		通路（長軸）型		ホール・広場型	
壁面・屋根の開放—閉鎖型		両側・上部閉鎖型	一部開放型	四周・上部閉鎖型	一部開放型
一般的な名称		ギャラリー アーケード パサージュ	アーケード コロネード ポルティコ	アトリウム ホール コンコース アーケード ウィンター・ガーデン	屋根付き広場 サンクンガーデン ベストポケットパーク
空間スケール	大空間	○ガレリア・ヴィットリオ・エマニュエルⅡ世（ミラノ） ○イートン・センター（トロント） ○ザ・ギャラリー（フィラデルフィア）		○初期デパート光庭（パリ等） ○ワールド・ファイナンシャル・センター・ウィンター・ガーデン（ニューヨーク） ○ファニエル・ホール（ボストン） ○コベント・ガーデン（ロンドン）	○ヘイズ・ガレリア［側部開放型］（ロンドン） ○ビッグ・ステップ［側部・上部開放型］（大阪） ○恵比寿ガーデンプレイス［二方開放型］（東京）
		○大丸エルガーラ・パサージュ（以上、福岡）	○キャナル・シティ［上部開放型］（福岡）	○新宿ＮＳビル（東京） ○ヒルトン・プラザ（大阪） ○京都駅コンコース（京都） ○博多リバレイン（福岡） ○ワンザ有明ベイモール、東京ビッグサイト等（東京・臨海副都心） ○松山三越アトリウム・コート（松山）	
	中空間	○パサージュ（パリ等） ○バザール（イスファハン等）	○ポルティコ［側部開放型］（ボローニャ等）		○コムズガーデン［上部開放型］（大阪） ○名古屋セントラル・パーク［上部開放型］（名古屋）
		○ディアモール大阪 ○クリスタ長堀（以上、大阪） ○都心アーケード商店街	○都心アーケード商店街［側部開放型］		
	小空間	○地下街・地下道 ○建物内通路			○ベスト・ポケット・パーク［側部・上部開放型］
		○地下街・地下道 ○アーケード商店街	○アーケード商店街［側部開放型］ ○新宿ミロード［上部開放型］（東京）	○地下街広場	

間と言わざるを得ない。

以上を分類要因としてアーバン・インテリアを類型化し、事例を挙げたものを表1に示す。

結節空間：結節空間は、接続する空間との繋がりや関係を規定する上で重要である。その様態はさまざまであるが、問題が大きいのは、結節の相手方同士のレベルが異なる場合である。両レベルともが共通につながる吹き抜けの結節空間を設けるのが望ましい。特に、地下空間の場合、屋根のある吹き抜け空間やサンクン・ガーデンを設けるのが望ましい（写真3）。ただし、この場合、階段のデザインが問題であってそれが主役になるような構成がよい。ディアモール大阪やクリスタ長堀では、道路敷地内にアトリウムを設けるという制約のため、階段が片隅に追いやられている結果になってしまったのは惜しまれる。

地表レベルで一般の街路につながる場合、結節空間は、街路に対してファサードを形成し、玄関口となる（「海外のアーバン・インテリア」参照）。開口（出入り口）部の大きさがインテリア側の空間断面とほぼ同じになる開放型と、ドアを用いる閉鎖型とがあるが、後者の場合、ガラス壁面とするのが普通である。わが国の多くのアーケード街の場合、建築のファサードというより門を構えるといったかたちが多いように思えるが、これは、本格的につくるか仮設的につくるか、あるいは隣接空間の入っている建物と一体的につくるか否かの違いであって、それぞれ前者が、より望ましいと言えるだろう。

インテリア空間同士を繋ぐ結節空間は、街路で言えば交差点に相当し、特別な場所となる（「海外のアーバン・インテリア」参照）が、ここでは、うまくいっていない事例の方を挙げよう。松山市の松山三越アトリウム・コート（6層分程度の高さの大空間アトリウム）と大街道アーケード商店街（3層分程度の高さの中空間アーケード）との結節部である（写真3）。そこにおいてアーケードの方は何の変化もなく、近づかなければアトリウムがあることがわからない。アーケードが無ければ、街路に面する大アトリウムのガラスファサードとして、魅力的な姿を現していただろう。私的商業空間であるデパートと公共空間である街路の既存アーケード間のことなのでこうする他なかったのだろうが、惜しまれる。

表2　アーバンインテリアと都市開発

整備時期のタイプ ＼ 都市開発のタイプ	アーバン・インテリア／周辺部同時整備型 （面的都市開発に対応）	アーバン・インテリア先行整備型 （街路先行整備型都市開発に対応）	アーバン・インテリア後発整備型 （既存市街地での街路整備に対応）
新開発型	○最も普通に想定される開発・整備 —多くの大規模複合開発 —既開発地との連係・総合が重要	○都市開発戦略として有効 —サクソンの提案 —投資負担の主体が問題	○あまり有効な手立てとは言えない —都市開発としてインパクトを欠く —後の整備を想定した計画が重要
再開発型	○既存建築物の修復再利用 ○スクラップ＆ビルド —新開発型に準じる —既開発部分（非スクラップ部分）との連係・総合が重要	○想定しにくい整備手法 —要再開発地区でこれによって再開発が促進されることになれば有効 —既成市街地活性化が主眼であれば“先行”ではなく“後発”整備	○可能性ある整備手法 —多くのパサージュ整備（ファサードを含む整備だから有効） —わが国の多くのアーケード商店街（有効であるが問題点を抱える）

■4．アーバン・インテリアの形成

アーバン・インテリアは、公共的空間であるとはいえ、その建設を街路一般のように全て税金で賄うわけにはいかない。したがって、建設・存続への経済的根拠が確立されない限り成立しないので、商業空間をはじめとする民間の諸施設・空間との協同、連係が必然である。しかし、一方で、何らかのアーバン・インテリア（的空間）が、公共の手を借りることなく完全に民間資本のみで成立するのであれば、公共空間化への必然性は失われ、経済原理のみに支配された、個別的に存在する私的空間となりかねない。公共空間化への手立てが必要である。その前に、公共空間化の必要性は、これまで述べたことからわかるように、以下のような点からなる。

① 市民に提供すべき魅力的な都市空間であり、室内都市景観（インテリア・スケープ）を通じて都市景観形成に寄与する。

② 都市歩行者（プロムナード）空間ネットワークの重要な構成部分となる。

③ 前記②は遊楽、遊歩空間を意味するが、より実際的、実用的な公共（歩行）交通網を形成する。

④ 交通施設、美術館や音楽ホールなど公共建築空間などと連係して広場・ホール空間となる。

⑤ 上記②～④の働きを活用すれば、都市づくり・まちづくりの有効な戦略的手段となり得る。

重要なのは、⑤の点であり、どういう手立てでその整備が可能になるかである。そこで、アーバン・インテリアを取り入れた都市整備の可能性と特徴を、アーバン・インテリアとその周辺部の整備時点の別、都市開発タイプの別に考えたのが表2である。

実際の導入・開発にあたっては、次のような公共空間化の手立てを有効に活かすことが必要だろう。

ⓐ 公開空地のようなボーナス制度、有利な公共空間接続条件の付与などインセンティブを与えて民間のアーバン・インテリア建設を誘導する。

ⓑ 歩行者空間ネットワーク形成の“計画”を確立し、誘導・指導によって民間アーバン・インテリア建設を導く。これには、トロント（「海外のアーバン・インテリア」参照）など北米諸都市における地下道やスカイウェイのネットワーク形成が参考になる。

ⓒ 公共空間としての位置づけを明確にして補助金を交付する。

ⓓ 官民パートナーシップにもとづく事業などにおいて、積極的アーバン・インテリアづくりを進める。

ⓔ 公共地下道整備の場合のように、公共（歩行）交通網の一環として位置づけたり、公共施設の一部としてつくるなど、根拠を明確にしつつ、公的資金を投入してつくる。

いずれにせよ、ひろくその必要性を認識するとともに、市民のコンセンサスを醸成し、事業手法の開発と制度化を図りながら、都市へアーバン・インテリアを導入する必要があると言えよう。

■5．おわりにかえて —アーバン・インテリアの課題

アーバン・インテリアには、問題点も少なからずある。

最大の問題は、都市空間一般、あるいは外部空間（エクステリア）との関係である。わが国の地下街と地上空間の現実を顧みると、インテリアとエクステリアの乖離、とくに、エクステリアの空虚化、裏空間化の危険性をはらむ。アーバン・インテリアに魅力があるほどそうである。問題は二つに分かれるだろう。隣接する、アーバン・インテリアのある（多い）地域とない（少ない）地域の間の格差が一つである。今一つは、同一地域内での層（レベル）間の格差である。いずれの場合も解決は歩行者空間ネットワークとしての緊密な連結の成立に帰する（したがって、結節空間のあり方が重要）であろうが、その前提として地域や歩行者空間ネットワークの“計画”が極めて重要であり、それなしに連係はあり得ない。とくに層間格差を考えると、多層空間利用は、本来的には、同一平面内での公共歩行者空間からのアクセス可能空間を数倍増へと飛躍的に増大する可能性をもち、その特性を活かせるか否かは、計画・デザイン次第である。もちろん、“計画”で地域別・層別の役割分担・機能分離が決まっておれば、これらを考える必要はなく、その点からも、“計画”が必須なのである。

上記の点は、都市景観形成の面にも反映し、地表の景観の貧困化を招きかねない。イラン、イスタンブールのバザールを訪れたとき、いくつかの外回りが、風化して廃墟のような様相を示していたのに驚き、考えてみればある意味で当然かと納得する経験をした。しかし、望ましいものではないことは当然で、できれば連係した景観づくりとなるのが望ましい。ディアモール大阪、クリスタ長堀では、アトリウム部分、給排気塔が地表上に現れることから、アーバン・インテリアがエクステリアの景観形成を触発するかたちとなった。

結果は、予期通りになったとは限らなかった(たとえば、ガラス壁・ガラス屋根の夜間景観、吸排気筒のデザイン・材質)が、地下と地上が連係した景観となっているとは言える。

また、わが国の商店街アーケードでは、インテリア化によって、そうなる前の開けていたエクステリアの矮小化につながるものでしかない側面を否定することができない。その成り立ちが、"後付け"型であるからであるが、前出の松山市大街道のように、側部は2層程度にとどめ真ん中をドームで盛り上げるといったデザイン上の工夫を凝らす外、何とか周辺を含めた一体的(再)開発への道を切り開く努力が必要であろう。

既存の都市空間の中で、ネガティブな評価をされるべき、取り残されたインテリア空間、すなわち、高架鉄道のガード下、高速道路の高架橋下、跨線橋下などが存在することも忘れることができない。例えば大阪市の西梅田公園のように、人が使う空間として再構成することによって復権を果たす必要があろう。

安全性の問題も極めて大きな課題である。この6月末の福岡の大雨による出水で地下街が水浸しになり、死者が出たという痛ましい災害を忘れることはできない。1970年代に、ガス爆発事故や火災のために、地下街設置基準が厳しくなってその新設が急激したということもあった。それ以降の言わば新世代地下街であるディアモール大阪、クリスタ長堀のガラス屋根のアトリウムは、火災時の排煙の目的を第一義としてつくられたものである。防災の目的と魅力ある空間づくりの目的が一致しているわけで、そういう空間づくりを目指したいものである。

(さかきばら　かずひこ)

《参考文献》
1) 榊原和彦「街づくりとプロムナード」宅地開発、No.153、1995、pp.2～10。
2) たとえば、
a. 榊原、ペリー、土橋「アーバン・インテリアとしての地下街の空間意識に関する研究」日本インテリア学会論文報告集、平成11年3月
b. F.PERRY, K.SAKAKIBARA, N.TSUKAMOTO,"Virtual Reality Simulation of Urban Interior and Space Sense",Proceedings of 6th International Conference on Computers in Urban Planning and Urban Management,Sept. 1999.
3) 相田・土屋共著「都市デザインの系譜」鹿島出版会、1966
4) B. ルドフスキー著、平良・岡野訳「人間のための街路」鹿島出版会、1978。
5) 新井洋一編著「別冊商店建築100、パサージュ／遊歩の商業空間」商店建築社、1999。
6) E・ハワード著、長素連訳「明日の田園都市」鹿島出版会、1968。
7) パウルハンス・ペータース著、河合正一訳「人間のための建築」鹿島出版会、1978。
8) リチャード・サクソン著、古瀬・荒川共訳「アトリウム建築：発展とデザイン」鹿島出版会、1988。
9) マイケル・J・ベドナー、古瀬敏訳「商業空間とアトリウム」鹿島出版会、1993。
10) A. U. ポープ著、石井昭訳「ペルシア建築」鹿島出版会、1981。



写真1　ディアモール大阪(大阪市):"片側町風"(片側が壁)の部分。ガラス壁様の部分は、隣接地に予定されているビルが建設された場合、外光を採り入れることになっている。ガラスドーム・アトリウム部分については、「事例紹介(2)」参照



写真2　ハジュ橋(イスファハン):1650年シャー・アッバース2世建造の2層の橋。上層は屋根付きテラスと屋根なしの中央通路から成る。夏はこの写真のように人が集まる憩いの広場となっている。



写真3　大街道アーケードと松山三越アトリウムコート:写真上左がアトリウムコート内部。写真上右の入口に近づけばアトリウム空間があることがわかるが、下の大街道アーケードからは、よほど近づかないとわからない。

都市における人間の行動とアーバンデザイン

―アーバン・インテリアによる近代都市空間のゆらぎの形成―

京都工芸繊維大学教授
材野　博司

■1．はじめに――都市の楽しい人間行動と空間

●時間を楽しむ都市の人間行動

京都に住んでいると観光客に出会うことが多い。仕事から離れて、ゆったりと時間・空間を楽しむ姿は心地良いものである。このひとときが終ると時間に追われる生活が待っているからこそ、より一層、時間を楽しむのであろう。このように、観光は空間の中で時間を楽しむ最大のものであろうが、これは日常から離れた非日常的楽しみである。

これに比べて都市における人間の行動の多くは日常的行動であり、月に何度かの余暇行動も周期のある日常的な楽しみと言える。ましてや仕事が終っての帰りに散策する、ウィンドーショッピングをするというような（束の間であれ）時間を楽しむ行動は日常行動の最たるものである。労働時間の短縮とともに、都市の人間は、この日常において時間を楽しむ行動も多くなってきており、その楽しみ方の質も向上しつつある。

周知の如く、現代社会では時間はデジタルな時間、刻々と前へ進む時間としてとらえられているが、古代人の時間は循環する時間であった。言いかえれば前に進まない時間を当り前としていたのであり、人間行動も、そのようなとらえ方と対応するものであった。すなわち、「前進しない行動」であり「滞留」や「ゆっくり動く」時間行動を基本とするものであった。今、近代の時間・空間の見直しの中で、現代人はせわしなくこなす時間以外に、ゆったり楽しむ時間を実感として持ちつつあるのではなかろうか。

●楽しむ時間行動に合った都市空間づくり

しかし、このような人間の行動のスタイルの変化に合ったように、都市は変貌してきているかというと、必ずしもそうとは限らない。それは、メジャーストラクチャーであれ建築であれ、それらは、一度建設されると長い期間、そこに存在し続けるという宿命ゆえであり、人間のニーズの変化からは遅れるのはやむを得ないものである。

戦災復興で区画整理された日本の多くの大都市の市街地街路空間は、楽しみのための空間というよりも効率のための空間としての性格が強い。また、近代都市計画として格子状に画一的に区画された空間は単調な感じが免れず、変化のある豊かな空間というイメージを伝えにくいものである。特に都心部は商店街や娯楽空間というような楽しみ空間はあっても、職場からの帰路にほっとする空間が少ない。すなわち、都心やその周辺には、買物や娯楽等の特定の目的のための楽しみ空間は存在しても、多様な楽しみのための空間は少なく、今後、益々余暇時間が拡大される中で、そのような空間をいかに確保してゆけるかが、課題であろう。

■2．内から見るファサードと外で感じる内壁

●連続的アーバンインテリアと単独的アーバンインテリア

アーバンインテリア（以下U.I.）の内、建築前の広場やアトリウム等建築が設計時に努力して創りだす空間で都市に貢献するのは、ここ10年の間に十分多くなった。ただ、その多くは夫々の建築敷地が独自に提供するものであり一つ一つは豊かであっても、味気ない都市空間の中の豊かな小島という感じで、ややもすると孤立しがちである。

無論このような小島であっても所々に顔を出すだけで、都市空間を結構豊かにしてくれるものであるが、連担して続いているとU.I.としての厚味を一層増すものである。

この建築が提供するU.I.にも設計者（又はクライアント）の個人的努力によって創りだされるものもあるが法律や公共団体の支援によって、醸成されるものとしては建築協定による空地や総合設計制度により生み出される公開空地がある。建築協定や地区設計制度で生み出される都市的空間は当然ながら街区レベルで連続しているという利点があるが公開空地の方は、建築単位では濃密な都市的空間になることがあっても、連担しながら街路に沿って連続的に豊かさを提供できる保証は無い。人間の行動は連続的であり、隣接公開空地との連繋や計画的連続化の方向が公共団体の指導も含めて推進される必要があろう。

●内からのアーバンインテリアと外からのアーバンインテリア

ここまで述べてきた時点でU.I.とは何かを整理しておく必要があろう。ここにおけるアーバンとは人が自由に出入りできる空間や公共的性格の強い空間を言うものである。そしてここに言うインテリアとは外部空間であっても（内部空間が本来持っていた）ヒューマンで繊細な空間を指すものである。そしてU.I.は、内部空間であっても出入り自由であり、公共性を持つ空間（内からのU.I.）や外部空間であってもヒューマンで繊細な空間（外からのU.I.）の両方を言うものである。

その中で今まで余り創られていなくて、今後多くなってゆくであろうと予測されるものとして外部空間でありながらヒューマンな空間すなわち「外からのU.I.」が浮上してくると考えられる。これらは、メジャーストラクチャーと言われたものの一部であるが、それらが豊かな空間へと変貌し、「内からのU.I.」と連繋しつつ、時間を

楽しむための都市空間形成に寄与することが期待されるものである。

■3．都市の人間行動とシークエンス

●シークエンス（継起性）でとらえる人間行動の楽しさ

コンクリートの建築に占められつつある格子状街路構造の近代空間も日常、慣れてしまうとさほど気にならないものであるが、一度空間の豊かな回遊式庭園や中世の都市を見た直後、近代の都市に戻ってくると、何と味気ないものかと思う。特に日本の都市空間では戦災復興後の都心の区画整理の単調さが眼につく。かといって昔の空間構成に戻すことは不可能なことであるが、昔の空間の持っていた人間行動に対応する変化のシステムの如きものを再現できないかと考えている。すなわち、人間が空間を移動する時に楽しく良い気分になるような空間の変化のルールを探って、現代の都市空間に導入しようというものである。

このような手がかりとして、空間の変化を人間の移動に伴って時間経過で記述するシークエンス（継起性）というものがある。

●都市空間におけるシークエンスから見たアーバンインテリア

このシークエンスという視点での現代の格子状街路の都市空間を見ると、直線であって先が見通すことができ、幅員が一定、高さも揃っていて空間変化は単調である。出勤時はこのような空間も効率良く職場にたどり着くには適しているが、仕事が終ってからの退勤時や余暇時間帯ではもっと変化のある楽しい空間が欲しいものである。しかし、都市の骨組みとして建設されたメジャーストラクチャーである街路空間そのものは、一度敷設されると長い期間、その都市を規定してゆくものであり、楽しい空間は短期間にはメジャーストラクチャー以外で創ってゆく必要があろう。

そのための空間として浮上してくるのが公共空間でもなく、ユニット空間としての建築そのものでもないU.I.である。それらはメジャーストラクチャーと建築との間の媒体になるとともに、両者の中間領域として、両者の持っていなかった準公共空間および準私的空間（すなわちセミ・スペース）を提供するものであって、単調になりがちの都市のメジャーストラクチャーに、変化のある、楽しい空間を提供するものである。この時、大切と思われることは、そのような空間提供を通して、近代都市空間がもたらした鉄とコンクリートのハードな西洋的都市空間像とは異なる、日本人の感性に合った木の感覚のある、ソフトな日本的都市空間へと変貌してゆけるように布石してゆくことであろうと考えている。

■4．京の古きアーバンインテリア路地・小路・参詣空間・境内

U.I.は現代的概念であるが、日本の都市空間の中にそれと似ている空間を見い出すことができる。この中で「外からのU.I.」を中心に、京都で幾つか見てみよう。

●路地

京都には路地が多いが、そもそも路地は、メジャーストラクチャーとしての街路空間に、長い年月を経て刻み込まれたゆらぎであり、京都のように歴史の古い都市ほど多いものである。路地は、外部空間でありながら、個々の住宅の生活が滲み出た「外からのU.I.」である。この路地には、行き止まりとしての袋小路と通り抜け路地がある。

●小路

小路と通り抜け路地との違いは、小路は歩行者優先や、歩車共存でありつつも、何らかの車の通過を認めるものであるが、通り抜け



写真1　下京区の袋小路（行き止まりの先に社が見える路地）



写真2　石塀小路（石のテクスチャーが心地良い通り抜け路地）

路地は車は通り抜けできないものである。周知の如く、京都では、中世まで正方形の街区になっていたものを秀吉の天正の地割でほとんどの街区は、南北に細街路を通しているので、小路状の細街路は南北で多くなっており、その内の幾つかは何街区か先で行き止まりになっていたり、くい違い（⌐型）があったりして、車の通行上、不利になっているがために、U.I.的性格を強く残している。

●参詣空間

参詣空間は、神社の参詣のための空間であるが、神社自身を厳かに感じさせたり、本殿までの途中を変化のある楽しい空間とするなど、ただ単に通過のための道としての機能以上の空間性を持っている。その意味で参詣空間は充分にU.I.であるが、祭礼の折りには、灯篭に灯がついたり、ぼんぼりやたれ幕によってしつらえられて、豊かなU.I.へとより一層濃密化される。

一方、参詣のためのみでなく、車折神社や菅大臣神社のように日常の通行のための生活空間として、車から安全な通り抜け路地的性格を持ったU.I.として活用されている参詣空間も多い。

●境内空間・御陵

公園の少ない京都においては寺社の境内や天皇御陵の一部が公園的利用をされることも多いが、現代の公園の利用が少なくなる中で、地域社会になじまれ、かつ整備の行き届いた境内空間は、場所によっては豊かでヒューマンなU.I.を周辺の人々に提供してくれる。

■5．内外の融解と再重合ーセミスペースの滲透と連担

●内外U.I.の融合と分離

内外の分離を明確にするヨーロッパにおいても、ラーメン等によって構造から自由になったガラス壁面は内外の融合をある程度は可能にするとともにパサージュや広場等セミスペース(U.I.)の昔からのストックは、内外の不分離に向けて寄与してきた。しかし、これらは（逆に考えると）内外のあまりの厳しい分離に耐えきれなくなった西洋都市空間の融合への願望とあがきと受けとれる面があるとも考えられる。

それらと比較すると、木造によって占められていた日本の空間は、柱と柱の間を自由に解放することによる外部空間との融合を基本とし、廂内や格子等様々な装置によって内外の融合を空間と人間行動の両方において当り前のこととしてきた。そして、その延長上にあるのが、京都のU.I.で見てきた、路地・小路・参詣空間・境内であった。

●ヨーロッパのストックと現代日本の都市空間

しかし、日本でも現代の空間のほとんどは鉄筋コンクリート造であり、そのような近代都市空間においての内外の融合をなし遂げることも重要と考えられるが、これには、ヨーロッパのストックとの関わりを見ておく必要があろう。建築内部のものでは建築内のアーケードとして、2階以上に建築空間がありながら1階にアーケードがあるもので街中に線状に連続しているのがボローニャのポルティコ（**写真7**）である。このように、線状でなくても広場の一角に焦点として建築の前面で開いている開廊も典型的なU.I.であるが、特にフィレンツェのシニョーリヤ広場のランツィの開廊（**写真8**）は、広場の隅の狭さをアルノ川へと導く通りとの見事な繋ぎの役割を果



写真3　南北の小路（職住一体のヒューマンな通り）



写真4　錦小路（生活臭の漂う東西の小路）



写真5　車折神社（通勤・通学路にも利用される生活空間）



写真6　上賀茂神社境内（開放的空間と閉鎖的空間の共存）



写真7　ボローニャのポルティコ

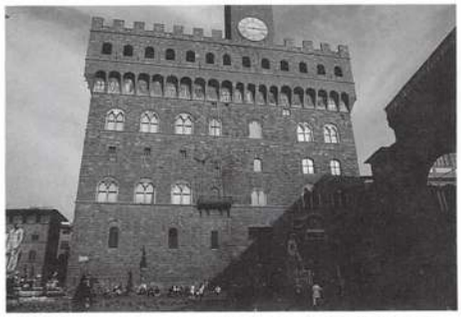


写真8　シニョーリャ広場のランツィの開廊（右）



写真9　ミュンヘンの歩行者天国



写真10　ロンドンのピムリコのコート

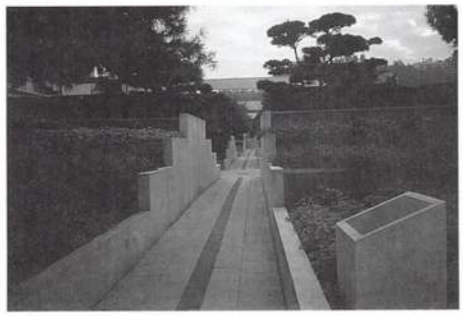


写真11　パリのパルク・シトロエン　大きいスケールの公園の中の小スケール

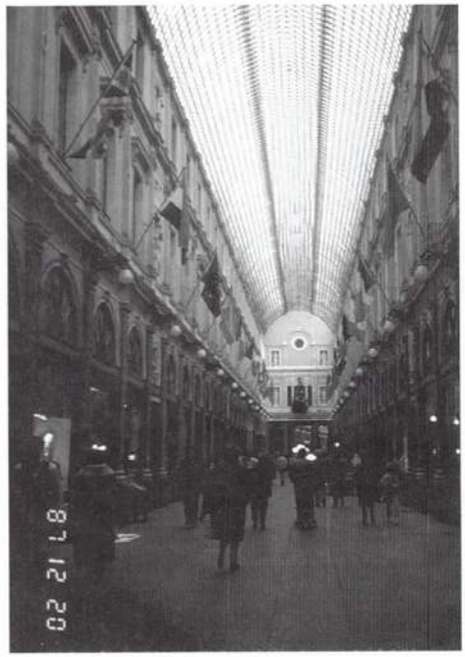


写真12　ベルギーのパサージュ



写真13　ミラノのギャラリエ

たしている。

このような建築内U.I以外にヨーロッパに多く見られるのが「外からのU.I.」であり、昔からあるものとしてはバルセロナの万年歩行者天国としてのランブラスがすぐ目に浮かぶが、近年のものでスケールの大きいものとしては、ミュンヘンの万年歩行者天国（**写真9**）街区型ハウジングのコート（中庭）でありながら出入り自由なロンドンのピムリコ（**写真10**）があり、ごく最近のものとしてはパリのパルク・シトロエン（**写真11**）があげられる。

次に、建築内とも外部空間ともつかない、両方の性格を持ったものとしては、建築寄りのものではパリやベルギーのパサージュ（**写真12**）、外部空間寄りのものとして、ミラノのギャラリエ（**写真13**）があげられる。この内外両方の性格をもつU.I.は2～3階は、壁の中に窓が開いているという外壁的性格を持つが、1階は、内部空間と一体となっており、内外の強い融解と再重合が見られる。この時、店舗の前に、自由に座れる椅子があったり、1階の店舗のファサードが後退して、U.I.内部のセミスペースになるとその効果は大きい。これは一度、内部空間が外部空間へと融解滲透しつつ、そのエネルギーを放置しないで再融合（すなわち再重合）させたものであろう。

■6．結び―アーバンインテリアのネットワーク化とゆらぎの形成―現代都市空間の魅力演出

（前にも述べたが）現代の日本の都市空間の多くが、近代ヨーロッパの都市計画の手法である、格子状の街路空間で構成され、その中を鉄とコンクリートの建築で占められている。このこと自身は、日本の都市空間づくりのプロセスとして、やむを得ないとするならば、このような、ややもすると単調になり勝ちな空間に、変化のある楽しい空間を摺り合わせて導入できるものならば、現代都市空間は、きっと奥行のある魅力的な空間になるものと期待されうる。それは、人間の行動は出勤やビジネスのような効率的な行動が、日常の相当部分を占めつつも、退勤後や余暇時間での楽しむ時間の都市での過ごし方が重視されつつある中では当然のことと言える。

この時、近代都市構造として建設ずみの街路等のメジャーストラクチャーを大幅に変更してゆくことは困難と考えられるがために、マイナーなスペースとしての可変的なアーバンインテリア（U.I.）の演出による、魅力空間の構成が浮上してくる。

このようなマイナーなU.I.は、都市のメジャーストラクチャーのゆらぎであり、これはまた、西洋近代化された都市空間の、日本人の空間感覚行動様式への回帰でもある。このU.I.も各建築がそれぞれの敷地においてばらばらに、点的に提供するのみでなく、それらが連担して、線的、さらには面的に存在し、ネットワークを組むことによって、空間の魅力は増大するものである。それは、例え魅力的空間が所々にあっても、それらが個別に島状にあるのではなく、相当、繋がって存在することによって、楽しさを求める人間の行動の自由さや選択の幅が増大するものであるからである。

（ざいの　ひろし）

アメリカ村・ビッグステップ

環境開発研究所
井口　勝文

アメリカ村は何故子供たちに受けるのか？

そこに足を踏み込んだ途端に子供たちが「水を得た魚」状態になるのにアメリカ村に勝るものはない。それが東京の子だろうと、ミラノの子、ニューヨークの子だろうと、大阪に来た子供たちに「また来たい」と言わせる大阪の名所はアメリカ村である。

1970年代に芽をふいたアメリカ村が80年代の後半には、やや盛りを過ぎたかと思われた。その時大阪市がとった挽回策が「西心斎橋土地信託事業コンペ」であり、ビッグスッテップが最優秀案に選ばれて事業化権を獲得した。ここでは設計者の立場からその目指したところを報告する。

■建築を設計するのではない、街をコピーするのだ

アメリカ村の魅力のキーワードは「自由」。ここは子供たちの開放区「サファリパーク」だ。ここでは子供たちが車に乗って見物するのではなく、子供たちが豹でありライオンなのだ。

そのアメリカ村にビッグステップがオープンして6年。アメリカ村の紹介は大阪のタウン誌では常連メニューだけど、最近はそこでビッグステップは今や、アメリカ村に溶け込んでしまって目立たない存在になったのだろうか。もしそうであれば設計者の究極の意図が実現したことになる。

1988年のコンペ応募時に我々が主張した最も重要な設計主旨は、「建築」をつくるのではない。アメリカ村という「街」をつくるのだということであった。その街とは、よく言われるような忽然と街の中に出現する、単なる複合用途の建築物のことではない。アメリカ村という街の一部になることだ。だから我々は建築を設計するというよりも、街を設計したと言いたい。あるいはアメリカ村という街をコピーしたと言えるかもしれない。

■街の何をコピーするのか

アメリカ村の街を特徴づけるヴォキャブラリーを拾ってみる。

●エレメントの連続性と混在

個性の強い中小の店舗が並んでいる。自己主張の強い看板と商品が道端に溢れている。アートらしいものもあればキッチュが我が物顔でのさばっている。それが街の魅力だ。街を歩く連中の姿も、ここでは重要な街のエレメントだ。

●ヒューマンタッチ

人に見られたくて、人を見たくて人が集まってくる。友達の会話が欲しくて店にやってくる。店も客も、街の連中は皆、気分を共有する仲間だ。

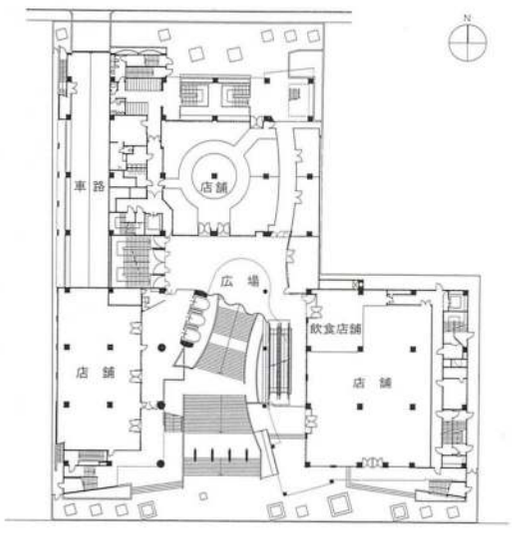
●多様性

様々な店舗が自己主張している。静かな事務所がある。木造の住宅もあり、マンションの玄関もある。楠の木立ちに囲まれた神社があり、高層のマンションの部屋がいつの間にか全部アトリエショップに変わってしまっている。脈絡の無いところに街の文脈を読む、そこが面白い。

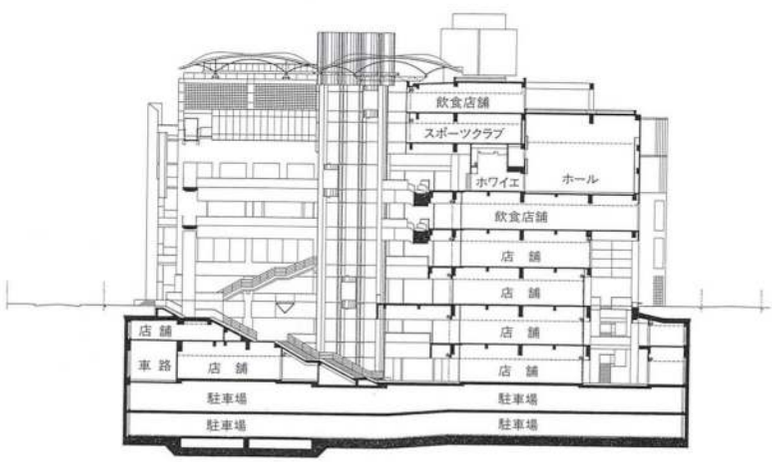
●自然

路地と道端の街である。路地を歩いていると何時の間にか店の中を歩いている、かと思うと道に出ている。街中が店であり、路地であり、道端である。そしてそこには雨が降り、風が吹き、夏は暑く、冬は寒い。一切の管理された空間から開放された当たり前の街。そこでは自由の空気が吸える。

●空のある街



配置地図 1：1200



南北断面図 1：1000

空が見えることは大切だ。空の見える街を歩く時、人は自分を見失うことが少ない。そして自分を主張する。三角公園の青空がそれを証明している。

この5つのヴォキャブラリーをどのように建築空間に実現するのか。私達はそのための5つの方針を立てた。

1．路地を巡らす

アメリカ村は路地の街、道端の街だ。ここでまず考えるべきは店づくりでなく、路地づくりである。店づくりから発想すれば、まずは大きなユニバーサルスペースを建築空間として確保することから設計は始まる。何時ものパターンだ。しかしここでは、まずどのように路地をつくるかというところから発想する。そしてその次にどのような店をはり付けるのか、店づくりを考える。そのマーチャンダイジングがあって始めて、路地優先の設計の発想が許される。路地建築の実現には設計者の発想以上に、マーチャンダイジングスタッフの能力に負うところがはるかに大きい。

2．自然の空気に触れる

広場と路地は屋外空間でなければならない。空調された、管理される空間に自由はない。それはアメリカ村の空気から最も遠いところにある価値観である、夏は暑く、冬は寒い。風も吹くし雨も降る。

3．周防町通りの広場をつくる

通りに沿った約700㎡の広場をつくる。これは当時アメリカ村唯一のオープンスペースであった三角公園の広さに匹敵する。三角公園がしばしば自然発生的なイベント広場になるのに比べると、この広場はイベント広場というよりも、通りを歩く連中を眺めるための溜まり場である。

4．清水町通りの広場をつくる

当時、街の北寄りに人が溜まれるようなスペースは無かった。南と北に2つの広場をつくってこれを繋げば、新しい回遊動線が生まれる。

5．中央の階段広場をつくる

アメリカ村に新しいシンボルをつくる。それは同時に地下2階から地上7階まで、極めて自然に人が歩きまわる立体広場をつくることでもある。

■街に屋根は要るのか

最も真剣に議論したのは、中央広場に屋根を架けるべきかどうかであった。南の正面が大きく開放されているのであるから、広場と路地空間を完全なインテリアとすることは論外であったが、可動屋根を架ける選択肢は最後まで残った。

強烈な雨と日差しを避けるテントが欲しいというのは自然な欲求だ。それでは「自然」のコンセプトが弱められる、あくまで完全オープンでいくべきだという主張も筋が通っている。

皆が納得する別の視点が在った。

中央広場に屋根があると、その下に一歩踏み込んだだけで、そのずっと奥まで含めたひとつの空間に入ったという気になるだろう。そしてそこに一つの界隈を意識させる。そのような仕掛けとしてこの可動屋根は欠かせない。また必要に応じて屋根を架けるという行事が、この街の共同幻想をつくる手掛かりにもなるだろう。

■都市の自由は管理された空間で窒息する

こうして振り返るとビッグステップは、形はそうであっても目指すところはアーバン・インテリアと呼ぶに相応しいだろうかと思い始める。設計の目指したところは、建築空間のアウトドア化である。それも地下2階、地上7階、延べ床面積20,000㎡（駐車場除く）という大型商業建築のアウトドア化であった。

大型商業建築は際限無く快楽空間を追求する。そうして我々は、街を歩きながら気づかないままに計算され尽くした建築のインテリアに引き込まれ、その中を泳がされることになる。

しかしここで私達が意図したことは、建築のインテリアを都市空間に連続させようとする方向ではなかった。むしろその逆の方向であった。建築のインテリアを解体して、出来るだけ都市空間の中に開放する。空調機械で管理された快適な空間を解体して暑くて寒い、雨の降る空間をつくる。子供たちを動物園の檻に入れるのでなく、サファリパークの野に放つ。都市の本来の姿をアメリカ村の子供たちは求めており、僕達はそれに従ったのである。

（いのくち　しょうぶん）



最上部から望む



広場へつながる階段

敷地の位置	大阪市中央区西心斎橋1丁目17番および26番
地域・地区	商業地域（指定容積率500%、基準建ぺい率100%）防火地域、駐車場整備地区
主要用途	店舗（物販、飲食）、映画館
敷地面積	4,278.87㎡
建築面積	3,335.35㎡（建ぺい率77.95%＜100%）
延面積	28,632.28㎡
容積率対象面積	22,905.83㎡（容積率535.32%＜535.95%）
構造・階数	SRC、RC、S造　地下4階　地上7階　塔屋1階
高さ	30.75m 塔屋最高高さ　38.0m
公開空地	有効面積　1,043.20㎡ （公開空地率 24.3%） 実面積　999.15㎡
駐車台数	135台

博多リバレイン―アトリウムガーデン―

日建設計 設計主管
村田　琢真

芝生に座り語らう恋人達、ベンチでお弁当を広げる中年女性、高級ブランドのショッピングバッグを傍らにコーヒーを飲む若い女性、芝生を走り回る子供達、開業後しばらくたったアトリウムガーデンの光景に、設計に携わった我々はこの屋上庭園が博多の街に根付いてくれるに違いないという思いに胸を撫で下ろした。我々は今までに、多額な費用を掛けた大空間や、鳴り物入りでつくられた所謂イベント広場や、オープンスペースが結局は使われなくなり、十分なメンテナンスを受けられなくなって寂れてゆく様を数多く見てきた。アトリウムガーデンは再開発の核施設であり、この場のでき如何が再開発の成否を左右すると言っても過言ではなかった。

博多リバレインは後述する二つの市街地再開発事業の総称であるが、見方を変えれば商業施設が天神地区に一極集中する福岡市にあって、博多駅周辺地区（キャナルシティー博多を含む）に続く第3の回遊拠点づくりとして、四半世紀にわたり官民一体となって計画が進められた複合事業の総称ということもできる。アトリウムガーデンはウォーターフロント側の再開発、下川端地区第一種市街地再開発事業における約3,000㎡の全体共用部として計画された。施設は福岡市アジア美術館、ホテルオークラ福岡、スーパーブランドシティ（商業施設）、市営駐車場等11の用途、100を超えるテナントにより構成されている。もう一方の下川端東地区第一種市街地再開発事業には歌舞伎を中心とした演目を対象とした官立民営の博多座があり、二つの再開発を合計すると20万㎡を超える規模の事業である。

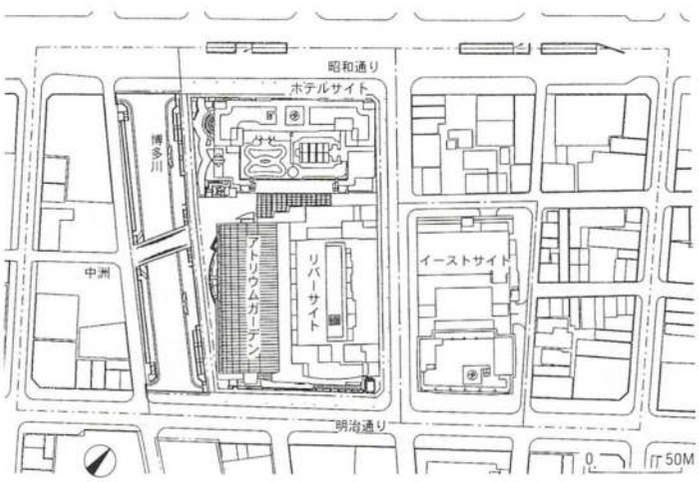
■計画の経緯―都市のなかの位置付け―

我々日建設計が計画に参画した1991年当時の既存基本計画は、商業施設の効率を重視した、閉鎖的なものであった。その後周辺商業施設の個性的で旺盛な開発および、経済状況の変化による大きな計画の見直しのなかでクローズアップされたのが、市の上位計画でも言及された“ゆとり”を中心に据えた周辺開発との差別化である。

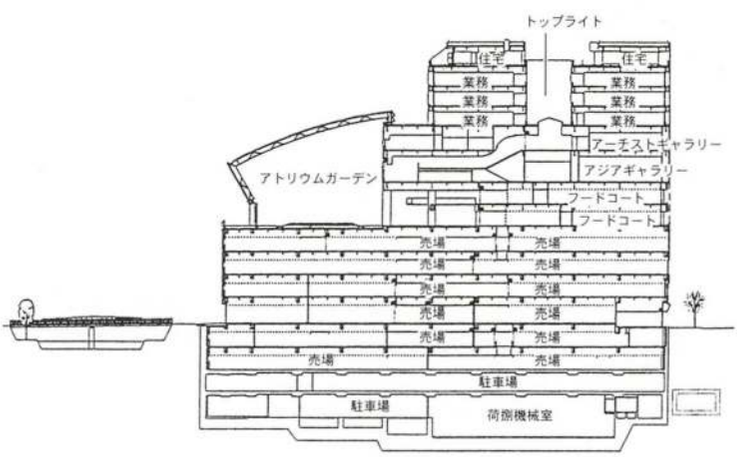
福岡市の中央部に那珂川という大きな河川が流れており、河口に近い市の中心部で中洲が形成されている。西日本一と言われる夜の繁華街である。中洲を挟んで那珂川の反対側に博多川があり、本計画地は博多川に面して計画されている。福岡市は、再開発と時期を合わせて「博多川夢回廊」と名づけられた博多川の護岸整備計画を進めていた。この好立地を活かした計画が求められた。実際に建ちあがってみると、川面のオープンスペースが計画地に与える空間の豊かさは計り知れないものがある。しかし、計画地自体は建ぺい率80%で施設が計画され地上部分での“ゆとり”の創出は難しい。こうした中でクライアントのキーパーソンから「チボリ公園のようなところが造れるといいが…」という希望が出された。

コーディネーターは、都市未来ふくおかという福岡市と地元企業による第三セクターであり、豊富な再開発の経験を持つスタッフにより構成されている。同社は両方の再開発とも組合から業務委託を受けコーディネートを担当した。

最終的に我々がアトリウムガーデンの本質的な要素として取り上げたのは、市民が気軽に立ち寄れること、緑が豊かで整備されていること、適度なソフトが用意されており時間が過ごせることの3点であった。これは簡単なようで、既存の地区公園やアミューズメントパークで3点とも満足する公園は見い出せない。室内化することは我々日建設計からの提案であった。日本海側の気候に配慮して天候に左右されることなく利用できる場を創り出すという機能的な面もさることながら、象徴性および、再開発初期における関係者の求心力を生み出すことが重要と考えたからである。更にいえば広々とした場をつくることが重要なのではなく、空間に内包されることに



配置図



断面図 1：1500

よる心地よさを創出すべきと考えたのである。

計画を実現する過程で様々な議論がなされた。特に全体共用部を区分所有するキーテナントからは、ランニング、メンテナンスコストの抑制、商業的なイベント対応の強化等の提案があった。様々な課題に技術的な対応をしながら、コンセプト的には都市未来ふくおか、日建設計を含めた計画サイドが前出の3点にこだわり続けたことで、現在のアトリウムガーデンの性格が形づくられたということができる。

■アトリウムガーデンを活かす工夫

（1）施設構成

アトリウムガーデンは地上5階に配置されている。5階に向けて、歩行者の幹線道路である明治通りからはシースルーのエレベーター、エスカレーターが設けられ、博多川沿いの遊歩道からは、川辺の雰囲気を連続させる階段状のステップテラスが設けられている。このアトリウムガーデンを中心に据えた、外部からも視認できる回遊動線に再開発のほぼ全ての施設が関連付けられた。なかでも、多くの人に利用されているのが、福岡アジア美術館とアトリウムガーデンを結ぶ動線である。この市立の美術館は世界でも有数のアジアの現代アートを収蔵している。従来の複合施設にある美術館はその閉鎖的で単に隣接しているものが多かった。

しかしこの福岡アジア美術館は、当時の桑原市長の英断により、交流をテーマに掲げ市民が訪れ易い美術館を目指した。このため我々は様々なアクセスルートを工夫することが可能となり、美術館は複合施設の中に有機的に溶け込んでいった。なかでも密接な関係をもつのがアトリウムガーデンとの連続である。美術館のロビーから3,000㎡の庭が見下ろせる。

そこには南條史生氏のコーディネートによるアジアの現代アートが見てとれ、美術館が延伸しているかのようである。アトリウムガーデン側からは、美術館に連続していることによる文化的な奥行きの深さを獲得しており、施設全体にとって重要な補完関係が成り立っている。

さらに、商業施設との関連も有効に作用している。高級ブランドショップを集めたスーパーブランドシティの持つグレード感が隣接するアトリウムガーデンに波及し、上質な大人の雰囲気を醸し出している。

（2）維持管理

再開発施設にとって共用部の維持費の削減は大きなテーマである。我々は先ず、断面形状の検討と単純な機構による大規模な自然換気システムをとりいれた。夏季には、アトリウムガーデン上層部の熱気を排気しながら、下層部の人がいる部分のみ局所空調を行う。また、屋根面はガラスの透過性よりもスペースを作り出すことを重視し、乳白の遮光フィルムを貼ることで、飛散防止と直射光の進入を抑えている。

それでも南面しているガーデンには植物の生育にとって十分な日照があるため、観葉植物のような緑ではなく、自然の林のような樹木や芝が育っている。

小山を形成しているのは、ハリボテや、プランターボックスではなく、本物の土と草である。これらは、単に目に優しいだけではなく、夏季には有効な収熱機構として働いている。

（3）ソフト対応

アトリウムガーデンには小規模なイベントが可能な施設は用意されている。ただしそれはあくまでサブ的なソフト対応であり、ここで少し特徴的なシステムは、カフェによるガーデンのメンテナンスと言えるであろう。

メインカウンターと二つのキオスクを持つカフェの従業員が、ガーデン全体が客席のように食器の片付けや、清掃をおこなうことで、訪れた人は堂々とアイスクリームの食べ歩きができ、テーブルでゆっくりと時を過ごすことが可能になった。また隣接する飲食店には積極的にガーデンに進出することを促した結果、公園に面したオープンカフェ街のような雰囲気を作り出すことができた。

■おわりに

大きな内部空間が都市施設として認知されるには、空間自体が持つ魅力もさることながら施設構成の部分で述べたように、その後背施設によるところが大きいと考える。基本的には複合商業施設である博多リバレインのアトリウムガーデンが、経済的な逆境期を乗り越えて、博多の街に根付き、真にアーバンインテリアと呼べるスペースに育ってくれることを心から祈っている。

（むらた　たくま）



博多リバレイン全景



アトリウムガーデン全景

事例紹介(1)／ポケットパーク

Stop Over
～都市のオアシス～

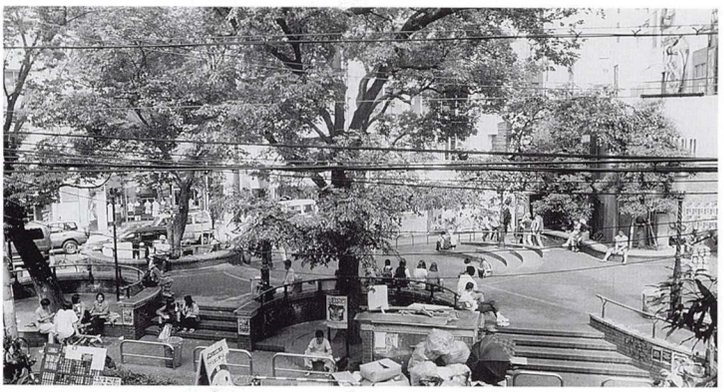
都会の雑踏の中にあって、思わず立ち止まり、なぜか腰をかけてしまう空間。
都市空間の計画の中でわずかに残した敷地を巧みに利用し、緑や水を取り入れて喧騒の中に潤いを与えている。
動線空間から抜け出したベンチが、ひとときのくつろぎをアフォードしている。
活気が似合う場だからこそ必要な、そこに居ることだけが目的となる空間である。（T．N）



→マルビル　高層ビル街の一角に創られた休息のスポットとなる公園。商業施設、ホテル、オフィスが混在する地区の中で、緑を提供するオアシスとなっている。



MBS毎日放送横通路　商業ゾーンへの誘導のための演出として、わずかな歩道を楽しく歩けるスペースにしている。アーチの外に腰掛けて道行く人を眺めるのも楽しい。



アメリカ村三角公園　アウトレットやDCなど、若者が集まる商業ゾーンの中心にある公園。大きな商業ゾーンになる前から存在する都市公園だが、今は、すっかり若者のたまり場になっている。



ＪＲ神戸駅東側・水の壁（WATER WALL）　駅や駐車場に隣接する動線空間だが、街の中心部への人の流れに沿ってつくられた滝状の水の壁。滝の裏にいるような不思議な感覚と水のゆらぎが、なごみを演出している。



ホテル・リッツカールトン前歩道　車道より一段高い所に人工地盤をつくり、広い遊歩道に。内外一体型複合施設の一角で買い物の合間に腰を下ろすのに絶好のロケーション。

Walk Through
～楽しみながら歩く～

快適に、楽しく歩くことが出来るためには、危険のないこと、疲れさせられないこと、が基本条件。交通事故に巻き込まれる心配もなく、雨風にもさらされず、おしゃべりをしたり、周りを眺めたりできれば、歩くのもまた楽しい。長い道も単調でなく、景色が変われば、いつのまにか歩くことができる。田舎道の楽しみが、山や川、木や草を眺め、自然と触れ合うアウトドアにあるのなら、都会らしいそれは人工のインドアにあると言ってよいだろう。近年創られる「通り」は、施設と施設をつなぐ単なる廊下ではなく、素材・デザインのバリエーション、様々な工夫を凝らし、楽しみながら歩ける空間が見られる。（K．I）



ディアモール大阪　その総面積は広いが、狭くて低い通路の多い梅田地下街に、やっと開放的な空間が出現した。



←クリスタ長堀　大阪市内の３本の地下鉄を交差し繋いでいる地下通路。店舗以外にも楽しめる要素が配置されている。



西梅田ガーデンシティ　西梅田からハービスへの長い地下通路。低い天井の圧迫感も、人工滝に目をやることによりやわらぐ。



梅田阪急百貨店前通路　趣向を凝らした季節の演出が通行人の目を楽しませてくれる。



博多天神地下街　人工照明の中、それぞれの店の顔を活き活きと見せながら、一つの通りとして独自の雰囲気を持つ。



京都産寧坂　伝統的アーバンインテリア。店先や通行の人々を眺めながら、今も昔もたくさんの人々が散策を楽しむ。

事例紹介(3)／ギャレリア

Stay Here
～滞留を楽しむ～

人を待つ、休憩、立ち話、時間つぶし。その使用目的はいろいろだが、家庭や職場以外にも、しばし寛げる場所がほしい。見知らぬ他人同士が同じ空間に居て、互いの存在が邪魔にならず、人がそこここに居るからこそかえって居心地の良い、都会らしい空間がある。たくさんの人を包括し、なお、それぞれの人・グループの個空間を確保する大空間ギャレリアは、天井を感じさせない開放空間。最近流行のオープンカフェが良く似合う場でもある。　（K．I）



神戸キャナルガーデン　百貨店と量販店を両壁に持つ光あふれるギャレリア。どの年齢層の人にも気持ちのよい空間。



神戸キャナルガーデンに置かれた動くオブジェ　広い空間におけるひとつの寄り所、アクセント。



←福岡大丸エルガーラ　内と外、両方の良さを備えた福岡大丸の建物と建物のつなぎ通路。夜も安心して居ることが出来る。



神戸大丸横回廊　歩道から一段引っ込んだ「あいまい空間」の持ち味。



アプローズタワー　梅田阪急インターナショナルホテル。ここだけはいつも涼し気な風が流れているようだ。

Come Together
～人が集まる～

人が集まってくるというキーワードで集められた場所の特徴を挙げるならば、適度な拡がりや開放感を伴った、心地よい囲われ感をもった空間であるということができるのではないだろうか。例えば、ヒルトンプラザはビル内のアトリウムであるため平面的には大きな拡がりはないが、圧倒的な高さの吹き抜けと、道路面がガラスで構成されていることにより、適度な開放感を得ている。またコムズガーデンは四方を囲われたサンクンガーデンであるが、高さが2層しかないため圧迫感を感じさせることがない。

このように形式には違いはあるが、囲われながらも、少し距離感をもって動きを感じることができるので、退屈することなく落ち着ける、人が集まる空間になっているのだろう。

（Y.K）



↑↓東京国際フォーラム　長手方向の抜けに対して幅が変化することでたたずみが生じる。



コムズガーデン　広場面積に対して抑えられた高さが快適である。





←神戸ハーバーサーカス　広場を囲うようにさまざまな視点＝溜まる場が設けられている。



京都高島屋エントランスホール　売り場面積を削って落ち着ける空間を創った意義は大きい。



ヒルトンプラザ　吹き抜けの高さと道路面をガラスで構成することにより開放感を得ている。

Walk Around
～空間の変化を楽しむ～

近年の大型（再）開発による複合施設には、その都市的スケールをいかし、また様々な工夫を凝らした新しい種類の空間が見られる。

恵比寿ガーデンプレイスや京都駅ビルは、その都市的・地形的スケールの空間が緩やかに囲われていることで、おおらかな安心感につつまれた、開放感にあふれながらも、求心力をもった空間が創られている。

また、阿倍野ルシアスや福岡キャナルシティでは、複雑に関係しあう建築群によって囲まれた空間は、歩みを進めるごとに様々に変化するシーンが用意され、そこにたたずむ人には、水が動き、光が変化するなど飽きることなく楽しませる仕掛けにあふれている。

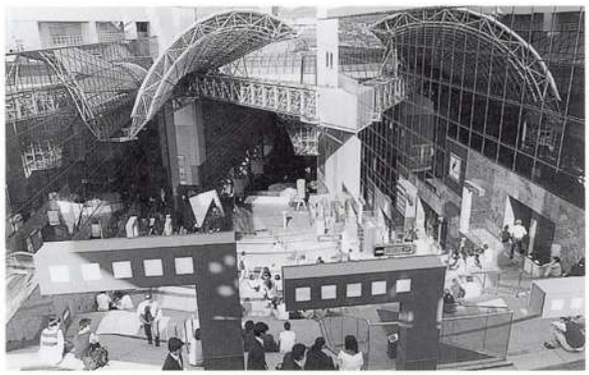
ここにあげた事例は、スケールの大きな外部空間ではあるが、インテリア的魅力に溢れた空間でもある。（Y.K）



福岡キャナルシティ　複雑に絡み合う建築が空間に変化を与える。



阿倍野ルシアス　地下からの吹き抜けに様々なレベルで仕掛けがからむ。



京都駅ビル　建築によって生み出された谷は複雑な要素で構成される。





←↑恵比寿ガーデンプレイス　異なるスケールの建築群に緩やかに囲まれている。

Symbol

～アーバン・インテリアの仕掛け～

アーバンインテリアには様々な仕掛けが溢れている。一般的なインテリアにあるようにそれは床・壁・天井であったり、列柱や窓・開口部であったり、結界を表わす門や敷居・段差であったりする。またアーバンインテリアにも他のインテリアと同じように家具が置かれ、サインがあり、アートがあり、照明器具が設置され、インテリアとしての空間を形成している。それらの仕掛け、つまり様々な装置が、例えば統一感を醸し出して、ある街区のイメージを創り上げたり、また時間の経過とともに場所や装置そのものが愛称で呼ばれるようになったり、待ち合わせの場所やちょっと佇ずんだり腰を下ろしたりできる場所として、あるいは特に目的を持って行く場所ではないが都市の中での快適な時間を過ごせる場所として、人々の生活シーンに溶け込んでいく。そしてまたそれらの「仕掛け」は、空間的であることはもちろん、その場所で行われるライブ的なイベントや、音が創る音景とも呼ぶべき時間的なものであったりもする。もしかしたら建築家の意図に反して、人々の記憶に残るのは、建築の空間というよりは、それらの仕掛けの断片的なイメージなのかもしれない。

これらの仕掛けについて言えることは、それが都市というスケールでないと得られない魅力を持って人々を引き付けているということだ。小規模な個々のインテリアには見ることのできない、アーバンインテリアならではの装置の事例を街の中で探してみた。（K．N）



神戸大丸前時計のモニュメント　待ち合わせには時計の見える場所が好まれることも多い。それがモニュメントとして人々に認知され、親しまれている場合はなおさらである。





左上：近鉄難波駅構内ベンチ・照明　家具や照明のデザインがアーバンインテリアの中に統一感や広場・街区全体のイメージを創り出す。そこに人の賑わいが重なって都市の風景が生まれる。

右上：ディアモール大阪の楽器のオブジェ　街には子供たちもたくさんいる。モニュメントとして鑑賞する芸術作品オブジェだけでなく、子供たちが触って興味を持てるような仕掛けがあってもいい。



←ハービス大阪のパイプオルガン　人の集まるところには空間的な仕掛けとともに、音楽やイベントなど様々な時間的仕掛けが誘起される。毎日決まった時間に行われるもの、即興的なライブと様々だが、そこで人々は時間としての風景を共有することができる。



→ATC前階段　人は椅子にだけ腰をかけるのではない。適当な段差と背後への安心感、前方のビューがあれば、人はいろいろな所に腰を掛け、アーバンインテリアとして利用する。階段はその最も顕著な例である。

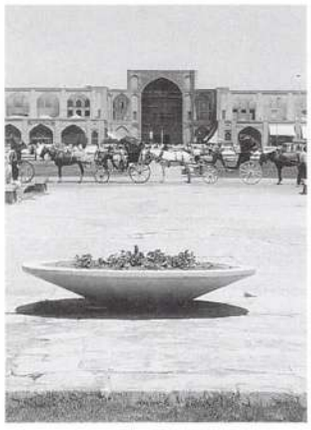
海外のアーバン・インテリア

大阪産業大学環境デザイン学科講師
ペリー史子

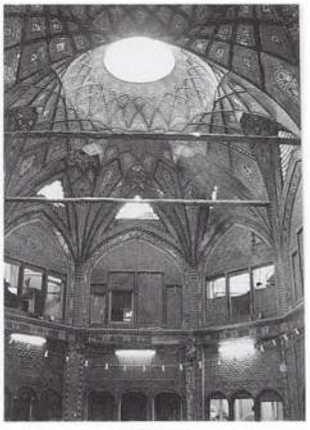
ここでは、「総論Ⅰ」に依拠しながら、海外事例を紹介する。まず、通路（長軸）型のものについて、通路空間、その内部で通路同士が交わったり他の空間へとつながる結節空間、外部空間との結節部（ファサード）を示す。そして、ホール・広場型の事例として、ワールド・ファイナンシャル・センター・ウィンター・ガーデンと、修復再開発型でつくられたコベント・ガーデン・マーケットを挙げる。ネットワークを形成したアーバン・インテリアとしては、トロント、モントリオール、カルガリー、エドモントンなどカナダの諸都市のものが充実した姿を見せているが、トロントのネットワークと空間を紹介する。

■カイサリーエ・バザール／イスファハン、イラン

アッバース大王によって造営された王宮の広場（メイダーネ・シャー）は、その四周を2階建ての建物で囲まれているが、その北中央、広場をはさんでモスクの反対側にカイサリーエ・バザールへの入口がある。バザールの通路空間網は、多くのリンク的通路空間が複雑に、不規則に組み合わさってできている。現在では電灯がともされているが、ヴォールト天井の明かり採りからは強い光が差し込む。


ファサード


通路部分


結節部分

■ギャルリー・コルベール（1826）／パリ、フランス

パレ・ロワイヤルのほぼ北側に位置する。元ホテル・デ・コルベール（ルイ14世時代の宰相コルベールの館）であったが、革命後収用された後に、既存の建物を生かす形でパサージュとファサードが作られた。通路がL字に折れる部分に直径17mの大ロトンダを設けた初めての例であり、この結節空間は、以降、商業空間の主要要素として様々な影響を与えた。衰退して一時は閉鎖されたが、現在は隣接する国立図書館の分館としての役割を担っている。



ファサード


通路部分


結節部分（ロトンダ）

■ガレリア・ヴィットリオ・エマニュエルⅡ世（1865-1877）／ミラノ、イタリア

ラテン十字の平面をもつ。ミラノ大聖堂前のドゥオモ広場とスカラ広場を結ぶ長軸は約200m、幅は14.5m、ガラス屋根ヴォールトの頂点の高さは約30m、結節空間であるロトンダの直径は約37m、そのドームの頂点の高さは約42m。イタリア統一を記念し、ミラノ市長による一般市民参加のコンペティションから選ばれたメンゴーニの設計である。1、2階は店舗、上階は居住空間に当てられている。


ファサード


通路部分


結節部分

■ BCE プレース／トロント、カナダ（1992）

トロント市街地中心部、ユニオン駅の北に位置する。長さ110m、幅13m、高さ約27mのガラス張りのヴォールト天井を持つアーケードは、2棟の高層ビルと移築された建物も含む19世紀の歴史的建築群を1つにまとめている。地上と地下レベルとは開放的な空間で結節され、また、一階床のガラスブロックを透過する光によっても、地上と地下の一体化が図られている。アーケードに積もる雪は、屋根に組み込まれたケーブルで暖めて溶かし取り除いている。


ファサード


通路部分


結節部分

■コベント・ガーデン・マーケット／ロンドン、イギリス

修行僧が始めた市場から発展し、1880年に現在の建物が作られた。1974年に卸売り市場が移転した後、地域再開発手法をめぐっての「保存」を要望する地域社会の意見を取り入れ、ロンドンの市街地の中心部にある歴史的建造物として、保存・修復しつつ都市機能の再活性化を図ることを目的に作られた。

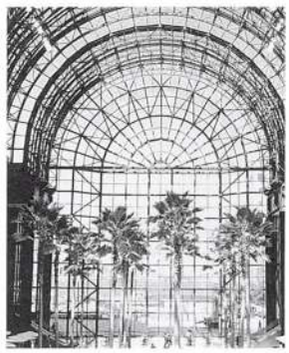

ファサード


広場空間

■ワールド・ファイナンシャル・センター・ウィンター・ガーデン／ニューヨーク、アメリカ（1988）

シーザー・ペリの設計による。ワールド・トレード・センターからの歩行者ブリッジと、ワールド・ファイナンシャル・センターの4つの高層タワーへの入り口を結ぶ部分に位置し、ファサードはハドソン川沿いの広場に面している。ハドソン川をのぞむガラスに覆われた空間は、その中央にはシュロの木が植えられ、寒さの厳しいニューヨークにおいて人々が歩き、休憩し、イベントも開催できる場を提供している。


ファサード


広場空間（ハドソン川をのぞむ）


広場空間

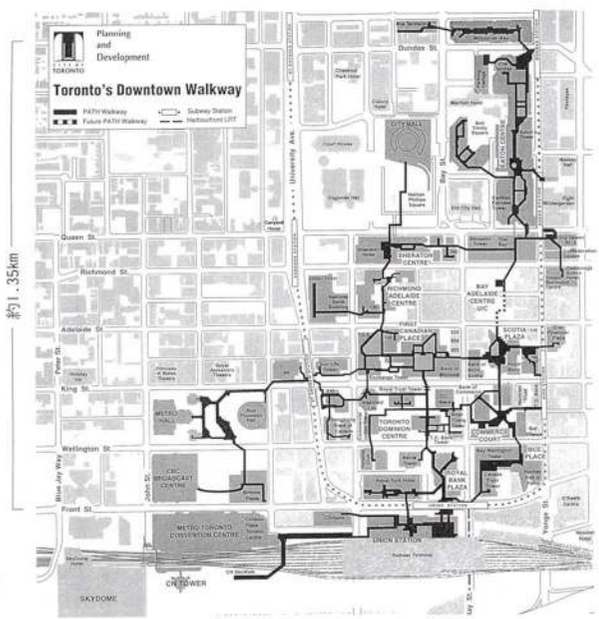
■ PATH ウォークウェイ／トロント、カナダ

トロントのアーバン・インテリア網とその周辺一帯は、トロント・アンダーグラウンド・シティと呼ばれる。天候からの保護と車からの解放された歩行空間を目指して、最初の地下鉄の開通と共に構想が生まれ、今では27のトンネルと3つのブリッジなどから成るPATH ウォークウェイシステムが、48のオフィスタワー、6つの主要なホテル、鉄道・地下鉄駅、ショッピングエリア、ダウンタウンの娯楽・文化施設等を相互に結びつける。近年では、市当局は、新たにネットワークに参加する場合は、車椅子のアクセス確保とともに、外の景色や自然光を地下空間に取り込むことによって地上との一体化を図るように指導している。通路部分はPATH ウォークウェイとして統一されたロゴ入り標識によってその位置や方向が示され、随所にネットワーク全体図が設置されている。


PATH ウォークウェイ空間



PATH 標識



トロント PATH ウォークウェイの地図
出展：City of Toronto, Planning and Development Department

都市空間のインテリア、インテリアとしての都市

京都工芸繊維大学助教授
加藤　力

セカセカと走り急ぐことを止めて、風に身を委ねるように街の中を漂ってご覧なさい。車などすぐにでもうっちゃって、一時、街角に佇ずんで、空気を一息吸い込んで、目を遠くまで投げかけ、街を見渡すことです。出来れば、建物の柱に心も身ももたせ掛け、時間を止めてあたりの様子をじっと窺ってご覧なさい。

あるいは傍らの鉄柵にでも腰を沈めて、そのままの恰好で、目線の位置をやや下げた状態で街を見通して観ることです。もしくはひと昔の映画俳優よろしく、コートの襟でも立てて、街の雨に濡れそぼれて、時をやり過すのも一考です。

目を閉じて揺れ動く街の音の中に身を投じてみなさい。いつもは遣りすごしていた、その街が、あなたの神経をどれほど逆なでするかを、確かめるのです。街のその空間が、あなたが其処に存在するに相応しい場所であるか、自分自身の身体を使って推し量ってみることです。

—都市における振舞い—

その時、如何なる都市の情景があなたの視野の中に映り込んでくるのか。あなたの耳を震わせるのは、街から発するどの音色、音質なのか。あるいは鼻の孔の粘膜を湿しているのは何の嗅いの分子なのか、注意深くさぐってみることです。

大切なことは、街の表層の部分に直接手を当て、指でなぞって、そこから伝わり来る街の感触を試すことです。全意識を手先、足先に集中させれば、掌や足から伝わる土地や空間の力を読み取ることだって出来るはずです。

全身を研ぎ澄まして、全ての感覚を動員させて都市の発している情報を感受するのです。おそらくはその場の空気は負の要因ばかりに支配されているでしょう。それでも目を背けることなく、耳を塞ぐことなく、手の汚れも厭わず、嫌な臭いにも眉をひそめずに。

あるいは、頻雑な都市の過剰刺激がすでに受容能力を通り越し、麻痺してしまっているかも知れません。何はともあれ、都市のもたらす刺激をどのように受け止めるかが、アーバンインテリアの第一歩です。

—都市に対する感受性—

都市に潜む冷めたさ、あるいは温かさのチョットした差を区別するのはそう難しい事ではありません。しかし、石の塊の大小、材質の違い、刻みの深さによって温度差は微妙に異なります。髪の毛を乱すほどの風であれば、誰もが感じることは出来ますが、空気がゆっくりと動くのを確めることが出来れば、その場の出来はなかなかのものです。それとも足元から拡がる床の模様が確実に目で捉えられ、靴を脱ぎ捨て裸足で歩きたくなるような街の仕上げになっていれば上等です。

足が留まる場所の周辺サイズが、ぐっと身の丈近くにまで降りて縮まり、ざわついた街の速度がそこでスーッと止まって静まり返り、尺度が豊かな膨みを持って感じられれば何も言うべきことは無く、すでに内なる都市の空間がそこには存在しています。視線の行き着く先々のあちら此方に深い街の翳りなど棲み付いていれば出来すぎというものです。

こけ脅しで大仰な、見掛け倒しの不粋な、仕掛などは都市の構成にはあまり役立ちません。小さなディテールが丹念に積み重ねられ、日の光の中で刻々と表情を変えるティクスチャーで被われて、足元の脇から光が湧きあがるような空間であればもう至福の限りです。街の中にひと一人を立せて、そこから発想することが肝心です。

—都市の中の内なる空間—

都市が人の空間であれば、車の速度から一旦離れ、歩行のリズムに戻し、通り抜けるだけの通過動線から一歩踏み込んで、人が立ち澱み、ゆっくりと息つく溜りを用意することです。出来ればほんの一瞬でも腰を下し、その姿勢を基準にして、その場の眺めをこしらえるべきです。視線はアチコチ宙を浮くことなく、幾つかの要所を獲えて漸次、繋がり、結ばれ、関連していくことが大切です。視線の及ぶ範囲が適当に距離を守っていれば空間が人に寄り添って来るはずです。人の身振りが其処から浮び上がり、気配が色濃く立ち込め、声が空間に響くようになればもうしめたものです。

その上、犬がそうするように、街にもっと人間の嗅いを擦り付けることです。簡単には打ち消すことの出来ない人の手の動きを散りばめることです。ヒラヒラと自然の成り行きに応じてはためく動きなどを取り入れ、季節の光彩にきらめく法則を生かし、日々の状況に感応する流れを造る。刻々の音に小さく鳴り響く旋律を導き、人の感覚に訴える要素を取り入れることです。

—都市に取りつく装飾性—

街を、人の居る空間にする為には、例え都市であっても、スケール50分の１以下まで落としてデザインすることです。その際、忘れてはならない事は、都市にも物語を語らせることです。詩情や何も語らない街ほど味気のないものはありません。物語りは跡切れることなくどこまでも繋げ、続けていくことが必要です。何故ならば、ひと一人を介して、空間はどこまでも連続してつながっているものだからです。

—都市に潜む物語性—

（かとう　つとむ）

BOOK STATION
ブックステーション

カラーヒーリング
色彩がもつヒーリングパワーを実生活に生かす本

テオ・ギンベル 著

産調出版
1997.6.30刊
B5判　127頁　本体2900円



「色のパワーは、宇宙のナチュラルなエネルギーの一部です。いい色は私たちのエネルギーと互いに影響しあっています。そのため、昔から治療のために用いられてきました。」本書は、色の基本的な理解を深めるための「色の効果、色の科学、色と形」などの章から始まり、次に本書の特色であるやや神秘主義的な内容である「色彩瞑想法、身体における色エネルギー、人間のオーラ」において、理論の説明がなされる。そして最後の「色によるヒーリング」において、エネルギーのアンバランスによって生ずる「病気」に対して、色のエネルギーの力を利用して身体のエネルギーを調整し、活性化する方法について詳細に述べている。建築への応用例としては、ルドルフ・シュタイナーの学校の教室についてのあるべき色彩設計の考案は、興味をひかれる。（A・T）

都市のリ・デザイン
持続と再生のまちづくり

鳴海邦碩 編著
加藤恵正・角野幸博・下田吉之
澤木昌典 著

学芸出版社
1999.3.25刊
A5判　224頁　本体2500円



まちづくり関連の本は書店に数多く並んでいる。「持続と再生のまちづくり」というサブタイトルから、この本もつい見過ごしてしまいそうになる。が、ページをめくると、ディベロプメント、マネジメント、エコノミー、コミュニケーション、スペース、アメニティ、エネルギー、エコロジー等まちづくりに関わる様々なキーワードが連なっている。いずれも個別に論じられ、多くの課題が提示されているテーマである。そんな広範なテーマを一冊にまとめるなんて、何とも欲張りな企画であり、意気込みはわかるけど…という懸念も当然である。しかし、そこが著者ならでは。「デザイン」というひとつの視点から全編論述されることにより、広範なテーマも決して散漫にならず、非常に読みやすい内容になっている。「デザイン」の概念を多角的に再考するよき機会となり、更に、まちづくりに関する様々なテーマを一冊に、且つ分かりやすく解説しているという点でも、「欲しかったんだよね、こういう本が」と思うのである。（Y・O）

プラハ 建築の森

田中充子 著

学芸出版社
1999.6.10刊
四六判　240頁　本体2300円



プラハというと「プラハの春」、「チェコ」と「スロヴァキア」の分離・独立、「ボヘミアン・グラス」、プラハの建築と言っても恥かしながら「プラハ城」ぐらいしか思い浮ばない。東欧の一首都であるプラハは、中世・近世の香りが色濃く残る古きよき街並みが、欧州屈指の観光スポットとなっている所以だが、21世紀を目前にした今、なぜ、プラハなのか。
近代都市が一世紀に渡って追求し続けてきた機能とは対極にある古い街並み、或いはイタリア、フランス、北欧、ビザンチン、オーストリア、ドイツといった周辺諸国からの流入文化はオリジナルでも一流でもない。建築史専門の著者は「B級建築の集合」と明言している。但し、深い愛情を込めてである。街の人々もコピー建築だろうが何百年前の建物を今も使い続けている。何と、プラハ城内に現大統領の執務室があるというではないか…　歴史、社会、地理、建築、様々なエッセンスがブレンドされた著者のプラハを語る言葉は、全編やさしさと愛情に溢れ、なぜ、今プラハなのか、少し分かるような気がする。（Y・O）

自然共生建築を求めて

宿谷昌則 著

鹿島出版会
1999.2.25刊
A5判　189頁　本体2300円



冒頭に「建築環境とは何か、それに関わる技術とは一体何なのかを愚直に問い、それに答えることを試みた」とある。建築環境を調整する技術が現在向かっている方向をまず懐疑的に捉え、視野を広げて謙虚に物事を考える姿勢を貫いている。
本編は「システム」とは何かまで立ち返ったところから始まり、自然界のシステム、原理的なものを学ぶ。エネルギーや熱に関わる理論の説明は非常に理解しやすい。
続いて建築環境を構成する大きな要素である、照明・冷房・暖房について見直し、さらに最終段では、それらを再び統合する「つながり」について述べている。
良かれと思って採用する個々の技術の集積が、全体としては環境配慮に逆行してしまうかもしれないという懸念は常に在る。その落し穴を回避するには、基本的な知識技術を持つと同時に、環境をどうとらえるか、高い見識が求められている事を教えられる。
（A・K）

担当：会員企画小委員会／大谷由紀子・河崎敦子・塚口明洋

[座談会]

Welcoming

福祉関係者に聞く

ー老後も住み慣れたまちで暮らせる社会をめざしてー

――自己紹介と現在の仕事の内容についてお話し下さい。

慶松　昨年7月に設立された「訪問看護ステーションみさき」の所長として毎日訪問看護に取り組んでいます。このステーションは母体となる萩原みさき病院から独立したものですが、それまではこの病院に勤務し、院内での看護と訪問看護の両方に携わっておりました。当時受けた訪問看護の研修に強い関心を持ち、「在宅での看取り」に感銘を受けたことも私を訪問看護に導いたように思います。

「在宅」というのは本人と家族の自己決定で選ぶもので、「家にいたい」という強い意思がないとなかなか実行できないことですが、これを治療、リハビリ、生活の各面でサポートするのが私たちの仕事です。CAPD（在宅でできる腹膜透析）や透析、床擦れやキズの処置という医療行為、入浴の介助、足浴、清拭といった清潔面でのケア、そしてリハビリ、家族のサポートなど、どこまでが看護の領域なのかという問題もありますが、専門知識や専門技術の中で生活全般をサポートするという視点で行っています。何より在宅の方と病院の方では表情がまったく違うことも大きな励みです。例えば、自宅では入浴等に関しても病院とは違って患者自身の意志が優先されるということが大きいようです。病院のリハビリではなかなか歩けない人が家に帰ると這ってでも行ける、入浴でも自分の足で歩くという例があるように、どうしても「やらなければいけない、やってみよう」という意欲、つまり生活の中でのリハビリが効果的なようです。家に帰ると落ちていたADL（日常生活動作）が上がってくるという例が多数あります。訪問先はほとんどが65歳以上の高齢者で、脳疾患の後遺症、老人性うつ症の方などいろいろです。また、母体の病院に整形外科もあることから30歳代の脳性マヒの方など高齢者以外の障害者も一割ほどおられます。

このステーション以外に、施設に通所など他のいろいろな社会資源も併用してのケースもあります。訪問看護ステーションというのは、管理者が看護婦であり病院から独立した機関という看護婦にとっては画期的な制度で、医師は月1回の患者への訪問を行い、その指示書により運営されているのですが、この患者さんにはこういう方法でという対応は任されており、重責を荷っていると言えます。

瀬尾　7年前に夫の父の最期を8カ月在宅で看取ったのですが、その間一番有り難かったのが、「いつでも声をかけてね」の友人の一言でした。そんな「声をかけあう」関係作りができれば、システムがあれば、という思いで1995年に有償ボランティアグループ「ふれあい　あべの」を同じ思いの仲間と立ち上げたのです。近隣関係も希薄化、そしてプライバシー意識も高い、そんな現代社会に応じたキチッとしたシステムが必要だと感じたのです。「ふれあい　あべの」は会員組織で運営されており、入会には2万円の出資金を預かり退会時には返却する仕組みです。ホームヘルプサービスや外出、通院介助、産前産後の世話などサービスを受けた会員は1時間あたり600円のチケットをボランティアに渡し、ボランティアはそれを事務所で精算、全員が1時間500円の謝礼を受けるシステムで、現金での謝礼に代わる時間預託という方法も選択できます。有償サービス、有償ボランティアというのは耳慣れない、社会的にもなかなか認知されない言葉ですが、普通の人が何か他人にしてもらいたい時に感じる心の負い目、また行政の世話になりたくない気持ち、自分のお金で自分の意志でサービスを受けたい気持ちもよく理解できるのです。無償のボランティアを否定する気はありませんが、無償ということで卑屈な思いをしたくない、いつも「ごめんね」「すみません」と言うのも辛いし、言われるのも辛い。対等の立場に立ちたいというのが本当のところでしょうか。600円というのは自分が払う立場に立った時、無理なく負担できる金額というところからきています。現在の有償ボランティアの活動の範囲では、ホームヘルパーの資格は問いません。しかし今後介護保険が導入されると、そのサービスにヘルパー資格が必要となります。また、私たちが団体として継続して運営していくには法人格も必要、社会的にも認知されたい、そんなことからNPO法人格の申請、勉強会に参加しケアマネージャーの資格に挑戦など、このところあわただしい動きです。

――ホームヘルパーについて教えて下さい。

慶松　ホームヘルパー派遣というのは、市からの委託で行ったり民間独自で行うこともありますが、行政からの委託の場合、仕事になります。これには本人の家族意志が反映されないケースも当然でてきます。

瀬尾　その家族をサポートするのが私たち有償ボランティアの役割でしょうか。3級ヘルパーでは身体に直接触れる身体介助はできないのですが、家族なら更に治療行為までも資格を問われず行うことができます。その家族をサポートするということですね。

慶松　ステーション制度がなかった頃は、看護婦のする行為も、あれダメ、これダメ、誰が責任を持つかということに終始している観がありましたが、今は許容範囲が広がりました。同時に責任も重くなっていますね。

瀬尾　人間を相手にしている以上、介護、リハビリにしてもその境界の線引きというのは非常に難しいことを日々実感しています。

――在宅での看護、介護に携わられての問題点、キーワードなどは





慶松真弓

医療法人 一輝会

訪問看護ステーションみさき 所長

看護学校卒業後約15年間は2カ所の総合病院で勤務した後、訪問看護、特に在宅での看取りにひかれ、1994年12月に荻原みさき病院に就職。当時は、病院勤務と在宅での看取りを中心とした「訪問看護ステーションみさき」として独立。現在は毎日訪問看護に取り組んでおります。2000年4月1日から始まる介護保険にむけて、看護支援専門員としても10月から取り組みが始まろうとしているところです。

瀬尾洋美

「ふれあい あべの」運営委員・渉外担当

1995年5月、8人の有志と有償ボランティアグループ「ふれあい あべの」を設立。住み慣れた町で、年をとっても、心豊かな暮らしを続けるために"おたがいさま"を合言葉に活動している。生活のあらゆる場面での「ちょっと困った」を、対等な立場で助け合おう、という趣旨を、ひとりでも多くの地域の方々にひろめ、また運営資金の柱である賛助会費を頂くために、渉外を担当している。

任意団体「ふれあい あべの」は活動の継続性を高め、より幅広い市民事業を行うためNPO法人「F・A」に移行する。(99年10月予定)

その他、地区の主任児童委員、大阪市の介護保険事業計画策定委員を務めている。

企画／会員企画小委員会
Director/MASAKO TSUKAGUCHI
1999年7月5日　於本会会議室

何でしょうか。

慶松　病院の中だけにいてはわからなかったことですが、生活者と地域との関わりが確実に薄れてきていると言えますね。地域のちょっとした支えがあれば在宅でもやっていけるのではと考えています。いろんな社会制度を利用するにしてもそれにも地域との関わりが必要なのです。神戸市兵庫区は高齢者が多い所です。6畳1間のアパートでこんな状態の人が一人で生活できるのか、と驚くケースがあるのですが、たとえ水回りが共同のアパートでも回りの人が支え合う住み慣れた町のコミュニティがあるならばこそ、と感じさせます。

瀬尾　住み慣れた町だと、あそこの家の誰々という顔がありますね。仕事や家族、歴史がある、その人なりの精神の拠り所があります。ところが、病院に入ってしまうと何歳の女、氏名でしかないのです。高齢者の自尊心というのはなかなか手ごわくて、一歩家の中に入ると「隣のバアさんと一緒にされてたまるか」的発言が出て驚くこともあります。他の人には代えられない、その人にしかないものを皆さんお持ちなのですね。そして多分にワガママ。これからの高齢者介護のキーワードはだから「十人十色」、十把1カラゲにしないということでしょうか。良い意味でのワガママを認めてあげられる「十人十色」ですね。それが施設などでは十分でないから、「何で歳とって幼稚園扱いされるの」となる。タバコやビールも飲みたいのに「何でお茶飲んでチイチイパッパなの」となる訳です。

慶松　確かに「週に一度のデイサービスに行くとダンゴ3兄弟を歌わされる。それが不満だが、家族が行ってくれと言うから行く。家族が喜ぶから」という声もありますね。

――共に住宅を訪問してのお仕事ですが、住宅に関してご意見など。

慶松　住宅に関して「これが理想」というのに行き当たらないのが現状です。震災復興マンションと古い町のアパートという両極端も訪問するのですが、新しいから良いとは限らないですね。車椅子では生活できない、電動車椅子が通れないなどの点もありますが、人によっては洋式トイレが良いとも限らない。障害者住宅でも手すりが役に立たない、むしろ邪魔なことも。これは誰にでも対応できるよう作ってあるからでしょう。

瀬尾　人によっては頑張って動いた方が良い時期もあり、動ける間は不便な生活がリハビリになる。「ヨッコラショ」と言いながらも2階の物干しに行けたことが自信になる。だから一概にフラットなバリアフリーが理想とも言えないのではと思います。ところが、頑張れない時期というのもやってきます。その時になってその人の状況に合わせて改造すれば良いので、これがモデルケースというのはないと言えますね。そして高齢者自身も、例えば座り心地の良い椅子を選ぶといったような居心地の良さを過去の人生で追求してこなかった点もあるように思います。だから快適性ということに結構無頓着。仏壇やテレビを動かした方が良いケースも仏壇を動かすとその人にとって居心地が悪いとなる訳です。これも個別性、十人十色なのでしょう。

慶松　だからこそ「自分の居場所」で、家に帰ると動けない中でも何とか家事をこなそうという意欲が沸くのでしょう。

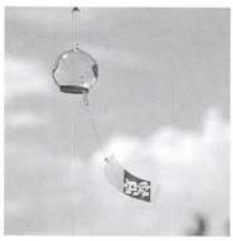
瀬尾　そうですね。同居している高齢者より独居の方がずっと元気というのを実感しています。日本というのはどうも個人を成熟させない社会というのか、自分の人生は自分で責任を持つ、という意識が貧弱な社会のように感じるのですが、お年寄り本人は結構、自己責任型、「わしが良いと言ってるからいいんや」と。それが施設介護では許されない責任問題となります。

慶松　「家で死にたい」と言ってもなかなかそうはさせてもらえない訳です。もともと「家で死にたい」気持ちを支えたい、というところから始まったステーション開設ですが、今は介護保険導入に振り回され、また他の異業種からの参入も可能とあって、ますます思うような仕事の環境とは違ってきている面もあり、介護の課題は大きいですね。

瀬尾　今は、どちらに行くか、どちらに向いているのかわからない難しい時代。それだけに私たちがどういう社会を作りたいか考えるのが大切であり、またどういう老後を生きたいか考えることで社会を決定する世代だと言えますね。

心地よさを求めて

中川　千裕
Nakagawa Chihiro
東畑建築事務所



素材・技術の源流へのRe-approachによって新たなる創造性に向かうことを企画するシリーズ第21回は「風」をとりあげる。風は古来より“火”や“水”とともに自然の持つ偉大な力のひとつとして人々の生活に深く影響を与えてきた。大災害をもたらす台風はその脅威の代表であり、その脅威から逃れるために人々は様々な工夫をしてきた。しかし一方で心地よいと感じる風もある。今回は私たちにとってその心地よい風とは何かを探ってみたい。

（「素材と技術が生み出すdesign」幹事会）



風が見える



そよ風が吹き桜の花びらが舞う姿は日本人であれば誰でも知っているだろう。強い風や雨などでは見る方もたまらない。人にとっても心地よい風の強さが美しい情景を見せてくれるのかもしれない。

心地よさを演出するものに風鈴がある。冷房の効いた部屋ではお目にかかれないものだが、なかなか風情がある。もっとも夏の暑さを少しでも和らげようとする工夫であろうが、その音はどこか心地よい。またその音は風の強さも教えてくれる。

ありふれたものだがススキが風に揺れる姿は美しい。夕暮時にでもなれば金色に輝き、風に合わせて波打つ姿はどこか浮遊感を感じさせてくれる。

寒い晴れた日、陸風が弱まり海風に変わる頃、海の上にできた霧が動いてくる。海霧と呼ばれるこの霧は、海の上にできた霧が風と共に陸の方へやってくる。まさに風の動きが目に見えるようだという。

風が残すもの

砂が風に運ばれ砂丘ができる。5mから高いものは20mは越えるという。よく見ると表面に模様ができていることがある。“風紋”と呼ばれるそれは、風速が5m以上になるとできるらしい。そしてこの砂丘は風紋を作りながら移動してゆく。風は砂を運び去って行くのである。

しかし運び去るだけではなく、風により形作られることもある。樹氷も風によって作られる造形の一つであろう。凍らない状態の雲や霧が樹木にあたり凍り付いてしまう。そして、風上の方に伸びているのが一般的だが、中には全体を被ってしまっているのもある。いずれにせよこれらは風が作り出す不思議な光景である。



風を弱める

あまりに強い風を何とか和らげる工夫に防風林がある。防風と言っても完全に遮ってはかえって風が巻込み局部的に強くなってしまう。ちょうど正面から見て60%位を葉や枝が万遍なく茂っている状態が最も効率が良いとされる。さらに風が垂直に当たると風上で樹高の10倍、風下で25倍近くの距離に何らかの影響を与え、この林を通った地域は温度の低下や乾燥を抑え穏やかな風となる。

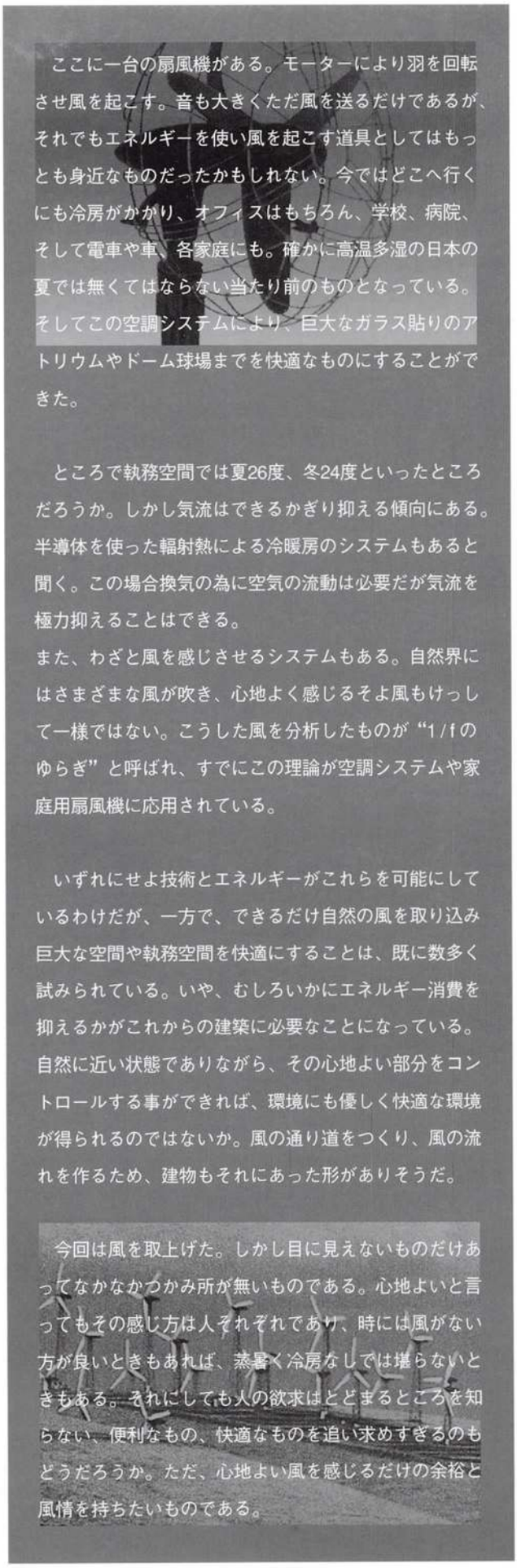
防風林と並び屋敷林というのがある。家屋を冬の季節風から守るためで西や北側に植えることが多い。もちろん地域によって風の吹く方向は異なるが、冬だけではなく夏にでもなれば葉が繁茂し強い日差しを遮ることもできる。



風を入れる

「家の作りやうは、夏をむねとすべし」という言葉がある。昔ながらの日本の家屋では夏になると、障子を葭戸(よしど)に、襖を簾に替え、そして畳の上には茣蓙(ござ)を敷くなどをし、暑さに対して工夫をしてきた。いわば建物の衣替えといったところだろうか。また、直射日光をさけるため庇は長くのび、床は高くし床下の風通しも良くしてある。庭や道にまかれた打水がさらに涼しい風を運んでくる。

しかし耐寒性という点では昔ながらの日本家屋は劣っている。エアコンの普及に伴い、夏の冷房や冬の暖房にも機密性が求められた。手間のかかる日本家屋が減り町並が変わってゆくのも仕方のないことなのだろうか。



ここに一台の扇風機がある。モーターにより羽を回転させ風を起こす。音も大きくただ風を送るだけであるが、それでもエネルギーを使い風を起こす道具としてはもっとも身近なものだったかもしれない。今ではどこへ行くにも冷房がかかり、オフィスはもちろん、学校、病院、そして電車や車、各家庭にも。確かに高温多湿の日本の夏では無くてはならない当たり前のものとなっている。そしてこの空調システムにより、巨大なガラス貼りのアトリウムやドーム球場までを快適なものにすることができた。

ところで執務空間では夏26度、冬24度といったところだろうか。しかし気流はできるかぎり抑える傾向にある。半導体を使った輻射熱による冷暖房のシステムもあると聞く。この場合換気の為に空気の流動は必要だが気流を極力抑えることはできる。
また、わざと風を感じさせるシステムもある。自然界にはさまざまな風が吹き、心地よく感じるそよ風もけっして一様ではない。こうした風を分析したものが“1/fのゆらぎ”と呼ばれ、すでにこの理論が空調システムや家庭用扇風機に応用されている。

いずれにせよ技術とエネルギーがこれらを可能にしているわけだが、一方で、できるだけ自然の風を取り込み巨大な空間や執務空間を快適にすることは、既に数多く試みられている。いや、むしろいかにエネルギー消費を抑えるかがこれからの建築に必要なことになっている。自然に近い状態でありながら、その心地よい部分をコントロールする事ができれば、環境にも優しく快適な環境が得られるのではないか。風の通り道をつくり、風の流れを作るため、建物もそれにあった形がありそうだ。

今回は風を取上げた。しかし目に見えないものだけあってなかなかつかみ所が無いものである。心地よいと言ってもその感じ方は人それぞれであり、時には風がない方が良いときもあれば、蒸暑く冷房なしでは堪らないときもある。それにしても人の欲求はとどまるところを知らない。便利なもの、快適なものを追い求めすぎるのもどうだろうか。ただ、心地よい風を感じるだけの余裕と風情を持ちたいものである。

阪神・淡路大震災と神戸の地盤−「神戸JIBANKUN」の構築−

岩橋哲哉
神戸市震災復興本部総括局総合計画課地域政策係長

神戸市においては、阪神・淡路大震災の原因究明を行うため、平成7年度より神戸市固有の地盤特性を整理するとともに、地盤と被害の関係などについて調査、検討を進めてきた。その際、各種データを収集・整理するだけでなく、最新の地理情報システム（GIS）技術を取り入れ、データの利用や更新が容易にでき、かつ被害と地盤の関係分析や地盤特性の解析なども可能な新しいシステム「神戸JIBANKUN」を構築した（**図1**、**2**）。

収集データの内容

対象とした地域は、震災によって大きな被害を受けた神戸市の東灘区～須磨区の市街地である。GISの基本となる地図には、道路や家形などの種類ごとに独立したレイヤー（階層）としてディジタル化された縮尺1/2,500の現地形図を用いている。

(1) 地盤データ

地盤データはこれまでに神戸市が実施してきた地盤調査のデータを用いており、データ数としては約4,000本である。ボーリング柱状図だけでなく、原位置試験結果や土質試験結果も収録している。また、神戸の地盤は急傾斜の扇状地であり、複雑な地層構成になっているため、火山灰等を指標として各ボーリングデータごとに沖積層下面を特定し、入力する作業も行った。さらに、収集したボーリングデータに対して地層の層序区分を行い、地層ごとの土性検討も可能なものとしている。

(2) 地形、地質データ

前述した1/2,500現地形図以外に、①明治前期に作成された古地図と現在の地形図を対比することによって新たに作成した「旧海岸線、旧河道、旧ため池、谷埋め盛土域図」、②地表を構成する地形図に着目して神戸市街地を台地、段丘、低地、河川、人工地形などに区分した「微地形区分図」、③神戸市街地を20mメッシュに区切り、それぞれのブロックの平均的な地表傾斜角度を表した「地表面傾斜区分図」、④今回のボーリングデータによって得られた地盤情報をもとに作成した「地質平面図」などを収録している。

(3) 構造物被害、変位データ

阪神・淡路大震災で面的に広く分布する各種被害や地盤変位などを入力している。具体的には、建物被災データ、上下水道被害データ、宅地の擁壁被害データ、地盤変位データなどであり、これらはそれぞれレイヤーが分かれているため、各種被害と地盤データの自由な重ね合わせが可能である。



図1　起ち上げ画面

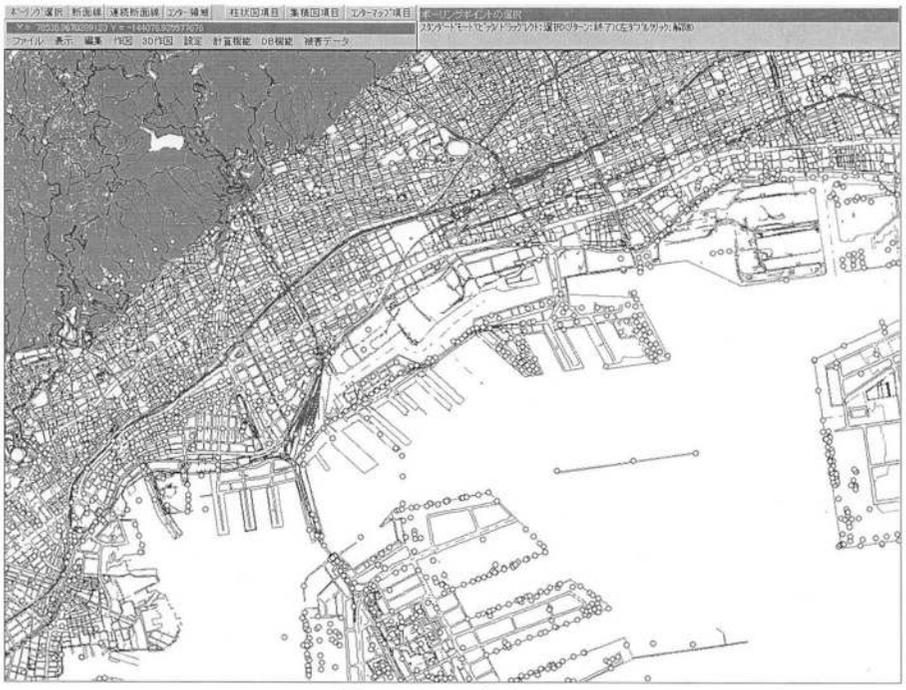


図2　ボーリング調査位置

システムの機能

本システムは、パソコンで扱える汎用的な地理情報システム（GIS）に、地盤情報解析システム、各種震災被害解析システム、液状化解析システムなどの各専門アプリケーションを結合した。

図3は地質断面図の一例を示したものであるが、このように任意のボーリング地点を結ぶ線上もしくは任意測線上の地質断面を容易に作成することができる。そのほかに、地下水位コンター図、液状化評価のための*PL*値コンター図、各種試験結果の相関図、さらには各地層ごとの粒径加積曲線の集積図（**図4**）、圧密曲線等の集積図も作成可能である。

このシステムにより被害と地盤の関係の検討という膨大な作業を効率的にでき、各種業務に必要な地盤情報等をGISの利用によるビジュアルな資料として作成することが可能となった。

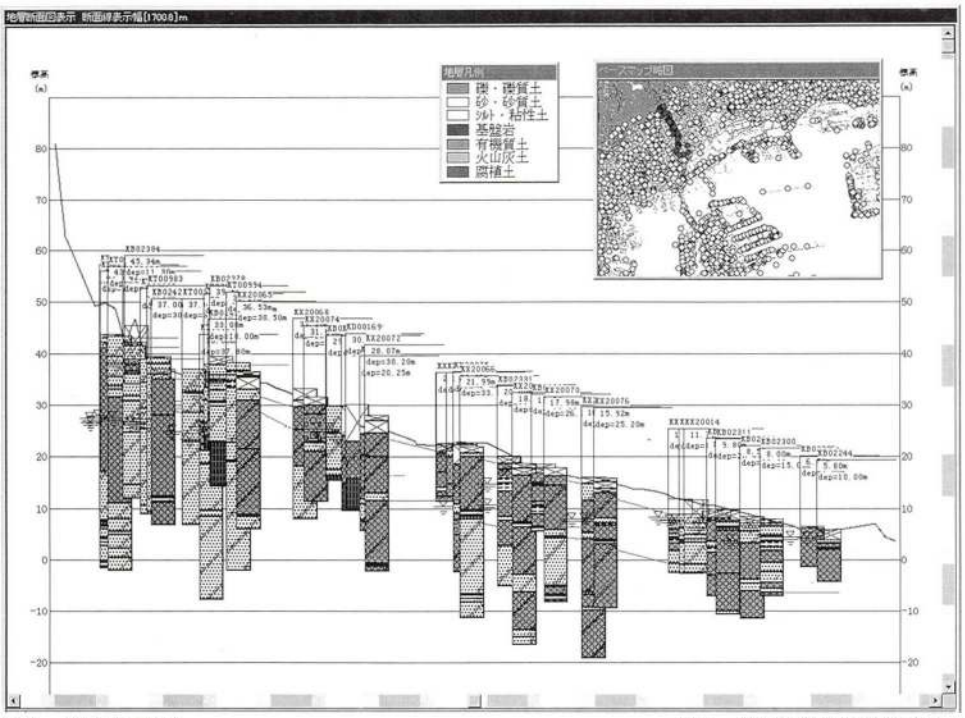


図3　地質断面図△

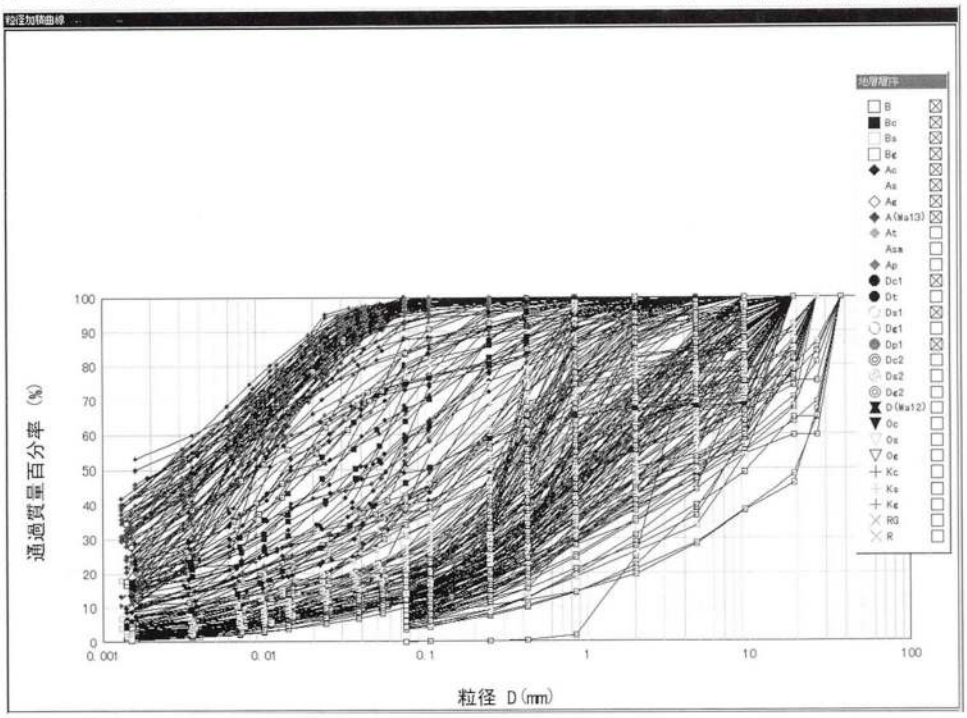


図4　粒径加積曲線の集積図▽

これまでの調査結果

被害と地盤の関係をみるために、このシステム上で微地形区分図と建物被害を重ね合わせてみると、軟質な扇状地等に被害が集中する傾向がみられることや、一般的な土の固さを表す指標である N 値と建物被害を重ね合わせると、ある地域で強い相関関係がみられるなど、一定の成果が得られた。

システムの活用

神戸市ではこのシステムを行政だけが利用するのではなく、民間事業者、大学、研究機関等にも広く公開し、共有の資産として活用を図るとともに、保全、普及ならびに育成していくため、産官学の会員で構成する「神戸の地盤研究会」を設立している。

この「神戸の地盤研究会」においては、「神戸 JIBANKUN」から得られる地盤情報をフルに活用して産官学が共同で地盤の調査、研究を進めており、新しい知見や考え方が展開されていくものと期待している。

一方、おのおのの会員においては、各種事業を計画、調査、設計、施工する際にこのシステムを活用すれば、近傍の地盤情報を事前に入手することができる。これにより、各段階においてコスト削減が図れるとともに、より信頼度の高い施設を築造することができる。

さらに、このシステムは会員が独自に作成した他のデータベースソフトのデータも組み込みが可能であり、使い方次第では利用の範囲がかなり広いものとなっている。

今後の展開

「神戸 JIBANKUN」に入力されているデータは、現在得られている情報を収集したものであり、複雑な地盤状況に対して今後さらに信頼度の高いデータベースを構築していくためには、地道にデータを蓄積していくことが重要である。

また、地盤情報については、業務や調査、研究に利用するばかりでなく、「神戸 JIBANKUN」を通じて一般市民に情報公開を始めている。市民にとっても自分の住んでいるところの地盤状況や過去の災害の歴史を知ることにより、今後の災害を防ぐための参考データとして大いに活用できることになるものと思われる。また、地盤情報はかなり専門的な知識が必要であるため、市民に対してアナウンスする際にはわかりやすい情報に加工するよう努めていきたい。

（いわはし　てつや）

鉄骨のモルタルによる重防錆

塚崎　征
マグネ化学㈱専務取締役

鉄骨や鉄筋がコンクリートに被覆され、そのアルカリ性成分の働きで長期間防錆されることは周知のことであるが、近年、細骨材に含まれる塩分や施工に起因するひび割れにより、必ずしも鉄骨や鉄筋が完璧な状態で保護されているとは言えない事例も見受けられる。

ポリアクリル酸エステル系ポリマーセメントモルタルマグネタイトは鉄の表面に黒錆(Fe_3O_4＝マグネタイト)を発生させ、その強制酸化被膜が長期間安定した防錆性能を持続させる機能をもっている。ここに紹介するポリアクリル酸エステル系ポリマーセメントモルタルマグネタイト（商品名＝マグネライン）はポリアクリル酸エステル系共重合体を主成分とする水溶性エマルジョン（液体）と、白色セメント及び珪砂に特殊添加剤からなるコンパウンド（粉体）を現場調合して使用する材料で、エマルジョンとコンパウンドの配合比率を変化させることにより、吹き付け、ハケ塗り、コテ塗り、ドブ漬け、遠心力ライニング等の作業方法での施工が可能で、薄塗りから厚塗りまで幅広く対応できる。エマルジョンとコンパウンドの混練時は、比較的流動性が良く、粘着性が高い。硬化後は柔軟性と接着性が良く、鉄やコンクリートの動きに追随し、ひび割れを起こさない。

硬化後のマグネラインの物理的性質を**表1**に示す。

表1　マグネラインの性能試験結果

試験項目	結果
促進耐候性試験	WS3,000時間異状なし
塩水噴霧試験	4,000時間異状なし
耐オゾン試験	一般外部30年相当
耐アルカリ性試験 JIS A 6909	96時間異状なし
耐熱・耐冷試験	マイナス197℃～300℃
凍結融解試験 ASTM C 666	300サイクル重量変化なし
耐屈曲性試験	トタン板塗布⇨180度折り曲げ異状なし
鉄との付着性	2.0N/㎟以上
衝撃試験　JIS G 3492	550ｇ鋼球⇨2.4ｍ落下⇨異状なし
中性化阻止性	中性化促進後1.0㎜以下
遮塩性	0.27×10^{-3}mg/㎠・日
ひび割れ追随性	WS700時間後1.53㎜
コンクリートとの付着性	1.7N/㎟以上（コンクリート破断）
中性化抑制試験	無塗布コンクリートに比べて中性化深度1/5
鉄に塗布したマグネラインの耐疲労性	20tトラック後輪荷重200万回繰り返し載荷⇨異状なし

鉄板の表面に赤錆(Fe_2O_3)を発生させ、その上にマグネラインを1㎜塗布して6カ月間室内に放置した後、マグネラインを剝ぎ取って、鉄板の表面の黒変した物質をX線回折装置で分析した。その結果を**図1**に示す。

図1の中央が試料を読み取ったピークで、左側がASTMに収蔵されているマグネタイトのピークである。試料を読み取ったピークとASTMのマグネタイトのピークが合致している部分にFe_3O_4と記したのが、図1の右側の図である。

この結果から、試料（黒変した物質）が、赤鉄から黒鉄に変化したマグネタイトであることが読み取れる。

防蝕・防錆材の用途としては、横断歩道橋、船舶の甲板や蒸気配管回り、鋼橋、貯油タンク、鉄板屋根、貯水高架タンク、煙突、水管橋、コンクリート打継待機の露出鉄筋、軽量鋼矢板、アースアンカー、鋼製高欄、浮桟橋、送電鉄塔、鋼製セグメント、大観覧車鉄骨、広告塔等の実績があげられる。

図1

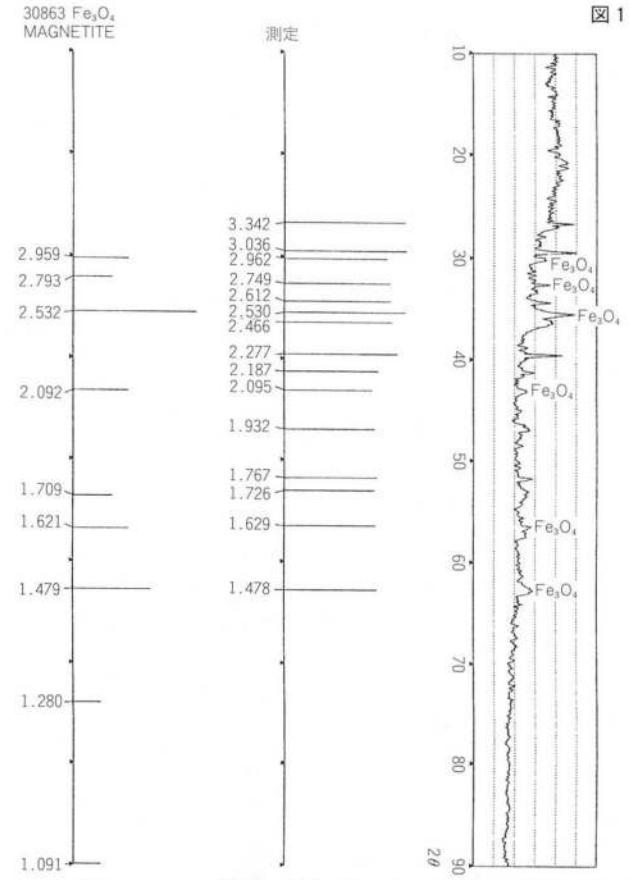




写真1



写真2

施工事例として、平成3年度及び平成4年度福岡市港湾局発注の「ふれあい橋」の写真を示す。**写真1**は工場で塗装された部材を現場で組み立て、接合部は現場塗装されたもの。**写真2**は完成写真である。当該橋はマグネラインの耐久性が評価され、メンテナンスフリーで採用されたものである。

昭和58年に鉄部の防錆材として使用されて以来16年経過した現在まで、数多くの分野で利用されているマグネラインは、重防蝕防錆材、コンクリート劣化防止材、橋梁の床版、桁、橋脚等の構造部の補修・補強材、コンクリート打継部の接着増強材、岩注入材、さらに日本水道協会の飲料水溶解試験にも合格していることから、水道局の配水池の防水補修材としても長年利用されている。

また、MRSA、緑膿菌、糸状菌等に対しての抗菌力があることも判明し、注目されている。

従来の塗料の塗膜は点接着の連続で接着しているが、マグネラインは点接着に加えてイオン結合の力も加わって強力に接着し、耐久性が持続する。このイオン効果が他材にない総合力を発揮して様々な働きを促し、多岐にわたる利用を可能にしており、今後もさらに幅広い分野での活用が期待される。　（つかざき　すすむ）

ドライ厨房の効能と採用事例

武政英次
大阪ガス㈱営業計画部

いま、平成８年に大阪府堺市で発生したO-157事件をきっかけとしたHACCP等厨房における衛生意識の高まりを受け、その解決法として、ドライ厨房が脚光を浴びている。とくに、学校給食場においては、昭和54年から文部省の補助対象事業となって以来、徐々にではあるが、確実に浸透している。

ドライ厨房と従来厨房との比較

あらゆるフードサービスの施設の厨房作業環境は、作業労働の健康にかかわる換気空調条件の快適性と、食品衛生上重要な清潔性の維持が、基本要件であると言える。その中で、ドライ厨房が衛生上有効なものであることは言うまでもない。

従来の厨房は、床はモルタル、クリンカータイル、磁気タイル等で仕上げ、側溝をめぐらし、加えて床勾配を取った上、必ず１回／日以上水洗いをする。この水洗いが習慣化することにより、ゴム製の長靴・前掛け姿や床が湿っていることが習慣化し、高温多湿な作業環境が常態となっている。これが人体に影響を与える雑菌の繁殖を助長し、調理人や食物に衛生面で影響を与えるだけでなく、厨房がいわゆる３K職場として位置づけられる大きな要因となっている。

ドライ厨房とは、前述した厨房に対する考え方を一変させるものであり、「床を汚さない。汚れたらすぐに拭き取る」の原則にもとづき、厨房設備を整備し、常に床面を乾いた状態に保つ。そのため、雑菌などが繁殖する可能性も極めて低くなるだけでなく、調理人の服装も軽装になり、疲れにくくなるなど、衛生面、環境面から多くの利点が生まれる。

ドライ厨房の効能

ドライシステムの実践により、以下のような効能が期待できる。

- 食品の腐敗、細菌・カビの繁殖を抑制し、ゴキブリなど衛生害虫の発生が減少する。また、悪臭や着衣の汚れも減少する。
- ゴム長靴・前掛けが不要になり、機敏な操作ができ、床面が滑らないので安心して作業に従事できる。
- 床面が滑らないことや、着衣を軽装化することにより、調理人の疲労が少なく、骨折などの怪我が減少する。また、足元の冷えが解消されるため、腰痛、神経痛等の疾病予防につながる。
- 水道代の節約、腐食防止効果による機器の長寿命化が期待できる。

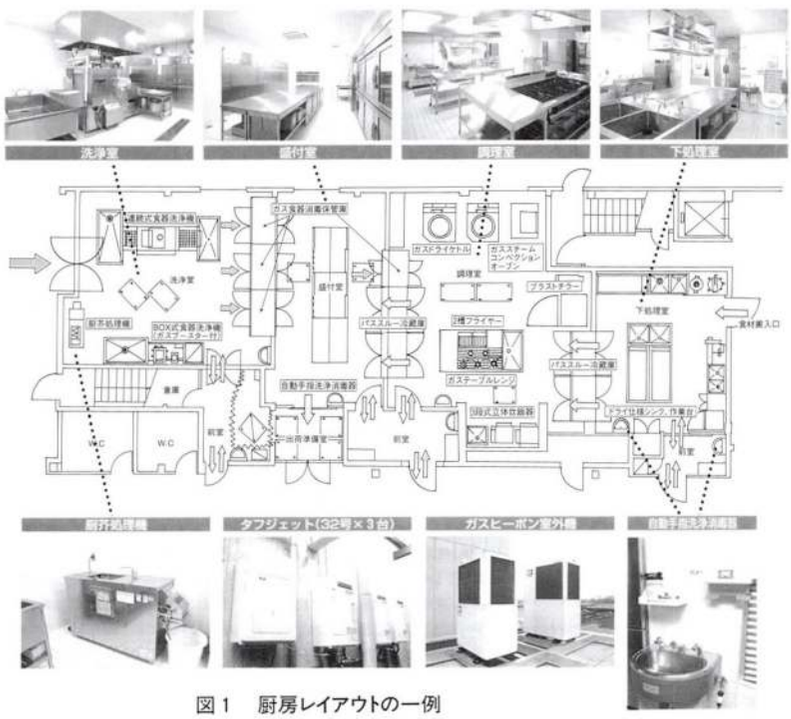


図１　厨房レイアウトの一例

ドライ厨房の採用事例

O-157事件をきっかけに、食品の衛生基準の重要性が改めて認識された。この動きを受け、堺市内で初めて、衛生管理の新しい手法であるHACCP（ハセップ）に準じた、ドライ厨房を中心とした設備を導入した立花ケイタリング・サービス㈱の厨房設備を紹介する。なお、導入にあたっては、当社の提案が採用された。

（１）設備概要（**図１**）

- 所在地：堺市浜寺船尾町
- 厨房面積：300m²
- 提供能力：1,500食／日

（２）設備の特徴

- 衛生的なドライ厨房実現のため、シンク・水切り台に工夫を加えた（**写真１、図２、３**）。
- 可能な限り側溝をなくし、グリストラップも屋外に設置し、悪臭を排除した（**写真２**）。
- 床、壁は抗菌タイルで加工し、天井面は抗菌塗料で仕上げた（**写真３**）。
- 厨房の環境改善を行うため、空調設備としてガスヒートポンプエアコンを採用。調理食材への影響がないように、吹出口をフードと並行して設置した。
- そのほかにも、ブラストチラー、厨芥処理機等厨房内の衛生環境を改善するさまざまなシステムを導入している。



写真１　ドライフロアーの実現

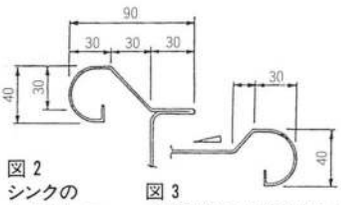


図２　シンクの水返し加工　　図３　水切り台の水返し加工



写真２　可能な限りのNon側溝



写真３　フードと並行して吹出口を設置

*

ドライシステムを実践するためには、施設の整備だけではなく、調理人の心構えや協力が必要である。ドライシステムの効能や方法を十分に理解し、「汚さない」「汚れたら拭く」を習慣づけていくことが大切であることは言うまでもない。

（たけまさ　えいじ）

泡消火設備－1－

由上雅章
ヤマトプロテック㈱

泡消火設備の設置（一般建築物）

■泡消火設備はどういう建物に必要か

消防法施行令第13条に規定されています。

泡消火設備は、消火対象物に適応した形式があり、原則的に設備を構成する要素によって関連付けて設置されています(**表1**)。駐車場に設ける泡消火設備のうちでは、たんぱく泡、水成膜泡、合成界面活性剤泡等の設備がありますが、現状では、ほとんどの駐車場には低発泡の水成膜泡消火設備が設置されているため、この低発泡の水成膜泡消火設備について説明しましょう。

表1　設置基準

修理工場、整備工場	地階、2階以上の階	床面積200㎡以上
	1階	〃　500㎡以上
道路と一体の建物の道路部分	屋上	〃　600㎡以上
	その他	〃　400㎡以上
建物の中の駐車場の用途部分	地階、2階以上の階	〃　200㎡以上
	1階	〃　500㎡以上
	屋上	〃　300㎡以上
	機械駐車場	収容台数10台以上

注：機械駐車場が、屋外に設置されている場合も、消火設備（移動式を含む）が必要となる。また、火災予防条例により床面積の設置面積を厳しくしているケースや、吹抜けを共有する建物の2以上の階を合計して算定面積としている場合もある。

泡消火設備のシステム構成

泡消火設備の構成と系統を、以下に示します。

■泡消火設備の構成

水源、配管、加圧送水装置、ポンプ制御盤、泡原液槽（泡薬剤貯蔵タンク）、流水検知装置(アラーム弁)、一斉開放弁、感知用スプリンクラーヘッド、泡ヘッド、一斉開放弁起動装置、モーターサイレン等により、泡消火設備は構成されます。(**図1**)

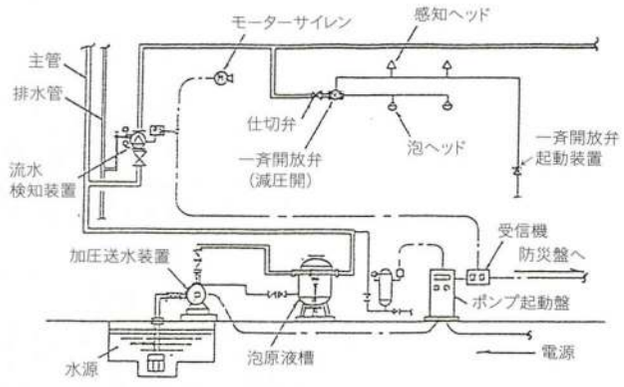


図1　系統図（一斉開放弁が減圧開型の場合）

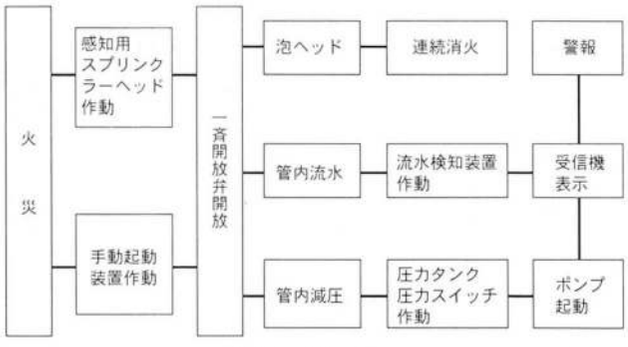


図2　動作フロー

■動作フロー（感知部に閉鎖型スプリンクラーヘッドを使用した場合）

一斉開放弁に減圧開型を使い、感知用スプリンクラーヘッドもしくは手動起動装置の開放による感知配管内の圧力の減少によって、一斉開放弁を開放します。(**図2**)

■構成機器の役割

●泡ヘッド

希釈容量濃度になった水と泡消火薬剤の混合液に空気を取り入れて発泡させ、防護対象物のすべての表面を泡が包含するよう設けます。

●泡原液槽（泡薬剤貯蔵タンク）

使用する泡消火薬剤を貯蔵する容器(タンク)。容器本体、内部に設けるダイヤフラムまたは、ラバーパックと混合器（プロポーショナー）で、容器を構成します。

●感知用スプリンクラーヘッド

泡消火設備に使用する場合は、火災時の熱を感知作動し、感知配管に常時充填されている圧力を降下させることに使用します。

●一斉開放弁

感知配管に設けた感知用スプリンクラーヘッドの作動または、手動起動弁の開放によって開放され、泡ヘッドから泡が放出されます。

●流水検知装置（アラーム弁）

流水を検知し、信号を送る装置。逆止弁構造で、流水により逆止弁が開放されたときに、警報を発信します。

泡消火設備の凍結とその対策

泡消火設備には一斉開放弁が減圧開型の場合と、一斉開放弁が加圧開型の場合があるが、泡消火設備においては、一斉開放弁が減圧開型の場合が最も設備コストが安くつくため、一般的に多く採用されています。しかし湿式配管のため、凍結対策に苦慮している現状です。

■凍結対策

●配管に不凍液を充填する⟶夏季等の温度上昇で配管内圧力が上昇し、配管や機器に損傷を加える場合がある。(空気圧力タンクを設け、異常圧力上昇を避ける)

●保温を施す⟶マイナス温度が継続した場合は、凍結する。

●電熱線入保温を施す⟶ほぼ完全に近いが、コストが高くつくことと、経年変化により保温がばらけてきたときは危険。

●乾式配管にする⟶コストは高くつくが、凍結はない。まだまだ技術検討や改良が必要であるが、現状では最も望ましいと思われる。

＊

次号では、続いて泡消火ポンプの設定条件などに触れたいと思います。

(ゆかみ　まさあき)

REPORT 日本建築協会事業委員会

アサヒビール吹田工場を訪ねる

宮内　宏
事業委員／宮内商会

炎天下の7月21日水曜日に27名の参加を得て、アサヒビール吹田工場を訪ねました。

大阪麦酒会社吹田村醸造所

1889（明治22）年、大阪に有限責任大阪麦酒会社が設立され、千里丘陵の南端、なだらかな斜面を下り切ったあたり、視界を遮るものとてない田園の一角に、地上4層の威容、煉瓦造りの洋館が出現しました。大阪麦酒会社吹田村醸造所で、1891（明治24）年初秋のことでした（当時の吹田村の人口は3,510人）。

当時の工場敷地は約14,000㎡（4,200坪）。建設工事が始まった明治23（1890）年8月、停車場付近は異常な活気に包まれ、煉瓦や木材を満載した馬車、牛車が工場敷地めざして砂塵を上げ、時ならぬ槌音が背後の松林にこだましたとのこと。

鳥井駒吉社長、生田秀支配人が詰め切りで総指揮を取り、施工には木村音右衛門、佐々木豊吉が携わりました。内・外装ともに総赤煉瓦造りのフランス式組積み構造の西洋建築は、慣れない大工、石工らにとっては多大の苦心を要したと想像できます。

明治24（1891）年3月16日、上棟式が挙行され、地上4層に地下室を備える堅牢な工場建屋7ブロックの全容が姿を現しました。その壮麗堅固な煉瓦造りの工場は、明治9年に敷設された鉄道の車窓からは京都・大阪間屈指の景色として、行き交う旅客の話題を誘った、とアサヒビールの100年史。

創建時の赤レンガは今も生きて…

大日本麦酒が過度経済力集中排除法で分割された経緯もあって、吹田工場はアサヒビール株式会社となりましたが、関西におけるビールの醸造について最古の歴史を有する工場として、創建当初の赤レンガの建物は、今もゲストハウス入口にモニュメントとして残され、改築された現在の最新鋭工場の建物にも使用され、アサヒビールの中心施設として稼働しています。

見学者を迎えるゲストハウスは、前を通る国道から視界を遮蔽するように道路側が芝生で高く盛り上がり、騒音は完全に遮られ、野鳥も飛来する佇まいになっていました。

出荷を待つビール

映写室の大画面でアサヒビールの歴史とビールの案内を受けたあと、エスカレーターに乗って工場施設を見下ろす状態で見学を行いました。

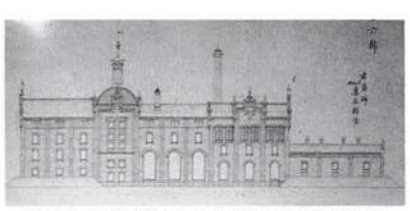
工場では250人の従業員が24時間態勢で働きます。工場は缶ビールは1分間に1,200本、大瓶は1分間に600本でフル操業の最中でした。仕込みから出荷までは2カ月が必要ですが、屋外の500kℓ貯蔵タンク152本（1タンクで大瓶80万本・4万ケース分）が製品化を待っていました。同工場の現況は、敷地面積約142,000㎡（約43,000坪）、年間生産量大瓶換算約5億3000万本とのことでした。

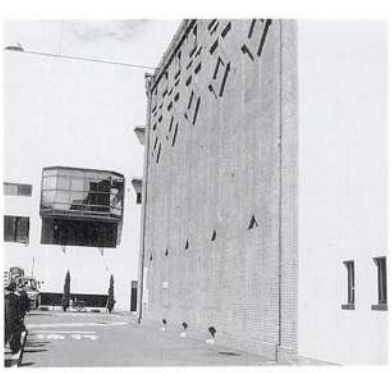
見学終了後、ゲストハウスで良く冷えたビールの試飲に舌鼓を打ち、ゲストハウスの庭園との境界にある『大ホールの回転式窓』（同社での呼称）の開閉も特別に行われました。さらに、道路側を高くしてあり、側溝を掘ってないために、集中豪雨等の場合には建物の軒下まで雨水が流れて来るのが難点であるとの声も披露されました。

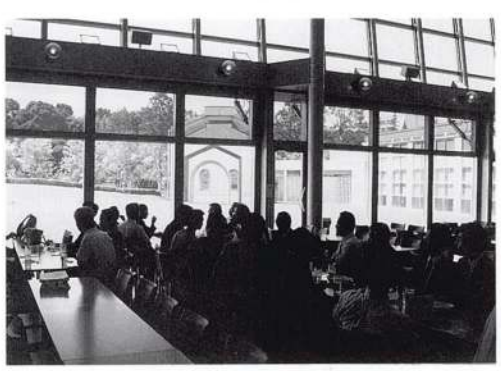
最後に自動倉庫の見学をしましたが、自動ピッキングは3系統あり、同時に3台のトラックに積み込むことも可能で、最盛期には1分間に1台が出発するのが可能とのことでした。

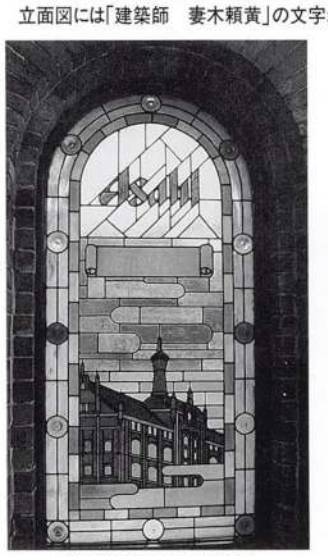
（みやうち　ひろし）

日　時　1999年7月21日㈬　13:30～15:00
場　所　アサヒビール吹田工場
参加者　27人

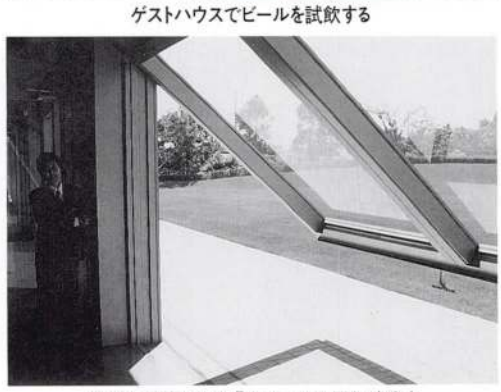

立面図には「建築師　妻木頼黄」の文字が見える


今も稼動する赤レンガの建物を通る


ゲストハウスでビールを試飲する


煉瓦壁面のステンドグラス


モニュメントとして残された創建時の煉瓦壁面


特別に開閉された『大ホールの回転式窓』

ル・コルビュジエ UNITÉ

大成建設所蔵のル・コルビュジエの作品の中から、今回はアクアチントによる作品集「ユニテ」と、併せて彼が手がけた一連の集合住宅に関する写真や資料が、ギャルリー・タイセイで展示される。入場無料。

ル・コルビュジエにとって、ユニテという言葉のイメージは後期制作活動において重要であり、個々のユニットが集まって全体が統合されるという彼の思想を、絵画、建築を通して理解する機会となろう。

会期　1999年 9 月 6 日(月)〜11月12日(金)
10：00〜17：00　土日祝日は休み

会場　大成建設ギャルリー・タイセイ
東京都新宿区西新宿1-25-1新宿センタービル
TEL03-5381-5510、FAX03-5381-5511

出品　●版画集「ユニテ」1965年　57×45cm　20点
●ルシアン・エルヴェ、ユニテ・ダビタシオン（マルセイユ、ナント・ルゼ）ほかモノクロ写真20点、ユニテ・ダビタシオンの複写図面

畠山直哉「UNDERGROUND」

1958年岩手県に生まれ、筑波大学芸術研究科修士課程を終え、石灰岩搾掘工場を撮った「ライムワークス」シリーズで1997年に第22回木村伊兵衛賞を受賞した写真家・畠山直哉氏の展覧会が、「UNDERGROUND」と題して２会期に分けて開催される。

〈Part Ⅰ〉　1999年 9 月 4 日(土)〜25日(土)
東京・渋谷川の地下水路の、酸化鉄やゴミ、油膜、生物などが織りなす世界は、あたかも生命の誕生や宇宙の生成を思わせる抽象模様を描き出している。

〈Part Ⅱ〉　1999年 9 月28日(木)〜10月16日(土)
三脚に立てた明かりに浮かび上がる地下水路の闇は、誰もいない劇場の風景に似ている。

会場　Masataka Hayakawa Gallery
東京都渋谷区恵比寿西1-16-1-301
TEL03-5457-7991

時間　11：00〜19：00　日曜、月曜、祝祭日休廊



道具の心理学—INAX ギャラリー大阪—

いつも身の回りにあって、それを使うのが習慣となった道具は、いつの間にか心の中に大きな位置を占めている。

赤瀬川原平、池内紀、奥本大三郎氏らの協力で、９月からの INAX ギャラリー大阪では、人と道具のかかわりを探り、道具をめぐる心理を考える展覧会が開かれる。入場無料。

各界で活躍する約20名の方々の愛用の道具が、道具との馴れ初め、使い続けることになったいきさつ、そして付き合い方などの「モノ語り」とともに登場する。たとえば、一緒に赤道を一周した作家・布施英利さんの靴。炊き上がるころになるとタップダンスをするイラストレーター・林丈二さんの電気釜……。

■展覧会

期間　1999年 9 月 6 日(月)〜11月26日(金)
10：00〜18：00　毎週水曜日休館

会場　INAX 大阪ショールーム・２階
大阪市西区新町1-7-1



布施英利さんと「赤道を一周した靴」

■講演会「ものがつくる私たちの心」

講師　野田正彰氏（京都造形芸術大学教授）

日時　1999年10月18日(月)　18：30〜20：00

会場　INAX 大阪ショールーム・８階会議室

講演会の参加費は無料。ただし、参加希望者は電話かFAXで氏名、連絡先をギャラリー（FAX06-6539-3521、TEL06-6539-3518）へ予約。先着100名。

JAPAN HOME SHOW99

㈳日本能率協会と㈳日本住宅設備システム協会は、住宅関連の専門展示会「JAPAN HOME SHOW99」を東京ビッグサイトで、この９月28日〜10月１日に開く。展示会は、建材・部材を拡充した「99住宅建材・部材展」、住宅設備・システム分野を網羅した「99住宅設備・システム展」、そして今後のリフォーム・DIY需要に対応した「99セルフビルド＆メンテナンス展」から構成され、併設行事として９月29、30日にはシンポジウム（講師—建設省、通産省など）も予定。

問い合わせは、ジャパン・ホーム・ショー事務局（日本能率協会産業振興本部内、TEL03-3434-1243）へ。

国際デザイン・アオードの受賞者

デザインを通じて社会と文化の向上発展に貢献した人、団体を隔年に表彰する国際デザイン・アオードの受賞者を、㈶国際デザイン交流協会（会長／田代和・大阪商工会議所会頭）は決定した。９回目の受賞者は、世界19カ国から推薦を受けた25候補者の中から、審査（泉眞也／榮久庵祥二／川添登／木村重信／豊口協）を経て、パスカル・マラガイ氏（スペイン）と㈱良品計画（日本）の２件とした。受賞理由は以下のとおり。

●パスカル・マラガイ氏（前バルセロナ市長、58歳）
——創造的先導性を発揮し、バルセロナ市長として一連の都市計画やオリンピック開催を成功に導いた。この革新的な都市行政とデザイン活動の統合は、21世紀の手渡すべき業績として極めて高く評価できる。

●株式会社良品計画（西友のプライベート・ブランド「無印良品」で1980年にデビュー）
——優れたデザイン思想により、生活文化の向上発展に多大な影響を与えた。その革新性と先導性は、企業におけるデザイン活動の在り方として極めて高く評価できる。

10月は「住宅月間」

建設省の提唱する「住宅月間」は、10月１日(金)〜10月31日(日)。住宅・住環境・住まい方について考える機会を提供し、国民の住意識の向上、ゆとりある住生活の実現に資することを目的とし、国、地方公共団体、関係諸団体ではコンクール、住宅フェア、シンポジウムなどの行事・活動を積極的に行う予定。

「環境・エネルギー優良建築物マーク」

「環境・エネルギー優良建築物マーク表示制度」に基づき６月20日までに申請のあった物件を審査（委員長松尾陽氏）した結果、㈶住宅・建築省エネルギー機構は８物件に対して第２次交付証及びマークを交付した。

この制度は、地球温暖化対策の一環として、室内環境水準を確保の上、一定水準以上の省エネルギー性能を有する建築物に対してマークを交付し、環境低負荷型建築物の促進を図ることを目的とする。

マークは、ビルの出入り口等に貼付してイメージアップ等に活用される。

●第２次「環境・エネルギー優良建築物マーク」交付
- 丸ノ内ビルヂング
- 四条烏丸ＦＴスクエア
- ゼクセルビル赤坂
- 日本アムウエイ本社ビル
- 東京電力大宮総合社屋
- 東京電力大仁営業所
- ㈶モラロジー研究所谷川生涯学習センター偲徳寮
- ダント一宇都宮工場Ｄホール

マンション特別セミナー開催

日本マンション学会関西支部（事務局長・折田泰宏）では、定期借地権付マンションを取り上げ、その可能性をパネルディスカッションで探るセミナーを開催する。テーマは「マンションの新しい試み―スケルトン定借を考える―」。

日　時　1999年9月11日(土)　13：00～17：00
会　場　大阪市立大学文化交流センター（大阪駅前第3ビル16階、大阪市北区梅田1-1-3-1600）
討　議　小林秀樹氏（建設省建築研究所第1部）
　　高田　昇氏（立命館大学政策科学部教授）
　　九後順子氏（阪急電鉄都市計画室）
　　竹井隆人氏（住宅金融公庫大阪支店）
　　以上4パネラーとマンション学会会員約10名による自由討議。
定　員　100名（先着順、一般参加者も募集）
参加費　資料代1000円（当日会場で支払い）
申込先　TELまたはFAXで、日本マンション学会関西支部事務局へ。
　　TEL075-211-4643、FAX075-211-8552

JIA市民大学講座

木曜日に開催される㈳日本建築家協会（JIA）近畿支部の'99まちづくりセミナー「21世紀の建築・街づくり」。今年の予定は、下記のとおり。

9月30日　「まちづくりと色彩」
　　吉田慎吾氏（色彩計画家）
10月14日　「今、公共空間は作れるのか」
　　中川　理氏（京都工芸繊維大学助教授）
10月28日　「環境装置としての建築・住宅」
　　小玉祐一郎氏（神戸芸術工科大学教授）
11月18日　「ポストモダン・シティ」
　　八束はじめ氏（建築家）
11月25日　「新世紀の都市像・庭園曼荼羅都市像」
　　渡辺豊和氏（建築家）
12月9日　「タウン・アーキテクト論序説」
　　布野修司氏（京都大学助教授）

会　場　安田火災海上保険㈱　安田火災ビル12階
　　大阪市中央区瓦町4-1-2
時　間　18：00～20：00
受講費　一般2000円／回（通し6回10000円）
　　学生1000円／回（通し6回5000円）
　　JIA会員1500円／回（通し6回7500円）
定　員　100名（先着順・代理出席可）
申込方法　勤務先、住所、電話番号を記入してFAXまたはハガキで、㈳日本建築家協会近畿支部（〒541-0051 大阪市中央区備後町2-5-8、TEL06-6229-3371、FAX06-6229-3374）へ。

環境共生住宅技術者講習会

環境共生住宅推進協議会（会長：三澤千代治）では、今年は10月に横浜・名古屋・福岡で講習会を開き、環境と共存するまちづくりを基本に建設されたテーマパーク「ハウステンボス」の見学会も、ハウステンボス環境研究会と共同で企画している。

■環境共生住宅技術者講習会
●講師
池田武邦氏（長崎総合科学大学教授、池田研究室）
岩村和夫氏（武蔵工業大学教授、岩村アトリエ）
宿谷昌則氏（武蔵工業大学環境情報学部教授）
中林由行氏（綜建築研究所主宰）
福島朝彦氏（日本環境技研環境システム部主管）
山下広記氏（地球工作所取締役）
●プログラム
- 環境共生住宅概論
- 環境共生住宅の要素技術
- 環境共生認定制度の概要と事例
- 愛知万博における自然と共生〈名古屋会場〉
- ハウステンボスにおける環境共生の取り組み―廃棄物、音、光環境、水システム、大気、動植物、土壌―〈福岡会場〉
- 日本初ISO14000取得のECOキャンパスにおける環境共生の取り組み―〈横浜会場〉

●期日・会場・定員（各100名）
＊名古屋会場　1999年10月13日(水)11：00～17：00
愛知県中小企業センター（JR名古屋駅徒歩5分）
＊福岡会場　1999年10月14日(木)　11：00～17：00
西部ガスパピヨン24ガスホール（地下鉄千代徒歩1分）
＊横浜会場　1999年10月21日(木)　11：00～17：00
武蔵工業大学（地下鉄中川徒歩5分）
●受講料（テキスト『環境共生住宅A-Z』代別）
一般15000円（消費税含む）
■環境共生住宅見学会～ハウステンボス～
日時　1999年10月15日(金)　12：00～
場所　長崎県佐世保市ハウステンボス町
費用　5000円（入場料含む）
定員　100名
●講習会と見学会の申込・問い合わせ
㈶住宅・建築 省エネルギー機構 企画・環境部
〒102-0084東京都千代田区二番町4-5
TEL03-3222-6737　FAX03-3222-6696

●投稿

JR奈良駅舎、保存万歳！

柴田正己

駅前の再開発計画の中で取り壊しが心配されていたJR奈良駅舎（昭和9年）が、保存される方向に決まり、先日の新聞で紹介されていた。最近では各地で保存の声も空しく、破壊されたり、一部の外壁しか保存されないニュースを聞くだけに、保存運動の勝利として人々に夢と希望を与えてくれた快挙であった。長い間、地元で保存運動を続けられた多くの人々に感謝の言葉を送りたい。

それにしても、奈良のような古い都で、奈良の人々に愛され親しまれてきた歴史建築でさえも、このように保存の声を上げなければならないのである。今さらのように、日本の歴史や文化運動の貧しさを感じたのは小生一人だけではないはずである。欧米諸国のように新旧に関係なく歴史建築は、新しい町づくりの中に積極的に保全・再生されることが第一義だと考えるべきだと思う。

せっかく保存の方向へ動きはじめたこの建築を、安易な外壁保存で片付けるのではなく、この建築の歴史的な価値にふさわしい再生を強くのぞむものである。各地の近代建築の保存運動も、奈良駅舎にあやかりたいものである。

（明治建築研究会代表）

「建築史探偵団」参加者募集―大阪市立博物館・土曜講座―

博物館からまちなかに出て実地に建築史を学ぶ土曜講座「建築史探偵団」の第2弾が、昨年に引き続き大阪市立博物館で企画され、参加者を募集している。

今回は、博物館学芸員と博物館ボランティアの案内で、有名無名の建物を見て歩く。

第1回　10月30日(土)　10：00～11：30 博物館講堂
　　13：00～16：30 池田・室町周辺
第2回　11月13日(土)　13：00～16：30 大阪・船場周辺
第3回　11月27日(土)　13：00～16：30 神戸・旧居留地
第4回　12月11日(土)　13：00～16：30 京都・深草周辺
講座担当　大阪市立博物館学芸員/船越幹央、酒井一光
定　員　50名（応募者多数の場合は抽選）
集合場所　第1回10月30日／大阪市立博物館3階講堂
　　第2～4回／現地集合・解散
費　用　資料代600円（初回会場にて徴収）
応募方法　往復ハガキに1.住所、2.氏名（フリガナ）、3.年齢、4.電話番号、5.この企画を知り得た媒体を明記し、10月11日必着で下記へ。
〒540-0002 大阪市中央区大阪城1-1
大阪市立博物館・建築史探偵団募集係
TEL06-6941-7177、FAX06-6941-4064

昨年の「建築史探偵団」の一コマ



日本建築協会

月間の動き

【平成11年6月分】

評議員会

第1回定時評議員会
23日　5時～5時30分・於本会会議室
出席者　鶴田議長ほか46名（委任状共）
議　事　(1)平成10年度事業報告書について承認を求める件
(2)平成10年度決算報告書について承認を求める件
(3)理事の補欠選任に関する件

総会

第1回通常総会
23日　5時35分～6時5分・於本会会議室
出席者　市川会長ほか205名（ロ）（委任状共）
(1)平成10年度事業報告承認の件
(2)平成10年度決算報告承認の件
(3)報告事項「定款の一部改正の動きについて」

理事会

第1回常任理事会
23日　4時～5時・於本会会議室
出席者　市川会長ほか17名
議　事　(1)各支部の平成10年度決算報告等の承認の件
(2)理事の補欠選任に関する件
(3)入退会者承認の件
(4)後援・協賛名義の使用承認の件
(5)経過事業報告
第2回会勢理事会
23日　3時～4時・於本会会議室
出席者　岡本副会長ほか4名
議　事　(1)入退会状況について
(2)新年度の目標値について

編集委員会

第3回会員企画小委員会
1日　7時～8時30分・於本会会議室
出席者　塚口副委員長ほか1名
議　事　シリーズものの報告と掲載予定
第3回設備分科会
3日　6時30分～8時・於本会会議室
出席者　谷津幹事ほか6名
議　事　(1)8月号「私の目でみた環境問題」特集の企画
(2)基礎講座シリーズの今後
(3)「設備の頁」の報告
第3回構造分科会
4日　6時～8時30分・於本会会議室
出席者　大氏幹事ほか5名
議　事　10月号構造特集の企画
第3回素材と技術が生み出すデザイン幹事会
7日　6時30分～9時・於東畑建築事務所
出席者　大氏幹事ほか8名
議　事　7～9月号のテーマの内容検討
第3回計画分科会―インテリア・住宅系―
9日　7時～10時30分・於本会会議室
出席者　石川幹事ほか4名
議　事　9月号特集についての検討
第2回広告企画小委員会
14日　5時～6時・於本会会議室
出席者　宮田委員長ほか9名
議　事　(1)7月号「改正建築基準法」特集・「暑中見舞い挨拶」広告経過報告
(2)8月号「近畿郵政局」特集広告経過報告
(3)9月号「アーバン・インテリア」特集広告経過報告
(4)作品作風報告
(5)独自特集経過報告
(6)収支状況報告
第3回編集委員会
14日　6時～8時30分・於本会会議室
出席者　宮田委員長ほか6名
議　事　(1)7月号「改正建築基準法」特集経過報告
(2)8月号「私の目でみた環境問題」「近畿郵政局」特集経過報告
(3)9月号「アーバン・インテリア―都市空間としてのインテリア」特集経過報告
(4)10月号「木構造」特集報告
(5)シリーズ頁報告
(6)収支状況報告
第3回施工材料分科会
17日　4時～6時・於本会会議室
出席者　小椎八重幹事ほか3名
議　事　(1)平成12年度施工材料特集について
(2)「施工材料の頁」の企画
第3回作品作風小委員会
24日　7時～9時15分・於本会会議室
出席者　前川副委員長ほか5名
議　事　(1)作品の選定
(2)作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
(3)「gallery」掲載報告・予定
(4)「Sketch Book」欄の掲載予定
(5)11月号会員作品特集号について
(6)今後の作品作風小委員会の内容について
(7)前回編集委員会の報告
第2回計画分科会―建築系―
25日　7時～8時・於本会会議室
出席者　荻窪幹事ほか10名
議　事　平成12年1月号特集の検討

事業委員会

第3回若い会員の集い小委員会
8日　6時30分～7時30分・本会会議室
出席者　樋上幹事ほか9名
議　事　(1)今後の予定について
(2)「30's EYE 記録編集」について
(3)新年度の当小委員会の企画テーマ及び分科会の編成について
第9回30's EYE 記録編集分科会
8日　7時30分～10時15分・本会会議室
出席者　ゲスト／学芸出版社・藤谷氏
樋上幹事ほか9名
議　事　(1)学芸出版社藤谷氏に対して企画案を説明
(2)藤谷氏からの意見
(3)今後の方針
第10回30's EYE 記録編集分科会
18日　7時30分～10時・本会会議室
出席者　米井主査ほか6名
議　事　「30's EYE 記録編集」について
第1回近代建築見学分科会
24日　4時～6時50分・於本会会議室
出席者　福家幹事ほか4名
議　事　「近代建築見学会（第10回）川西市郷土館」について検討
第11回30's EYE 記録編集分科会
24日　7時30分～9時15分・於本会会議室
出席者　米井主査ほか9名
議　事　出版物の企画案について

出版委員会

第3回出版委員会
17日　5時30分～6時45分・於本会会議室
出席者　山田委員長ほか8名
議　事　(1)〈プロのノウハウ〉と特装本の経過報告
(2)今後のテーマと執筆者選定
(3)〈プロのノウハウ〉講座開催の件
第4回「(仮称) 汚れにくい建物を目指して」小委員会
22日　6時～8時15分・於本会会議室
出席者　上原副委員長ほか6名
議　事　(1)「汚れ」に関する事例の報告と検討
(2)今後の作業に関する意見

建築クラブ

第326回朝食会
8日　8時～10時
演題　「弥生時代のはじまり」
講師　進藤　治氏（東アジアの古代史研究）
参加者　42名

◀会員の訃報
正会員　小川秀一郎氏（㈱昭和設計）
平成11年6月26日逝去
米本豊一氏（㈱昭和設計）
平成11年7月26日逝去

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59 電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

商品は空気です。



熱と空気のエンジニア
株式会社
大気社

●営業種目
空気調和設備　給排水衛生設備　塗装設備　公害防止関連設備の設計・製作・施工

本社・東京本店　東京都新宿区西新宿2-6-1　☎03—3344—1851(大代)　大阪本社☎06—6448—3603(代)
大阪支社　☎06—6448—5851(代)　名古屋支店　☎052—211—1535(代)　中国支店　☎082—247—5541
九州支店　☎092—431—2147(代)　営業所：北関東・横浜・神戸・京都・岡山・四国

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

ガス設備の設計・施工のご相談は
大阪ガス指定工事会社・大阪ガス住設機器特約店

大晃設備株式会社

本　　社
大阪営業所　大阪市此花区西九条2丁目13番28号 電 06—6466—2268
枚方営業所　枚方市甲斐田東町9—3 電 0720—49—2128

空気調和設備　産業設備
給排水設備　水処理施設
電気設備　環境施設

三機工業株式会社

取締役社長　大島　剛
取締役関西支店長　本木　満

関西支店　大阪市中央区北浜 2－2－21　電話 06(6202)3071(代表)
本社・東京本店　東京都千代田区有楽町 1－4－1　電話 03(3502)6111(大代)
支　　店　北海道・東北・関東・千葉・横浜・北陸・名古屋・京都・神戸・四国・中国・九州

給・排水・衛生・消火・空調設備

株式会社 西原衛生工業所大阪店

大阪市北区中津6丁目8番4号　電話大阪(6458)3628番
支店・営業所　福岡・京都・天理・川西・神戸

空気調和設備
衛生設備設計施工

三建設備工業株式會社

大阪支店　大阪市北区紅梅町3番5号　電話(6352)1131(代)
本　　社　東京都中央区日本橋蠣殻町2—22　電話(3667)3431(大代)
支　　社　名古屋・仙台・札幌・広島・福岡・金沢・新潟・横浜

OKUJU
スペース クリエイター

建築に革命をもたらした技術がある
「大規模天井無足場工法」

内外装創作パネル・システム天井・間仕切
株式会社 オクジュー

本　社
大阪市北区西天満5丁目3番7号 〒530—0047
TEL(06)6312—4131　FAX(06)6312-7998
東京・九州・横浜・名古屋・宮崎・京都

空気調和・衛生設備・設計施工

株式会社 三晃空調

本　　社　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1671
東京本店　東京都新宿区西新宿　新宿住友ビル　電話03-3344-7911
大阪本店　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1371
支　　店　仙台・横浜・名古屋・京都・神戸・広島・福岡

Digital Pri-Press



AOBA PRINTING CO.,LTD.,

代表取締役社長 依藤孝行

青葉印刷株式会社

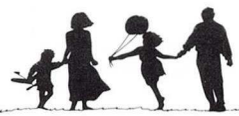
〒534-0027　大阪市都島区中野町2丁目10番11号
Phone.06-6351-5428 Fax.06-6351-5299

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む

株式会社精研

本　　社　大阪市中央区瓦屋町2丁目11番16号(オートセンタービル1・2階)
〒542-0066 電話 大阪（06）6768—5031代表
メンテナンス　電話　大阪（06）6768—1651代表
東京支社　東京都文京区小石川1丁目12番14号(日本生命小石川ビル7階)
〒112-0002　電話（03）5689—2351代表

夢×技=∞（無限大）
何時もあなたの街で
お会いしている
クリハラの技術



電気・計装・空調・土木
K 栗原工業株式会社
本社/〒530-0017大阪市北区角田町1-1(東阪急ビル)
TEL06(6313)1101
創業1919

CHOYO
人がいる多彩なフィールドで、
新しい限界に挑戦しています。
電気設備設計施工
朝陽電気株式会社
代表取締役　山本貴士
本　社　〒530-0005 大阪市北区中之島三丁目2-4(朝日ビル)
TEL 06(6385)1361(代)　FAX 06(6385)1050

電気設備設計施工
株式会社 三興社
代表取締役社長　上田正雄
本　社　大阪市中央区北浜3－6－13（日土地淀屋橋ビル）
電　話　06（6205）3671（代）
支　店　東京都中央区日本橋茅場町2丁目17番3号
電　話　03（3666）1478（代）
営業所　堺・泉州・泉南・滋賀

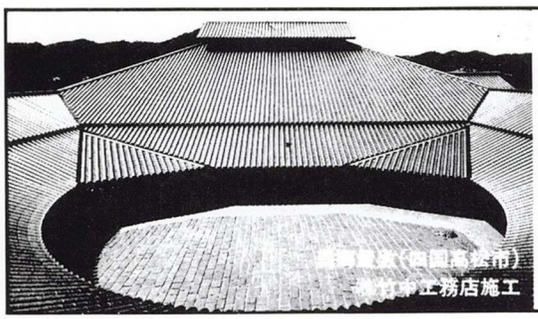
電気設備工事設計施工
東光電気工事株式会社
関西支社
取締役支社長　伊藤義信
大阪市中央区高麗橋4丁目3番7号　電話大阪(6202)0325～9番
本　社　東京都千代田区西神田1丁目4番5号
支　社　北海道・東北・丸ノ内・新宿・神奈川・東関東・北関東・中部・九州

人と都市の快適な環境をつくります
営業種目 設計・施工・監理
●電気設備
受変電・幹線
動力・制御装置
電話、放送、インターホン
防犯、防災
中央監視制御
システム計装
●空調・給排水・衛生設備
空気調和
工場配管
水処理
コージェネレーション
クリーンルーム
●プラント
プラント計装
システムエンジニアリング
●情報通信設備
情報通信ネットワーク
情報処理
通信システム
放送システム
●電力流通設備
受変電
架空送配電
地中送配電
あたたかみがあふれるクリエイティブカンパニーをめざす。
住友電設株式会社
大阪本社 〒550-0011 大阪市西区阿波座2-1-4 ☎(06)6537-3400
東京本社 〒105-0014 東京都港区芝2-2-17 ☎(03)3454-7311

学校建築のトータルアドバイザー
二葉工業株式会社
黒板・掲示板・家具
電動黒板装置・サイン・スクリーン
〒547-0001 大阪市平野区加美北3—4—5
TEL06(6792)5858　FAX06(6792)2810

＊奉仕感謝の店
タイル及び規格石一式施工
株式会社 川岸窯業商店
本　社　大阪市西区西本町1の13の33
TEL.06—6532—0641(代表)
FAX.06—6535—5181
天理営業所　天理市丹波市新町49

新鮮
情報処理／編集・企画／印刷・製本
ハード&ソフト…プリンティングの先端を拓きます。
ND
日本電植株式会社
〒530-0043　大阪市北区天満2丁目5番15号
TEL.06(6352)7502代　FAX.06(6355)2714



〒556-0024
大阪市浪速区塩草一丁目二番三号
ナニワ瓦株式会社
あらゆる屋根工事の相談は、
ファックス　六五六一～七四五四
☎　六五六一～七四一六
施工事例（四国高松市）
施工中工務店施工

Construction chemistry for the future.
コンクリート用混和剤／コンクリート用補修材
高性能無収縮材／コンクリート用高性能床材
株式会社 エヌエムビー
株式会社 ポゾリス物産
本　社：東京都港区六本木3－16－26
大阪支店：大阪市中央区北浜3-2-23(信愛ビル)
TEL06-6202-3294
Master Builders Technologies

TOF フッ素樹脂積層被覆鋼板 & COM 耐酸被覆鋼板



ＪＲ西日本尼崎駅

「耐酸被覆鋼板」のパイオニアとして約半世紀の経験を生かし、新たに「フッ素樹脂積層被覆鋼板」を製品群に加えました。
建築物の耐久性と、独創的な色彩と外観をクリエイトします。

■ フッ素樹脂積層被覆鋼板
　ＴＯＦ（タフフロール）
■ 耐酸被覆鋼板
　ＣＯＭ（ケミカラーオーシマメタル）
　Ｔ　Ｍ（トイメタル）
■ 責任施工
　ルーフ、サイディング
　大島式ベンチレーター、モニター
　エアームーバー他

OSHIMA OHYO

大島応用化学工業株式会社

本社　大阪市旭区太子橋1-15-22　Tel.06(6954)6521　Fax.06(6954)6480
●支店 東京、名古屋、新居浜 ●工場 新居浜、寝屋川 ●営業所 四日市、岡山、広島、宇部、福岡

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・綱野（07727）2－2220
舞鶴（0773）76－0133

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332－6861
TEL 東京（03）3272－8501

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443－6181

光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）6252－6000

東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83－2381
TEL 大阪（06）6877－1581

Kinden CORPORATION

May I Help You?

株式会社きんでん ネットワーク工事担当
架空配電設備
地中配電設備
C・C・BOX　情報BOX

株式会社きんでん 電力工事担当
発・変電設備
架空・地中送電設備
土木・舗装・造園・測量

株式会社きんでん 情報通信(広域)工事担当
CATV設備
移動体無線通信設備
光通信設備

株式会社きんでん 情報通信設備(構内)担当
データ通信設備
統合ネットワーク設備
電話・交換機設備
LAN設備　構内AV設備

株式会社きんでん 内装設備担当
システム天井
OAフロア インテリア内装
小規模建築

株式会社きんでん 空調・衛生設備担当
空気調和設備
給排水・衛生設備
クリーンルーム設備
環境関連設備

株式会社きんでん 一般電気設備担当
ビル・工場電気設備
施設電気設備
プラント電気設備

株式会社きんでん 計装設備担当
ビル・工場計装設備
パワープラント計装設備
HACCP設備

株式会社きんでん 国際事業担当
アジアエリア
太平洋エリア
中近東エリア
他海外ネットワーク

株式会社きんでん エネルギー有効利用システム担当
地域冷暖房設備
コージェネレーション設備
氷蓄熱空調設備

株式会社きんでん 防災・防犯設備担当
自動火災報知設備
避難誘導設備
防犯設備

株式会社きんでん 新エネルギーシステム担当
太陽光発電設備
風力発電設備
燃料電池発電設備

株式会社きんでん ファシリティ・マネジメント担当
設備診断
設備改善提案
リニューアル・メンテナンス

きんでんがお手伝いできることは結構多い。

私たちの事業分野にご注目ください。すでにご存じの人もいらっしゃるでしょうが
おや、こんなこともやっていたのかという人もいらっしゃるはずです。
きんでんは、「情報」「エネルギー」「環境」をテーマに技術領域を拡げ
それらの技術を有機的に結合させることで新たなる価値を創造する
総合設備エンジニアリング事業を展開しています。
そのなかで生まれたのがこれらの事業です。その多彩さは
きんでんが現代の都市や社会が求めるニーズにフレキシブルにお応えしている証と言えるでしょう。
今日の都市をより豊かにするために、明日の社会をさらに創造的にするために。
私たち きんでんが、いろいろとお手伝いしていきたいと思います。

いろんな技術(まじめ)が集まって、きんでんです。

株式会社 きんでん

本　店　大阪市北区本庄東2丁目3番41号
東京本社　東京都品川区東五反田5丁目25番12号

国内事業所185ヵ所／海外事務所12ヵ所／国内関係会社19社／海外関係会社4社／海外合弁会社7社

雑誌 03379-9

Vol.80巻930号　平成11年9月1日発行　毎月1回1日発行　昭和24年3月19日第3種郵便物認可　ISSN 0912-8182

社団法人 日本建築協会　〒530-0004 大阪市北区堂島1-6-20 電話 大阪06(6348)0606 FAX06(6348)0634 振替口座 00170-7-3179

定価1,200円（●本体1,143円●消費税57円●送料共）正会員の購読料は会費に含めて徴収